志木市遺跡調査会調査報告　第11集

新邸遺跡第８地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

２００７

埼玉県志木市遺跡調査会

9 号住居跡

9 号住居跡遺物出土状況

1号方形周溝墓

5号溝跡

6号溝跡

はじめに

志木市遺跡調査会
会長　柚木　博

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、面積9.06㎢を有し、人口約6万8千人を擁する自然と文化の調和する都市です。この地には現在、我々の先人たちが遺した足跡とも言うべき埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が14遺跡確認されています。

そして、これらの遺跡は、地理的には武蔵野台地縁辺部に集中して分布し、同時に当市では、本町・柏町・幸町地区といったマンション・アパート・個人住宅建設等の開発事業が盛んに進められている地区でもあります。そのため、当市では、こうした遺跡内で開発事業が計画される場合、文化財保護の重要性を理解していただき、現状保存・盛土保存・記録保存という3段階の保存対策で対処しています。特に、記録保存については、文化財にとっては最終段階での保存であり、これが発掘調査になります。志木市では、年間およそ30件ほどの開発事業については、事前に確認調査を実施し、盛土保存や記録保存を実施している状況と言えます。

さて本書は、平成15年度に発掘調査が実施された新邸遺跡第8地点の発掘調査報告書です。

新邸遺跡については、昭和60年の第1地点の発掘調査を最初に現在まで9地点の調査が実施されており、今までの調査の結果、新邸遺跡は、縄文時代早期から近世にかけての幅広い時期の複合遺跡であることが判明してきました。特に、本遺跡内には、学史的にも有名な新邸貝塚がありますが、この貝塚は、過去の第1・2地点の調査から、縄文時代前期（黒浜式期）の住居跡内に貝層をもつ貝塚であることが解明されています。

今回報告する新邸遺跡第8地点では、縄文時代から近世・近代にかけての多くの遺構・遺物が発見されました。中でも、古墳時代前期の方形周溝墓は、通常のものには見られない柱穴が方台部と呼ばれる部分から配置良く見つかっており、建物跡の可能性も考えられるようです。古墳時代後期では、当地域から初めて住居跡が発見されました。さらに、本市では初めて野火止用水跡と考えられる遺構の調査が実施されたのも特筆すべきことと言えるでしょう。

以上、ここではほんの数例でしか紹介できませんが、本地点からの貴重な発見により、志木市の歴史にまた新たなる1ページが追加されたことは大変喜ばしいことであり、同時に本書が郷土の歴史研究のために広く活用されるよう切に願っております。

最後になりましたが、本書の刊行にあたり、格別のご理解とご協力を頂いた事業主体者、そして深いご理解とご協力を賜りました地元の多くの方々並びに関係者に対し、心から感謝申し上げます。

例　言

1．本書は、埼玉県志木市に所在する新邸遺跡（県№09－008）の第８地点の発掘調査報告書である。
2．発掘調査及び整理作業は、志木市教育委員会の斡旋により、開発主体者から志木市遺跡調査会が委託を受け実施した。
3．本書の作成において、編集は尾形則敏・深井恵子が行い、執筆は下記以外を尾形則敏が行った。
　なお、中世以降の遺構・遺物については朝霞市教育委員会の野沢　均氏に、『舘村旧記』の大塚千手堂については志木市文化財保護審議会会長の神山健吉氏にご教示を頂いた。
　　深井恵子　　第３章第２節の遺構
　　青木　修　　第３章第１節
4．27号土坑出土の“MARUKOSI”の刻印レンガについては、丸越工業株式会社（石川県七尾市石崎町）販生推進グループ技術開発・品質保証担当の松浦一弘氏にご教示頂いた。
5．自然科学分析については、株式会社パレオ・ラボ（代表取締役　藤根　久）に依頼し、その結果を付編に併載するものとする。
6．遺物の実測は、青木　修・星野恵美子・松浦恵子・山口優子が行い、遺構のデジタルトレースは深井恵子・青木　修・遠藤英子が、遺物のトレースは深井恵子が行った。写真撮影は青木　修が行った。
7．各遺跡の発掘調査及び整理作業・報告書作成には、以下の諸機関・諸氏のご教示・ご援助を賜った。記して感謝する次第である（敬称略）。
埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課・（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団・埼玉県立埋蔵文化財センター・朝霞市教育委員会・朝霞市博物館・新座市教育委員会・和光市教育委員会・富士見市教育委員会・富士見市立水子貝塚資料館・志木市立志木第四小学校・丸越工業株式会社
荒井幹夫・上田　寛・江原　順・加藤秀之・片平雅俊・隈本健介・栗原和彦・小出輝雄・肥沼正和・小滝　勉・渋谷寛子・齋藤欣延・笹森健一・斯波　治・鈴木一郎・高橋　学・照林敏郎・根本　靖・野沢　均・早坂廣人・藤波啓容・堀　善之・松本富雄・三田光明・柳井彰宏・山田尚友・山本　龍・和田晋治
開発主体者　　個　人

凡　例

1．本報告書で使用した地図は以下のとおりである。
　第１図　1：10,000「志木市全図」アジア航測株式会社調製　平成９年３月志木市1：2,500をデジタルマップにより縮図編集
　第２図　1：2,500　ゼンリン電子住宅地図　デジタウン「埼玉県志木市」平成15年８月発行　株式会社ゼンリン
2．挿図版の縮尺は、それぞれに明記した。
3．遺構挿図版中の水糸レベルは、海抜標高を示す。
4．ピット・掘り込み内の数値は、床面もしくは確認面からの深さを示し、単位はcmである。また、同一遺構内にあるピットでも、おそらく後世のピットと思われるものには、数値を省略した。
5．遺構挿図版中のドットは遺物出土位置を示し、その番号は遺物挿図版中の遺物番号と一致する。
6．遺構挿図版中のスクリーントーンについては、各挿図版内にその内容を示したが、遺物挿図版中のスクリーントーンは土器の赤彩範囲を示す。石器の斜線部は節理面を示す。
7．遺構の略記号は、以下のとおりである。
　方＝方形周溝墓　　H＝古墳時代前・後期の住居跡　　D＝土坑　　M＝溝跡
　W＝井戸跡　　P＝ピット

志木市遺跡調査会組織

〈役　　員〉

会　　長	細田信良（志木市教育委員会教育長）（平成12年7月～平成17年6月）
	柚木　博（　　〃　　）（平成17年10月～）
会長職務代理者	新井　茂（　　〃　　）（平成17年7月～9月）
副　会　長	白砂正明（志木市教育委員会教育政策部長）（平成15年4月～平成16年3月）
	杉山　勇（　　〃　　）（平成16年4月～平成17年3月）
	新井　茂（　　〃　　）（平成17年4月～6月、10月～）
理　　事	神山健吉（志木市文化財保護審議会会長）
	井上國夫（志木市文化財保護審議会委員）
	高橋長治（　　〃　　）
	高橋　豊（　　〃　　）
	内田正子（　　〃　　）
	土橋春樹（志木市教育委員会教育政策部参事兼生涯学習課長）（平成12年4月～平成16年3月）
	大熊章只（生涯学習課長）（平成16年4月～平成18年3月）
	宮川英夫（教育政策部参事兼生涯学習課長）（平成18年4月～平成19年3月）
	吉田　洋（生涯学習課長）（平成19年4月～）

〈監　　査〉

監　　事	福田鮎子（社会教育指導員）（平成14年4月～平成16年3月）
	金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年4月～8月、平成15年8月～平成16年3月）
	荒井正夫（生涯学習課主査）（平成14年8月～平成15年7月）
	樺嶋秀俊（生涯学習課主任）（平成16年4月～平成18年5月）
	並木貴子（　　〃　　）（平成16年4月～平成17年3月）
	古屋大輔（　　〃　　）（平成17年4月～平成18年5月）
	原田隆一（志木市教育委員会教育総務課長）（平成18年6月～）
	鈴木幸治郎（志木市出納室長）（平成18年6月～）

〈事　務　局〉

担　当　課	志木市教育委員会教育政策部生涯学習課
理事兼事務局長	土橋春樹（教育政策部参事兼生涯学習課長）（平成12年4月～平成16年3月）
	大熊章只（生涯学習課長）（平成16年4月～平成18年3月）
	宮川英夫（教育政策部参事兼生涯学習課長）（平成18年4月～平成19年3月）
	吉田　洋（生涯学習課長）（平成19年4月～）
事　務　局	金子雅佳（生涯学習課主幹）（平成14年8月～平成16年3月、平成14年8月～平成17年3月）
	醍醐一正（　　〃　　）（平成16年4月～平成18年3月、平成18年8月～平成19年3月）
	内田　誠（　　〃　　）（平成18年4月～7月）
	今野美香（　　〃　　）（平成19年4月～） ※平成15年8月～平成19年3月は主査
	関根正明（生涯学習課主査）（平成9年4月～平成15年7月）
	佐々木保俊（　　〃　　）（昭和61年4月～）
	尾形則敏（生涯学習課主任）（昭和62年4月～）
	倉部恵子（　　〃　　）（平成14年4月～平成18年3月）
	松永真知子（　　〃　　）（平成18年4月～）

〈発掘調査〉

調査担当者	尾形則敏
調　査　員	深井恵子
調査補助員	青木　修
調査協力員	遠藤英子・奥野恭子・鎌本あけみ・鈴木浩子・高田美智子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子
重機オペレータ	田中三二（大塚屋商店）

〈整理作業〉

調　査　員	深井恵子
調査補助員	青木　修
整理協力員	遠藤英子・奥野恭子・鈴木浩子・高野美子・星野恵美子・松浦恵子・山口優子

目　次

巻頭図版／はじめに
例　言／凡　例／志木市遺跡調査会組織／目　次／挿図目次／表 目 次／図版目次
第1章　遺跡の立地と環境 …… 1
　第1節　市域の地形と遺跡 …… 1
　第2節　遺跡の概要 …… 9
第2章　発掘調査の概要 …… 12
　第1節　調査に至る経過 …… 12
　第2節　調査の方法と経過 …… 13
　第3節　基本層序 …… 16
第3章　検出された遺構と遺物 …… 17
　第1節　旧石器時代 …… 17
　　（1）概　要 …… 17
　　（2）土　坑 …… 17
　　（3）ピット …… 24
　第2節　古墳時代前・後期 …… 24
　　（1）概　要 …… 24
　　（2）住居跡 …… 25
　　（3）方形周溝墓 …… 39
　　（4）土　坑 …… 39
　　（5）ピット …… 42
　第3節　中世以降 …… 47
　　（1）概　要 …… 47
　　（2）土　坑 …… 47
　　（3）井戸跡 …… 49
　　（4）溝　跡（野火止用水跡） …… 49
　第4節　遺構外出土遺物 …… 57
第4章　調査のまとめ …… 61
　第1節　古墳時代前期の遺構・遺物について …… 61
　第2節　古墳時代後期の9号住居跡について …… 65
　第3節　野火止用水跡について …… 66
　第4節　周辺の歴史環境と野火止用水の終焉について …… 69
図　版
報告書抄録

［付　編］　自然科学分析
　Ⅰ．赤色塊の成分分析 …… 75
　Ⅱ．出土人骨について …… 77

挿図目次

第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20000）…… 2
第２図　新邸遺跡の調査地点（1／3000）…… 10
第３図　試掘時の遺構確認状況（1／400）…… 12
第４図　遺構分布図（1／150）…… 14
第５図　基本層序（1／50）…… 16
第６図　土坑１（1／60）…… 22
第７図　土坑２（1／60）…… 23
第８図　土坑・ピット出土遺物（1／3）…… 23
第９図　２号住居跡（1／60）…… 26
第10図　２号住居跡出土遺物（1／3）…… 27
第11図　３号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3）…… 28
第12図　４号住居跡（1／60）…… 29
第13図　４号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 30
第14図　５号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）…… 31
第15図　６号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）…… 32
第16図　７号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）…… 33
第17図　８号住居跡（1／60）…… 34
第18図　８号住居跡出土遺物（1／4・1／3）…… 35
第19図　９号住居跡・カマド（1／60・1／30）…… 36
第20図　９号住居跡遺物出土状態（1／60・1／30）…… 37
第21図　９号住居跡出土遺物（1／4）…… 38
第22図　１号方形周溝墓（1／60）…… 40
第23図　１号方形周溝墓出土遺物（1／3）…… 41
第24図　土坑（1／60）…… 41
第25図　ピット出土遺物（1／3）…… 42
第26図　土坑（1／30・1／60）…… 48
第27図　27号土坑出土遺物（1／4）…… 49
第28図　５号溝跡（1／60）…… 51
第29図　６号溝跡（1／60）…… 53
第30図　５号溝跡出土遺物（1／3・4／5）…… 55
第31図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3）…… 58
第32図　遺構外出土遺物２（1／3・1／1）…… 59
第33図　志木市柏町地区の概要図 …… 67
第34図　野火止用水断面復元模式図（1／60）…… 68
第35図　赤色塊の蛍光Ｘ線スペクトル図及びＸ線回折スペクトル図 …… 76

表目次

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧…… 1
第２表　志木市の時代別にみた考古資料一覧（１）…… 4
　　志木市の時代別にみた考古資料一覧（２）…… 5
　　志木市の時代別にみた考古資料一覧（３）…… 6
第３表　志木市の発掘調査報告書一覧 …… 7
第４表　新邸遺跡調査一覧…… 10
第５表　発掘調査工程表 …… 15
第６表　２号住居跡出土遺物一覧 …… 42

第７表　３号住居跡出土遺物一覧 …… 43
第８表　４号住居跡出土遺物一覧 …… 43
第９表　５号住居跡出土遺物一覧 …… 44
第10表　６号住居跡出土遺物一覧 …… 44
第11表　７号住居跡出土遺物一覧 …… 44
第12表　８号住居跡出土遺物一覧 …… 45
第13表　９号住居跡出土遺物一覧（１） …… 45
　　９号住居跡出土遺物一覧（２） …… 46
第14表　１号方形周溝墓出土遺物一覧 …… 46
第15表　ピット出土遺物一覧 …… 46
第16表　５号溝跡出土遺物一覧（１） …… 55
　　５号溝跡出土遺物一覧（２） …… 56
第17表　遺構外出土の石器一覧 …… 60
第18表　遺構外出土の縄文土器一覧 …… 60
第19表　古墳時代前期の住居跡の特徴 …… 61
第20表　分析顕微鏡による蛍光Ｘ線分析結果（半定量分析） …… 75
第21表　出土人骨観察表 …… 78

図版目次

図版１　１．調査区近景　２．確認調査風景　３．表土剥ぎ風景　４．基本層序　５．25号土坑
　　６．26号土坑　７．28号土坑　８．29号土坑
図版２　１．30号土坑　２．32号土坑　３．33号土坑　４．35号土坑　５．36号土坑　６．37号土坑
　　７．38号土坑　８．39号土坑
図版３　１．40号土坑　２．41号土坑　３．42号土坑　４．43号土坑　５．44号土坑　６．45号土坑
　　７．46・47号土坑　８．調査風景
図版４　１．２号住居跡　２．２号住居跡凸堤　３．２号住居跡粘土板炉　４．３号住居跡
　　５・６．３号住居跡遺物出土状態　７．４号住居跡　８．４号住居跡貯蔵穴
図版５　１．５号住居跡　２．６号住居跡　３．６号住居跡炉跡付近　４．６号住居跡貯蔵穴
　　５．７号住居跡　６．８号住居跡　７．８号住居跡遺物出土状態　８．８号住居跡貯蔵穴Ａ
図版６　１・２．９号住居跡遺物出土状態　３．９号住居跡貯蔵穴付近
　　４．９号住居跡粘土・ベンガラ出土状態　５．９号住居跡炭化材出土状態
　　６．９号住居跡カマド　７．９号住居跡　８．10号住居跡
図版７　１・２．１号方形周溝墓遺物出土状態　３．１号方形周溝墓南コーナー
　　４．１号方形周溝墓南西溝　５．１号方形周溝墓南東溝　６．１号方形周溝墓
　　７．31号土坑　８．34号土坑
図版８　１・２．21号土坑人骨出土状態　３．21号土坑　４．22号土坑人骨出土状態　５．23号土坑
　　６．27号土坑遺物出土状態　７．27号土坑　８．２号井戸跡
図版９　１．５号溝跡発掘風景　２・３．５号溝跡礫出土状態　４・５．５号溝跡　６～８．６号溝跡
図版10　１．土坑・ピット出土遺物　２．２号住居跡出土遺物　３．３・５号住居跡出土遺物
図版11　１．４号住居跡出土遺物　２．６号住居跡出土遺物　３．７号住居跡出土遺物
図版12　１．８号住居跡出土遺物　２．９号住居跡出土遺物
図版13　１．１号方形周溝墓出土遺物　２．ピット出土遺物　３．21・27号土坑出土遺物
　　４．５号溝跡出土遺物１
図版14　５号溝跡出土遺物２
図版15　５号溝跡出土遺物３
図版16　遺構外出土遺物
図版17　21・22号土坑出土人骨
図版18　21号土坑出土人骨（破片）

第１章　遺跡の立地と環境

第１節　市域の地形と遺跡

志木市は、埼玉県の南西部に位置し、市域はおおよそ南北4.71km、東西4.73kmの広がりをもち、面積は9.06km²、人口約６万８千人の自然と文化の調和する都市である。

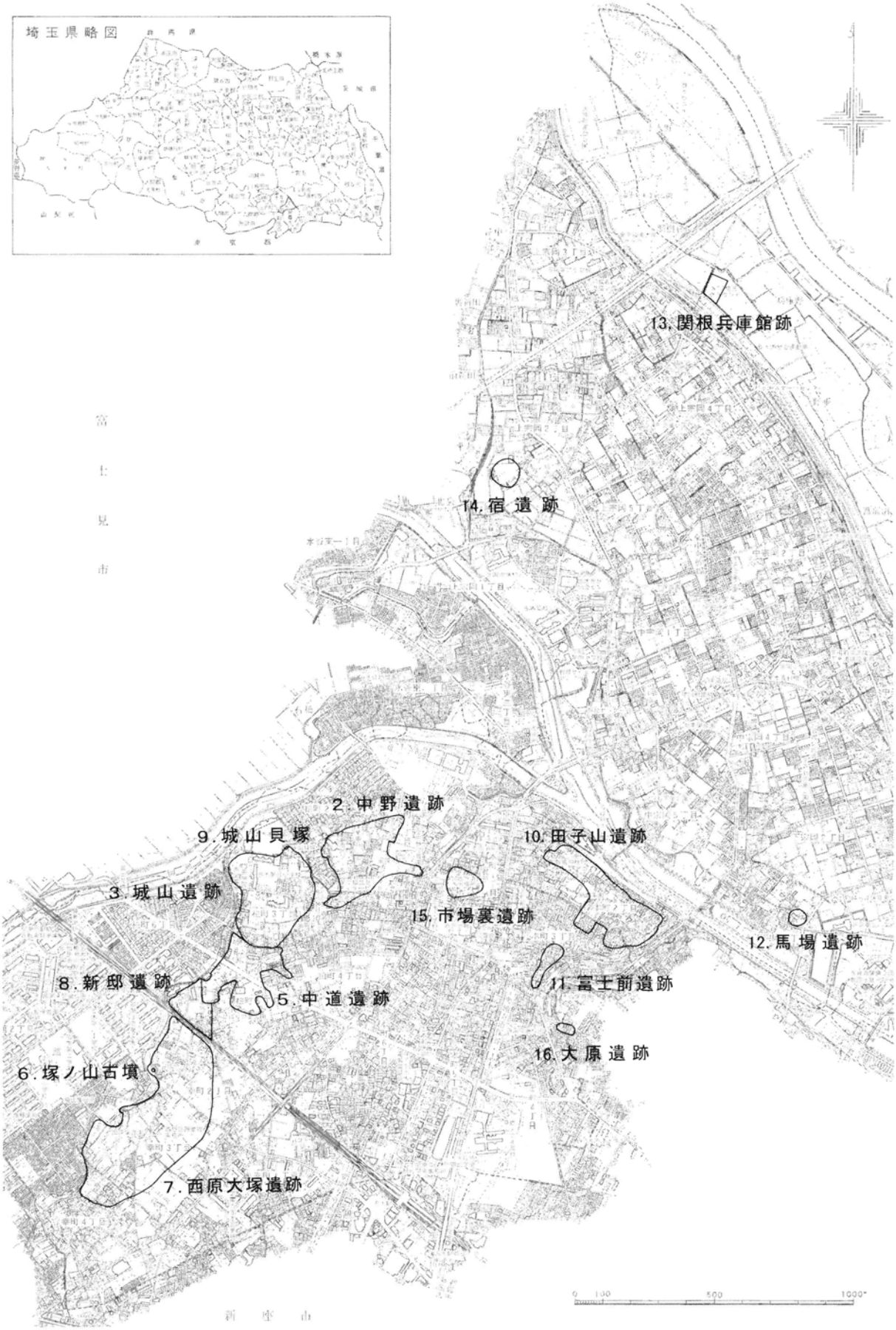
地理的景観を眺めて見ると、市域東部の宗岡地区は、荒川（旧入間川）の形成した沖積低地が拡がり、市域西部の本町・柏町・幸町地区は、古多摩川によって形成された武蔵野台地の上にある。また、市内には東部に荒川、中央に古くは舟運で利用された新河岸川、そして西部から中央に新河岸川と合流する柳瀬川の３本の川が流れている。

こうした自然環境の中で、西原大塚遺跡をはじめ市域の大部分の遺跡は、柳瀬川・新河岸川右岸流域の台地縁辺部に帯状に存在している。遺跡は柳瀬川上流から、西原大塚遺跡（７）、中道遺跡（５）、新邸遺跡（８）、城山遺跡（３）、中野遺跡（２）、市場裏遺跡（15）、田子山遺跡（10）、富士前遺跡（11）、大原遺跡（16）の順に名付けられている。また、荒川・新河岸川が形成した沖積低地でも、馬場遺跡（12）、宿遺跡（14）、関根兵庫館跡（13）のように自然堤防上に存在する遺跡も明らかにされつつあり、

No.	遺跡名	遺跡の規模	地目	遺跡の種類	遺跡の時代	主な遺構	主な遺物
2	中野	60,990 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（早～晩）、弥（後）、古（前～後）、平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器等
3	城山	78,700 ㎡	畑・宅地	城館跡・集落跡	旧石器、縄（草創～晩）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、土坑墓、地下室、井戸跡、溝跡、柏城跡関連、鋳造関連等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、鋳造関連遺物等
5	中道	45,860 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～後）、弥（後）、古（前～後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、土坑墓、地下式坑、溝跡、道路状遺構等	石器、縄文土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭、人骨等
6	塚ノ山古墳	800 ㎡	林	古墳？	古墳？	なし	なし
7	西原大塚	163,930 ㎡	畑・宅地	集落跡	旧石器、縄（前～晩）、弥（後）、古（前・後）、奈・平、中・近世	石器集中地点、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡等	石器、縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、古銭等
8	新邸	16,400 ㎡	畑・宅地	貝塚・集落跡	縄（早～中）、古（前）、中・近世	貝塚、住居跡、土坑、方形周溝墓、井戸跡、溝跡、段切状遺構、ピット群等	石器、貝、縄文・弥生土器、土師器、陶磁器、古銭等
9	城山貝塚	900 ㎡	林	貝塚	縄（前）	斜面貝塚	石器、縄文土器、貝
10	田子山	62,200 ㎡	畑・宅地	集落跡	縄（草創～晩）弥（後）、古（後）、奈・平、中・近世、近代	住居跡、土坑、方形・円形周溝墓、ローム採掘遺構、溝跡等	縄文・弥生土器、土師器、須恵器、陶磁器、炭化種子等
11	富士前	7,100 ㎡	宅地	集落跡	弥（後）～古（前）	住居跡	弥生土器、土師器
12	馬場	2,800 ㎡	畑	集落跡	古（前）	住居跡？	土師器
13	関根兵庫館跡	4,900 ㎡	グランド	館跡	中世	不明	なし
14	宿	7,700 ㎡	田	館跡	中世	溝跡・井桁状構築物	木・石製品
15	市場裏	10,700 ㎡	宅地	集落跡・墓跡	弥（後）～古（前）、近代	住居跡・方形周溝墓	弥生土器、土師器、かわらけ
16	大原	1,700 ㎡	宅地	不明	近世以降？	溝跡	なし
合計		464,680 ㎡					

平成19年３月31日 現在

第１表　志木市埋蔵文化財包蔵地一覧



第１図　市域の地形と遺跡分布（1／20000）

将来的には新たな遺跡が相次いで発見される可能性がある。なお、市内の遺跡総数は、現在前述した12遺跡に塚ノ山古墳（６）、城山貝塚（９）を加えた14遺跡である（第１図）。

次に市内の遺跡を時代順に概観してみることにする。

志木市内に最初に人が住みついたのは、**旧石器時代**からで、この時代の遺跡としては、柳瀬川右岸の西原大塚・中道・城山・中野遺跡がある。中道遺跡では、昭和62（1987）年の富士見・大原線（現ユリノキ通り）の工事に伴う調査により、立川ローム層のⅣ層上部・Ⅵ層・Ⅶ層で文化層が確認されており、礫群、石器集中地点が検出されている。これにより、黒曜石製のスクレイパーやナイフ形石器、安山岩や凝灰岩の石核や剥片などが発見されている。

平成11～14年度にかけて発掘調査が実施された中野遺跡第49地点からも立川ローム層のⅣ層下部から、黒曜石・頁岩の石核・剥片が約60点出土している。

縄文時代になると、草創期では、平成４年度に発掘調査が実施された城山遺跡第16地点から爪形文系土器１点、平成10年度の田子山遺跡第51地点から有茎尖頭器１点が出土している。

早期では、田子山遺跡から撚糸文・沈線文・条痕文系土器、富士前・城山遺跡から撚糸文系土器が数点出土している。住居跡としては、西原大塚・新邸遺跡の前期黒浜式期のものが最古に位置付けられ、それぞれ１軒検出されている。そのうち、新邸遺跡のものは貝層をもつ住居跡である。また、平成２年度に市指定文化財に認定された城山貝塚も縄文海進期にあたるこの頃の時代に形成された斜面貝塚と考えられる。

遺跡が最も増加するのは、中期中葉から後葉の勝坂式～加曽利Ｅ式期である。西原大塚遺跡では、多くの住居跡が環状に配置する可能性のあることが指摘されている。その他、中道・城山・中野・田子山遺跡からも住居跡・土坑などが発見されている。中期末葉からは遺跡が減少し、現在のところ西原大塚遺跡から敷石をもつ住居跡が１軒確認されるのみである。

さらに後期では、西原大塚遺跡から堀之内式期の住居跡１軒と加曽利Ｂ式期の住居跡１軒、遺物集中地点１ヶ所が検出されている。また、その他の遺構としては、田子山遺跡第31地点において、土坑１基が検出され、下層から称名寺Ⅰ式期の土器、上層からⅡ式の特徴をもつ土器が出土している。西原大塚遺跡第54地点でも２基の土坑が検出されている。

晩期になると、中野・田子山遺跡から安行ⅢＣ式・千網式の土器片が少量発見されるにとどまり、以降市内では遺跡が希薄なる傾向にある。

弥生時代では、現在のところ、前・中期に遡る遺跡は存在しない。大部分が後期末葉から古墳時代前期にかけての遺跡であろうと考えられる。その中で、田子山遺跡第31地点の21号住居跡は後期中葉に比定される可能性があり、その住居跡からは、多数の土器をはじめ、大量の炭化種子（イネ・アワ・ダイズなど）、炭化材が出土し、当時の食糧事情を考える上で重要である。富士前遺跡では、志木市史にも掲載されているが、不時の発見に伴い、籠目痕をもつ壺形土器をはじめとした多くの土器が発見されている。

西原大塚遺跡では後期末葉から古墳時代前期にかけての住居跡が500軒以上確認されており、市内最大の集落跡であることが判明している。特に、122号住居跡からは、全国的にも稀な「イヌ」を象ったと思われる動物形土製品が出土している。

当時の墓域の可能性として、方形周溝墓が、昭和62（1987）年以降、西原大塚・市場裏・田子山遺跡の３遺跡から確認されてきたが、最新では、本報告の新邸遺跡第８地点の１基と平成18年に発掘調査が

1. 旧石器時代

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引
2	中　野	第49地点	石器集中地点 1ヵ所、ナイフ形石器、角錐状石器など	No.29
3	城　山	第42地点	石器集中地点 2ヵ所、石器・礫	No.33
7	西原大塚	区画整理	石器集中地点 2カ所	No.19
		市史掲載	ナイフ形石器、尖頭器など	1984『志木市史 原始・古代資料編』
		第110地点	石器集中地点 2ヵ所、ナイフ形石器・剥片・石核	No.32

2. 縄文時代

2	中　野	第２地点	包含層出土土器	中　期	No. 2
		第16地点	集石 1基	不　明	No.17
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 9基、炉穴 5基、土器、石器	早～晩期	No.25
		第43地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 10基、炉穴 1基、遺物包含層	早期～後期	No.29
3	城　山	A地点	住居跡 1軒	前 期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第３地点	包含層出土土器	早～後期	No. 7
		第４地点	埋甕 1基	中 期	No. 8
		第９地点	土坑 1基	不 明	No.11
		第11地点	住居跡 1軒、土坑 3基、炉穴 1基、土器	前・中期	No.12
		第12地点	包含層出土土器	早～晩期	No.17
		第16地点	包含層出土土器、集石 1基、土器(爪形文系など)、石器	草創～後期	No.27
		第29地点	土坑 1基	早～後期	No.18
		第32地点	包含層出土土器	早～中期	No.18
		第34地点	包含層出土土器	早～中期	No.20
		第35地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		第42地点	土坑 21基、炉穴 1基、土器・石器	早～中期	No.33
5	中　道	第２地点	住居跡 3軒、土坑 8基、集石 2基、土器、石器	中 期	No. 6
		第12地点	住居跡 2軒、土器	中 期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	中 期	No.13
		第21地点	包含層出土土器	前 期	No.17
		第27地点	包含層出土土器	前～後期	No.22
		第41地点	包含層出土土器	早～後期	No.20
		第44地点	包含層出土土器	早～後期	No.21
7	西原大塚	第１地点	住居跡 4軒、土坑 8基、土器、石器	中 期	No. 1
		第３地点	住居跡 5軒、土坑 2基、土器	中 期	No. 2
		第８地点	住居跡 1軒、土坑 24基、土器、石器	中 期	No. 9
		第34地点	住居跡 3軒、土坑 6基、土器、石器	中 期	No.18
		第39地点	住居跡 3軒、土器、石器	中 期	No.21
		第43地点	住居跡 10軒、土坑 22基、土器、石器	中 期	No.24
		第47地点	土坑 1基、遺構外出土土器	中 期	No.26
		第54地点	土坑 7基、土器	中・後期	No.28
		第65地点	遺構外出土土器・石器	前～後期	No.30
		第67地点	住居跡 8軒、土坑 8基、集石 1基、土器・石器多数	中期	No.34
		第110地点	土坑 1基、集石 1基、土器片	中期	No.32
8	新　邸	第１地点	住居跡 1軒（貝塚）、土坑 2基、包含層出土土器	前・中期	No. 3
		第２地点	住居跡 1軒（第1地点と同一）、土器、石器、貝類	前 期	No. 4
		第３地点	包含層出土土器	早・前期	No.10
10	田子山	第４地点	土坑 1基	不 明	No.13
		第10地点	住居跡 1軒、土器	中 期	No.17
		第19地点	土坑 2基、遺構外出土土器	早～後期	No.22
		第21地点	遺構外出土土器片	早～後期	No.22
		第25地点	炉穴 1基、遺構外出土土器	早～後期	No.22
		第32地点	土坑 1基、遺構外出土土器	早～中期	No.16
		第37地点	遺構外出土土器	早 期	No.16
		第39地点	土坑 3基、集石 2基、炉穴 2基、土器	早 期	No.18
		第47地点	遺構外出土土器	早・前期	No.20
		第49地点	遺構外出土土器	早 期	No.20
		第69地点	集石 1基	中 期	No.26
		第78地点	集石 1基、土器	前 期	No.28
		第81地点	遺構外出土土器・石器	早期～中期	No.30

3. 弥生時代

2	中　野	第２地点	住居跡 2軒、土器	後 期	No. 2
		第９地点	住居跡 1軒、土器	後 期	No. 8
		第25地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土器	後 期	No.25
		第49地点	住居跡 6軒、土器	後 期	No.29
3	城　山	B地点	住居跡 1軒	後 期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第４地点	住居跡 2軒、土器	後 期	No. 8
		第35地点	住居跡 1軒、土器、砥石	後 期	No.20
7	西原大塚	第１地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 1
		第２地点	住居跡 3軒、土器	後期～古墳	『志木市史 原始・古代資料編』
		第３地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No. 2
		第４地点	住居跡 3軒、土器、砥石	後期～古墳	No. 4
		第６地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 8
		第７地点	小竪穴状遺構 1基	後期～古墳	No.10
		第８地点	住居跡 13軒、方形周溝墓 1基、掘立柱建物跡 1基	後期～古墳	No. 9
		第９地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 9
		第10地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No. 9
		第14地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.17
		第21地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.22

第２表　志木市の時代別にみた考古資料一覧（１）

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引	
7	西原大塚	第32地点	住居跡 2軒、土器	後期～古墳	No.16
		第36地点	住居跡 4軒、土器	後期～古墳	No.20
		第37地点	住居跡 7軒、土器	後期～古墳	No.21
		第39地点	住居跡 1軒、方形周溝墓 1基、土器、石器	後期～古墳	No.21
		第43地点	住居跡 9軒、土器	後期～古墳	No.24
		第45地点	住居跡 72軒、方形周溝墓 1基、土器（鳥型土器）	後期～古墳	No.23
		第47地点	溝跡 1本	後期～古墳	No.26
		第54地点	方形周溝墓 1基、土器	後期～古墳	No.28
		第65地点	住居跡 3軒、土器、土師器、石器	後期～古墳	No.30
		第67地点	住居跡 8軒、掘立柱建築遺構 1棟、土器・石器	後期～古墳	No.34
		区画整理	住居跡 30軒、方形周溝墓 4基（記述のみ）	後期～古墳	No.19
10	田子山	第１地点	住居跡 1軒、土器	後 期	No. 9
		第４地点	住居跡 1軒、土器	後 期	No.13
		第10地点	住居跡 5軒、土器	後 期	No.17
		第19地点	遺構外出土土器	後 期	No.22
		第31地点	住居跡 17軒（21号住居跡記述のみ）	後 期	『田子山富士』文化財第22集
		第32地点	方形周溝墓 1基	後期～古墳	No.16
15	市場裏	第１地点	住居跡 1軒、土器	後期～古墳	No.17
		第２地点	方形周溝墓 2基、土器小片	後期～古墳	No.17
		第３地点	方形周溝墓 1基、土器小片	後期～古墳	No.14

4. 古墳時代

2	中　野	第２地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No. 2
		第７地点	住居跡 1軒	後 期	No.10
		第12地点	住居跡 1軒、土師器多数	後 期	No.12
		第16地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No.17
		第18地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃多数	後 期	No.14
		第25地点	住居跡 10軒、土師器多数	後 期	No.25
		第31地点	住居跡 1軒、土師器、鉄鏃、砥石	後 期	No.15
		第41地点	住居跡 1軒、土師器多数、紡錘車	後 期	No.18
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 2基、土師器	後 期	No.29
		第50地点	住居跡 1軒	後 期	No.24
3	城　山	B地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後 期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第1・2地点	住居跡 54軒、土師器多数、須恵器、鉄・土製品	前・後期	No. 5
		第３地点	住居跡 4軒、土師器	前・後期	No. 7
		第４地点	住居跡 1軒、土師器多数	後 期	No. 8
		第６地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師器多数	後 期	No.10
		第7・9地点	住居跡 7軒、土師器多数、鉄製品	中・後期	No.11
		第11地点	住居跡 3軒、土師器	前・後期	No.12
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No.17
		第15地点	住居跡 6軒、土師器	後 期	No.27
		第25地点	住居跡 2軒、土師器、初期須恵器	中・後期	No.16
		第29地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後 期	No.18
		第34地点	住居跡 3軒、土師器	後 期	No.20
		第35地点	住居跡 1軒、土師器多数	後 期	No.20
		第42地点	住居跡 16軒、土師器・須恵器・土製品・鉄製品多数	後 期	No.33
5	中　道	第２地点	住居跡 5軒、土師器	後 期	No. 6
		第12地点	住居跡 3軒、土師器	後 期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No.13
		第21地点	住居跡 2軒、溝跡 1本、土師器、鉄製品（鎌完形１点）	後 期	No.17
		第33地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	後 期	No.16
		第36地点	住居跡 1軒、土師器	前 期	No.18
		第37地点	住居跡 1軒、土師器多数、須恵器小片、土製品	中 期	No.18
7	西原大塚	市史掲載	土師器	前 期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第11地点	方形周溝墓 1基、壷棺 1基、土師器	前 期	No.11
		第43地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No.24
		第45地点	住居跡 2軒、土師器	後 期	No.23
		第111地点	住居跡 1軒、土師器	前 期	No.31
		第110地点	住居跡 7軒、壺・甕・高坏・鉢形土器	前 期	No.32
8	新　邸	第２地点	住居跡 1軒、土師器	前 期	No. 4
10	田子山	第５地点	住居跡 １軒、土師・須恵器、炭化種子（ヤマモモ多数）	後 期	No.13
		第13地点	住居跡 1軒、土師器（暗文土器１点あり）	後 期	No.17
		第29地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	後 期	No.15
		第48地点	住居跡 1軒、土師器（続比企型坏あり）	後 期	No.20
		第69地点	住居跡 1軒、土師器	後 期	No.26
11	富士前	市史掲載	土師器多数	前 期	『志木市史 原始・古代資料編』
		第15地点	住居跡 1軒、土師器（元屋敷系高坏あり）	前 期	No.20
12	馬　場	市史掲載	土師器（S字甕か）	前 期	『志木市史 原始・古代資料編』

5. 奈良・平安時代

2	中　野	第２地点	住居跡 1軒、須恵器	8c 後半	No. 2
		第16地点	住居跡 3軒、須恵器	9c 中葉	No.17
		第25地点	住居跡 2軒	平安時代	No.25
		第41地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品、転用紡錘車	9c 後半	No.18
		第43地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄滓	9c 前半	No.20
		第49地点	住居跡 1軒、土坑 5基、土師・須恵器、砥石	9c 中葉～後葉	No.29
3	城　山	第1・2地点	住居跡 6軒、灰釉陶器、土師・須恵器多数、鉄・石製品	8 ～10c	No. 5
		第４地点	土坑 2基、灰釉陶器、須恵器（新開・栗谷ツ産）	10c 前半	No. 8
		第７地点	住居跡 1軒、灰釉陶器	9c か？	No.11

第２表　志木市の時代別にみた考古資料一覧（２）

No.	遺跡名	地点名	掲載された主な遺構・遺物	報告書一覧No.及び資料索引	
3	城　山	第11地点	住居跡 1軒	平安時代	No.12
		第16地点	住居跡 1軒、土師・須恵器	平安時代	No.27
		第29地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第42地点	住居跡 5軒、土坑 13基、ピット 4本、土師器、須恵器、布目瓦、偏向唐草文の軒平瓦、鉄製品	8c 代 9c 後半	No.33
5	中　道	第12地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c 後半	No.13
		第21地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、土師・須恵器	9c 後半	No.17
		第41地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、灰釉陶器片、須恵器、炭化米	9～10c	No.20
		第44地点	土坑 1基	平安～中世	No.21
7	西原大塚	第８地点	住居跡 3軒	平安時代	No. 9
		第34地点	住居跡 1軒	平安時代	No.18
		第67地点	土坑 1基、溝跡 1本、土師器・須恵器小片	平安時代	No.34
10	田子山	第４地点	住居跡 9軒、土師・須恵器	8～10c	No.13
		第５地点	住居跡 4軒、土師・須恵器	8～10c	No.13
		第６地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、刀子、土錘	9c 後半	No.12
		第７地点	住居跡 1軒、布目瓦小片2点、格子目叩き瓦小片1点	8c 後半	No.12
		第19地点	住居跡 1軒、土師・須恵器、鉄製品	9～10c	No.22
		第21地点	住居跡 3軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄製品	9c 代	No.22
		第25地点	住居跡 5軒、土師・須恵器、砥石	9c 後半	No.22
		第29地点	住居跡 1軒、須恵器・布目瓦1点	9～10c	No.15
		第37地点	土坑 2基、須恵器	9～10c	No.16
		第39地点	溝跡 3本、土師・須恵器小片	9c 代	No.18
		第41･42地点	住居跡 1軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・銅製品	9～10c	No.18
		第47地点	住居跡 2軒、土坑 1基、土師・須恵器、鉄・石製品	9c 中頃	No.20
		第49地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	10 c 代	No.20
		第69地点	住居跡 1軒、溝跡 1本、土師・須恵器	9c 中頃	No.26
		第78地点	住居跡 2軒、土師・須恵器	9c 前～後半	No.28
		第81地点	住居跡 1軒、土坑 1基、溝跡 1本、須恵器、鉄製品	9c 後半、 1Mは古墳か？	No.30

6. 中・近世

2	中　野	第２地点	溝跡 1本	不 明	No. 2
		第６地点	溝跡 1本	不 明	No. 8
		第8地点	土坑 1基	不 明	No.10
		第11地点	土坑 1基、陶・磁器小片	18～19c	No.17
		第25地点	土坑 15基、陶・磁器・瓦器小片	近 世	No.25
		第43地点	井戸跡 1基	不 明	No.20
		第49地点	段切状遺構 1ヵ所、井戸跡 4基、土坑 12基、人骨、陶磁器、鉄製品、石製品、板碑など	中・近世	No.29
3	城　山	A地点	溝跡 1本	中 世	『志木市史 原始・古代資料編』
		C地点	柏城跡の大堀跡 1本、陶・磁器	中・近世	『志木市史 中世資料編』
		第1･2地点	柏城跡関連の堀跡 5本、土坑 32基、井戸跡 10基、掘立柱建築跡・ピット群、陶・磁器多数、銅鏡、鉄・石製品	中・近世	No. 5
		第３地点	土坑 16基、溝跡 2本	中・近世	No. 7
		第４地点	土坑 1基	14～15c	No. 8
		第６地点	土坑 7基	中・近世	No.10
		第7･9地点	土坑 3基、土製品	中・近世	No.11
		第11地点	土坑 3基、井戸跡 1基、陶・磁器、板碑、馬歯	中・近世	No.12
		第12地点	土坑 2基、井戸跡 1基、溝跡 5本、陶・磁器、古銭	中・近世	No.17
		第15地点	溝跡 2本（柏城関連）、陶・磁器、かわらけ	中・近世	No.27
		第16地点	井戸跡 2基、溝跡 2本（柏城関連）、陶・磁器、かわらけ、鉄製品（火打金・釘）、板碑	中・近世	No.27
		第25地点	土坑 2基	中・近世	No.16
		第29地点	土坑 11基、溝跡 1本、ピット群、板碑、陶・磁器、馬歯、古銭など	中・近世	No.18
		第35地点	土坑 15基（鋳造土坑1基・溶解炉1基）、井戸跡1基、鋳型、土・鉄製品、陶・磁器、古銭など	中・近世	No.20
		第42地点	土坑 151基、井戸跡8基、溝跡 4本(柏城関連)、ピット群、陶磁器・かわらけ・瓦・鉄製品・銅製品・板碑	中・近世	No.33
5	中　道	第２地点	土坑 4基、土坑墓 2基、地下式坑 2基、溝跡 14本、掘立柱建物跡 4棟、古銭、陶磁器	中・近世	No. 6
		第６地点	土坑 1基、陶・磁器小片	15c 代	No. 8
		第26地点	土坑 6基（土坑墓2基）、掘立柱建物跡、人骨、古銭など	17c 代	No.17
		第27地点	土坑 2基、土坑 2基、陶・磁器	14～15c	No.17
		第36地点	溝跡 2本、ピット群、陶・磁器小片	中・近世	No.18
		第37地点	土坑墓 1基、道路遺構 1本、人骨、青磁盤、古銭	中 世	No.18
		第44地点	溝跡 2本	中・近世	No.21
7	西原大塚	第65地点	遺構外出土陶磁器・土器	中・近世	No. 9
8	新　邸	第１地点	土坑 17基、井戸跡 1基、溝跡 2本	中・近世	No. 3
		第３地点	土坑 1基、溝跡 2本、陶・磁器	中・近世	No.10
10	田子山	第25地点	遺構外出土陶・磁器	中・近世	No.22
		第81地点	遺構外出土陶・土器、泥面子	近世	No.30
16	大　原	第１地点	溝跡 1本	近 世	No.22

7. 近代以降

3	城　山	第35地点	かわらけ 2点	19c 後半	No.20
10	田子山	第31地点	ローム採掘遺構 2カ所	19c 後半	『田子山富士』文化財第22集
		第49地点	土坑 1基	近・現代	No.20
15	市場裏	第３地点	かわらけ 2点	19c 代	No.14

第２表　志木市の時代別にみた考古資料一覧（３）

No.	報　告　書　名	刊行年	シリーズ名	発　刊　者	執　筆　者
1	西原・大塚遺跡発掘調査報告	1975	志木市の文化財第4集	志木市教育委員会	井上國夫・落合静男 谷井　彪・宮野和明
2	西原大塚遺跡第３地点　中野遺跡第２地点発掘調査報告書	1985	志木市遺跡調査会調査報告第1集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
3	新邸遺跡発掘調査報告書	1986	志木市遺跡調査会調査報告第2集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
4	新邸遺跡第２地点　西原大塚遺跡第４地点発掘調査報告書	1987	志木市遺跡調査会調査報告第3集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
5	城山遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第4集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏 神山健吉
6	中道遺跡発掘調査報告書	1988	志木市遺跡調査会調査報告第5集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・尾形則敏
7	城山遺跡長勝院地点発掘調査報告書	1987	志木市の文化財第11集	志木市教育委員会 志木市遺跡調査会 志木ロータリークラブ	佐々木保俊
8	志木市遺跡群Ⅰ	1989	志木市の文化財第13集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
9	志木市遺跡群Ⅱ	1990	志木市の文化財第14集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
10	西原大塚遺跡第７地点　新邸遺跡第３地点　中野遺跡第７地点　中野遺跡第８地点　城山遺跡第６地点発掘調査報告書	1991	志木市の文化財第15集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
11	志木市遺跡群Ⅲ	1991	志木市の文化財第16集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
12	志木市遺跡群Ⅳ	1992	志木市の文化財第17集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
13	中道遺跡第12地点　中道遺跡第13地点　田子山遺跡第４地点　田子山遺跡第５地点発掘調査報告書	1992	志木市の文化財第18集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
14	志木市遺跡群Ⅴ	1993	志木市の文化財第20集	志木市教育委員会	尾形則敏
15	志木市遺跡群Ⅵ	1995	志木市の文化財第21集	志木市教育委員会	尾形則敏
16	志木市遺跡群Ⅶ	1996	志木市の文化財第23集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 深井恵子
17	城山遺跡第12地点　城山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第14地点　中野遺跡第11地点　中野遺跡第16地点　市場裏遺跡第１地点　田子山遺跡第10地点　中道遺跡第21地点　田子山遺跡第13地点　西原大塚遺跡第21地点　市場裏遺跡第２地点　中道遺跡第26地点発掘調査報告書	1996	志木市の文化財第24集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏
18	志木市遺跡群Ⅷ	1997	志木市の文化財第25集	志木市教育委員会	佐々木保俊・尾形則敏 深井恵子
19	西原大塚の遺跡　西原特定土地区画整理事業に伴う発掘調査概報	1998	—	志木市遺跡調査会 西原特定土地区画整理組合	佐々木保俊
20	志木市遺跡群9	1999	志木市の文化財第27集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
21	志木市遺跡群10	2000	志木市の文化財第28集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
22	埋蔵文化財調査報告書 1	2000	志木市の文化財第29集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
23	西原大塚遺跡第45地点発掘調査報告書	2000	志木市遺跡調査会調査報告第6集	志木市遺跡調査会 小松フォークリフト株式会社	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳・上田寛
24	志木市遺跡群11	2001	志木市の文化財第30集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 内野美津江
25	埋蔵文化財調査報告書 2	2001	志木市の文化財第31集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
26	志木市遺跡群12	2002	志木市の文化財第32集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 深井恵子
27	埋蔵文化財調査報告書 3	2002	志木市の文化財第34集	志木市教育委員会	尾形則敏・佐々木保俊 深井恵子・佐々木　潤
28	志木市遺跡群13	2003	志木市の文化財第35集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子
29	中野遺跡第49地点－東京電力志木変電所の埋蔵文化財発掘調査報告－	2004	志木市遺跡調査会調査報告第7集	志木市遺跡調査会	尾形則敏・深井恵子 青木　修
30	志木市遺跡群14	2004	志木市の文化財第36集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子 青木　修
31	西原大塚遺跡第111地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第8集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳
32	西原大塚遺跡第110地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第9集	志木市遺跡調査会	佐々木保俊・内野美津江・宮川幸佳
33	城山遺跡第42地点	2005	志木市遺跡調査会調査報告第10集	志木市遺跡調査会	尾形則敏・深井恵子 青木　修
34	志木市遺跡群15	2006	志木市の文化財第37集	志木市教育委員会	尾形則敏・深井恵子

第３表　志木市の発掘調査報告書一覧

実施された中道遺跡第65地点の１基が新たに追加され、市内では、５遺跡から検出されている。今後は、集落跡との関連の中で注目されるであろう。特に西原大塚遺跡10号方形周溝墓の溝底から一括出土した中に、畿内系の庄内式の長脚高坏が出土していることに注目される。平成11年度に西原大塚遺跡第45地点で発見された一辺20mを超える市内最大規模の17号方形周溝墓が特筆すべきであろう。この方形周溝墓の溝からは、珍しい鳥形土器をはじめ、畿内系の有段口縁壺、吉ヶ谷式系の壺、在地系の壺などと大きく畿内・比企地域・在地の３要素の特徴を示す壺が出土しており、こうした地域に関わる被葬者の人物像が浮き彫りにされたことで、当地域の弥生時代後期から古墳時代前期の歴史を紐解く手がかりになったことは重要である。

古墳時代でも前期末葉から中期になると、遺跡が減少する傾向にある。しかし、本報告の新邸遺跡第８地点から検出された住居跡８軒については、同遺跡第２地点の１号住居跡を含め、古墳時代前期でも比較的に新しい段階に比定される可能性がある。このことから、新邸遺跡で検出された住居跡は、現時点では隣接する西原大塚遺跡から継続し広がった集落跡ではないかと推測される。

中期の遺跡では、中道・城山・中野遺跡から住居跡が発見されている。特に中道遺跡第19号住居跡は、５世紀中葉に比定され、市内最古のカマドをもつ住居跡として注目される。

５世紀末葉になると、遺跡が増加傾向にあり、特に６世紀後半から７世紀後半にかけては、縄文中期を越えるほどの爆発的な増加をみる。こうした集落跡は現在、中道・城山・中野遺跡に比較的に古い５世紀代の住居跡が確認されていることから、柏町地区を中心に存在した集落が、６世紀後半以降、周辺の地域に拡散するという動きを読み取ることができる。

なお、新邸遺跡では本報告の第８地点で初めて古墳時代後期（７世紀中葉）の住居跡が１軒検出されている。この住居跡は、３×3.5mの小型の長方形を呈するもので、焼失住居であり、床面上からは土器・炭化材の他ベンガラ塊が出土している。

現在、５世紀後半から７世紀後半にかけての時期に比定できる住居跡の軒数は、最も多い城山遺跡で120軒を越え、次いで中野遺跡で約50軒、中道遺跡で約15軒、田子山遺跡で約10軒、新邸遺跡で１軒を数える。

また住居跡以外では、平成５年に発掘調査が実施された田子山遺跡第24地点から、６世紀後半以降のものと考えられる4.1×4.7mの不整円形で２ヶ所にブリッジをもつ小型の円形周溝墓が１基確認されている。さらに、同遺跡第81地点の発掘調査を契機に御岳神社を取り囲むように推定約33mの巨大な溝跡の存在が明らかになり、現時点では古墳の周溝ではないかという見方が浮上している。

奈良・平安時代の遺跡は、古墳時代後期以降に拡散した集落内で確認される傾向にあり、田子山遺跡は、この時代の代表とする遺跡として挙げることができる。この遺跡では、住居跡の他、掘立柱建築遺構、溝跡、100基を越える土坑群が確認されている。遺物としては、土器・灰釉陶器の他、腰帯の一部である銅製の丸鞆、鉄製の紡錘車・刀子などが出土している。

また、平安時代の城山遺跡128号住居跡からは、印面に「冨」１文字が書かれた銅製の印章が出土したことに注目される。この住居跡からはその他、猿投産の緑釉陶器の小破片１点、布目瓦の小破片２点などが出土している。

中・近世では、柏城跡を有する城山遺跡と関根兵庫館跡・宿遺跡が代表される遺跡である。特に、柏城跡内での数次にわたる発掘調査により、『舘村旧記』（註１）にある「柏之城落城後の屋敷割の図」に相当する堀跡などが多数発見されている。また、城山遺跡第29地点の127号土坑から馬の骨が検出され

ている。この土坑からは、板碑と土師質土器の他、炭化種子（イネ・オオムギ・コムギなど）も出土しており、特に、イネの塊状のものは「おにぎり」あるいは「ちまき」のようなものであるという分析結果が報告されている。さらに、第35地点では、鋳造関連の遺構も検出されている。130号土坑については鋳造遺構、134号土坑については溶解炉に該当し、遺物としては、大量の鉄滓（スラッグ）、鋳型、三叉状の土製品、砥石などが出土している。

また平成13年に発掘調査が実施された城山遺跡第42地点からは、多くの土坑・地下室・井戸跡が検出される中、234号土坑から、鉄鍋の完形品が出土したことは特筆すべきである。この鉄鍋は、土坑の坑底面に伏せてある状況で出土しており、「鍋被り葬」と呼ばれる古い風習が志木市でも実在していたことが証明された。

平成11～14年度にかけて実施された中野遺跡第49地点の調査から、頭を北に向け横臥屈葬された人骨を出土した67号土坑が検出されている。その他、ピット列・土坑・溝跡などが検出されていることから、この一帯が『舘村旧記』に記載されている「村中の墓場」関連に相当する施設ではないかと考えられる。

近代以降の遺跡では、19世紀以降の溝跡・地下室などが、城山遺跡を中心に検出されている。田子山遺跡では、敷島神社境内に存在する富士塚の築造（明治２～５年）に関連するローム採掘遺構が検出されており、地域研究の重要な資料であると言える。

第２節　遺跡の概要

ここで、今回本書で報告する新邸遺跡について概観することにする。

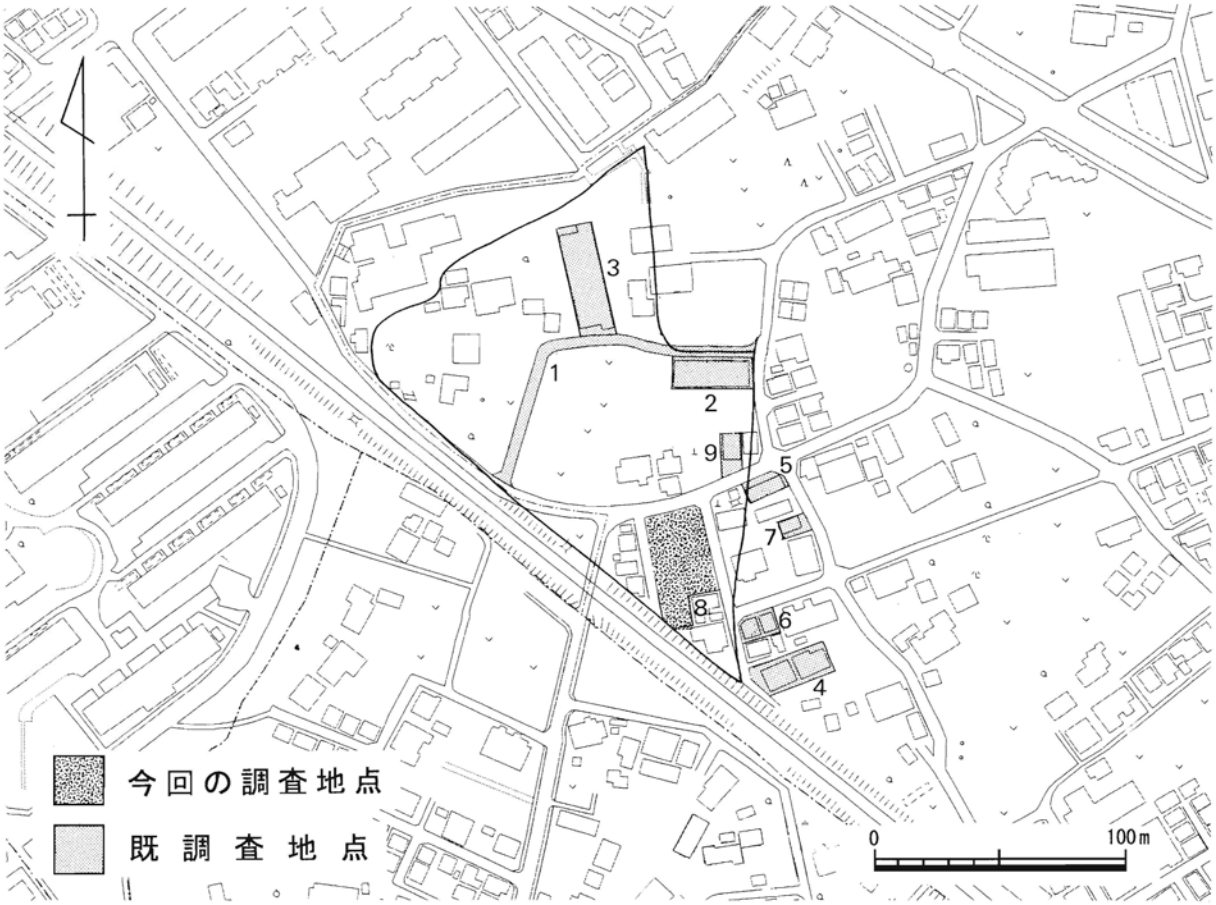
新邸遺跡は、志木市柏町５丁目を中心に広がる遺跡で、東武東上線志木駅の北西約１㎞に位置している。遺跡は、柳瀬川右岸の台地上に立地しており、標高は約14m、低地との比高差は約７ｍである。

この遺跡の周辺の開発状況を見てみると、昭和62（1987）年には、ユリノキ通り（都市計画道路富士見大原線）建設工事に伴う大規模発掘調査が実施されている。以後、ユリノキ通りが開通し、特に本遺跡の北側に隣接する中道遺跡では、各種開発が盛んに進行している状況である。

さて、新邸遺跡は、これまでの発掘調査により、縄文時代早～中期、古墳時代前期、中・近世の複合遺跡であることが判明している。そこで、これまでに新邸遺跡からどのような遺構・遺物が検出されたかを今までの発掘調査の成果から、大まかに振り返ってみることにしたい（第４表）。

まず、新邸遺跡における最初に実施された発掘調査は、昭和60（1985）年の第１地点である。この調査は、道路改良工事に伴い実施されたものである。調査により、縄文時代前期の黒浜式期の貝層をもつ住居跡１軒と中・近世の土坑・地下式坑・井戸跡・ピット群などが検出されている。縄文時代前期の貝層をもつ住居跡については、学史的にみて、酒詰仲男氏による「志木町大字大塚・黒浜期貝塚」（酒詰　1959）に相当するものと説明されている（佐々木　1986・1991）。また、中・近世の土坑・地下式坑・ピット群については、基本的に北側斜面に展開するであろう段切状遺構内に構築されたものと考えられる。この段切状遺構については、本地点のすぐ南側の千手館（千手堂）に関連がある遺構ではないかと考えられる。

昭和61（1986）年に発掘調査が実施された第２地点は、共同住宅建設に伴うものである（佐々木　1991）。この調査により、縄文時代前期の黒浜式期の貝層をもつ住居跡１軒と古墳前期の住居跡１軒が



第２図　新邸遺跡の調査地点（1／3000）

調査地点	面積(㎡)	確認調査日	発掘調査期間	調査原因	遺構の概要	報告書No.
第1地点	600.00	なし	昭和60年10月21日～11月21日	道路改良工事	(縄文前期)住居跡1軒、土坑2基(中・近世)土坑16基、地下式坑1基、井戸跡1基、溝跡2本　※土坑群は段切状遺構内からの検出	No.3
第2地点	350.00	なし	昭和61年11月11日～11月17日	共同住宅建設	(縄文前期)住居跡1軒(古墳前期)住居跡1軒	No.4
第3地点	380.00	昭和63年6月9日	昭和63年6月13日～7月4日	共同住宅建設	(縄文)包含層出土遺物(中・近世)地下式坑1基、溝跡4本	No.10
第4地点	681.46	平成2年10月17日		共同住宅建設	検出されなかった	No.12
第5地点	220.09	平成4年6月25日		共同住宅建設	検出されなかった	No.15
第6地点	80.24	平成7年12月14日		個人住宅建設	検出されなかった	No.18
第7地点	132.72	平成10年4月13日		共同住宅建設	検出されなかった	No.21
第8地点	471.41	平成14年6月7日	平成14年6月16日～8月7日	共同住宅建設	(縄文)土坑21基(古墳前期)住居跡8軒、方形周溝墓1基、土坑2基(古墳後期)住居跡1軒(中・近世以降)火葬墓2基、土坑2基、井戸跡1基、溝跡2本	本報告
第9地点	138.77	平成17年7月1日		診療所併用住宅建設	検出されなかった	未
合　計	3,054.69					

平成19年１月31日現在

第４表　新邸遺跡調査一覧

検出されている。特に、古墳時代前期の住居跡については、本遺跡において初めての発見であり、本遺跡の南側に隣接する西原大塚遺跡との関係を考える上で重要な遺跡となった。なお、縄文時代前期の住居跡については、第１地点と同一住居跡（１Ｊ）の南半部に相当する。

昭和63（1988）年には、第３地点の発掘調査が実施された。この調査は、共同住宅建設に伴い実施されたもので、この調査により、中・近世の土坑１基と溝跡２本などが検出されている。土坑については、２主体部１入口竪坑部と考えられる地下式坑と報告されている（佐々木　1991）。

その後、平成２年から平成10年の間に第４～７地点の４地点の確認調査が実施されたが、遺構・遺物は検出されなかった。

そして、平成15（2003）年に本地点の発掘調査が実施された。この調査は共同住宅建設に伴うもので、縄文時代の土坑21基、古墳時代前期の住居跡８軒・方形周溝墓１基・土坑２基、古墳時代後期の住居跡１軒、中・近世以降の火葬墓２基・土坑２基・井戸跡１基・溝跡２本と多くの遺構が検出された（詳細は本文参照）。

以上のように最新の調査を踏まえ、新邸遺跡は、縄文時代早～中期、古墳時代前・後期、中・近世、近代の複合遺跡であると判明してきたと言えよう。

最後に、本遺跡の特色を時代別にまとめると、以下のとおりである。

○旧石器時代　本遺跡では未検出である。

○縄文時代　第１・２地点から貝層を伴う住居跡（前期黒浜式期）が１軒検出される。
第１地点から前期の黒浜式期あるいは諸磯式期の土坑２基が検出される。
第１地点の包含層から早期前葉～中期中葉の土器小片が出土している。
本地点から土坑21基が検出される。時期については、良好な遺物は少なかったため、比定は難しい。

○弥生時代　本遺跡では未検出である。

○古墳時代　第２地点から前期の住居跡１軒が検出される。
第１地点の包含層から前期の土器小片が出土している。
本地点から前期の住居跡８軒と後期の住居跡１軒が検出される。本遺跡で後期の住居跡が検出されたのは初めてである。

○奈良時代　本遺跡では未検出である。

○平安時代　本遺跡では未検出である。

○中・近世　第１地点から段切状遺構が検出され、その整地面を中心に土坑群が検出される。これらの遺構は、「大塚千手堂」との関連で捉えられる。
第３地点から地下室１基と溝跡２本が検出される。
本地点から火葬墓２基と土坑２基が検出される。

○近代　本地点から井戸跡１基・溝跡２本が検出される。特に溝跡については、野火止用水跡と考えられ、溝底からは多くの陶磁器・土器が出土した。

註１　『舘村旧記』は、舘村（現在の志木市柏町・幸町・館）の名主であった宮ヶ原仲右衛門仲恒が、享保12～14（1727～1729）年にかけて執筆したものである。

第２章　発掘調査の概要

第１節　調査に至る経過

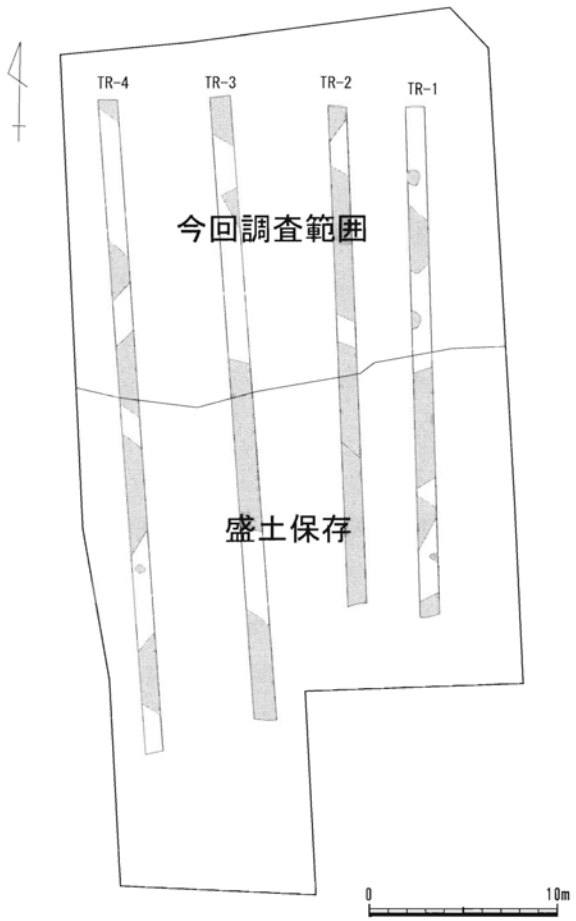
平成14年５月、共同建設株式会社から志木市教育委員会（以下、教育委員会）へ開発計画地内における埋蔵文化財の有無及び取り扱いについての照会があった。計画は志木市柏町５丁目3020－１の一部、3020－２（面積471.41㎡）内に共同住宅建設を行うというものである。

これに対し、教育委員会は当該開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である新邸遺跡（コード11228－008）に該当するため、大旨下記のとおり回答した。

１．埋蔵文化財確認調査を実施して、その結果に基づき、当該開発予定地の埋蔵文化財の有無及び取り扱いについて回答する。

２．上記１の調査の結果、埋蔵文化財が確認された場合、埋蔵文化財の保存措置を講ずること。また、やむを得ず土地の現状を変更する場合は、記録保存のための発掘調査を実施する必要があること。

３．新邸遺跡における埋蔵文化財の分布状況については、周辺での調査結果に基づき、今回の開発地域内での埋蔵文化財の所在はかなり確立が高いということ、さらに、南側の西原大塚遺跡に隣接す



第３図　試掘時の遺構確認状況（1／400）

るため、弥生時代後期末葉から古墳時代前期の集落跡や方形周溝墓などの遺構が存在する可能性がある等、新邸遺跡の状況を説明する。

平成14年６月３日、教育委員会は、開発者及び土地所有者である　個　人　より埋蔵文化財確認調査依頼書を受理し、６月７日、午前９時30分から確認調査を実施した。

確認調査は、第３図に示すように調査区長軸のほぼ南北方向に合わせ、幅1.5m程のトレンチ（ＴＲ－１～４）を４本設定し、バックホーで表土を剥ぎ、同時に遺構確認作業を行った。その結果、調査区のほぼ全面にわたり遺構が密集して分布することが判明した。検出された遺構は、四角いプランを呈することと覆土の観察から、古墳時代前期の住居跡と考えられる。

教育委員会はこの結果をただちに事業者に報告し、埋蔵文化財の保存措置を講ずるように要請したが、開発者側からは検討するという返答だけを受け、実質的に開発計画は一旦中断するという状況になった。

そして、１年後の平成15年６月に　個　人　から再度、教育委員会に事前協議の依頼があり、協議の結果、駐車場建設部分は盛土保存を適用し、建物建設部分は記録保存のための発掘調査を実施することに決定した（第３図参照）。

その後、　個　人　から埋蔵文化財発掘届が提出され、教育委員会では発掘調査にあたる組織として、志木市遺跡調査会（以下、遺跡調査会）を斡旋した。遺跡調査会ではこれを受け、　個　人　とと委託契約を締結し、埋蔵文化財発掘調査届を教育委員会に提出する。教育委員会は、これらの届出書をすみやかに埼玉県教育委員会経由で文化庁長官に提出した。

これにより、６月16日から志木市遺跡調査会を主体として発掘調査を実施した。なお、発掘調査通知書番号は教文第２－34号　平成15年７月６日付である。

第２節　調査の方法と経過

以下、発掘調査の経過及び各遺構の精査経過ついては、第５表の発掘調査工程表に示すことにし、ここでは概要について説明することにする。

６月16日　重機による表土剥ぎ及び遺構確認作業を開始した。今回の調査では、南半部が駐車場予定地で盛土保存を適用したため、この部分を残土置場として当てる予定とした。作業は調査区北東端からバックホーを使用し、表土を剥ぎ、排土についてはダンプに積載し、残土置場に運搬した。

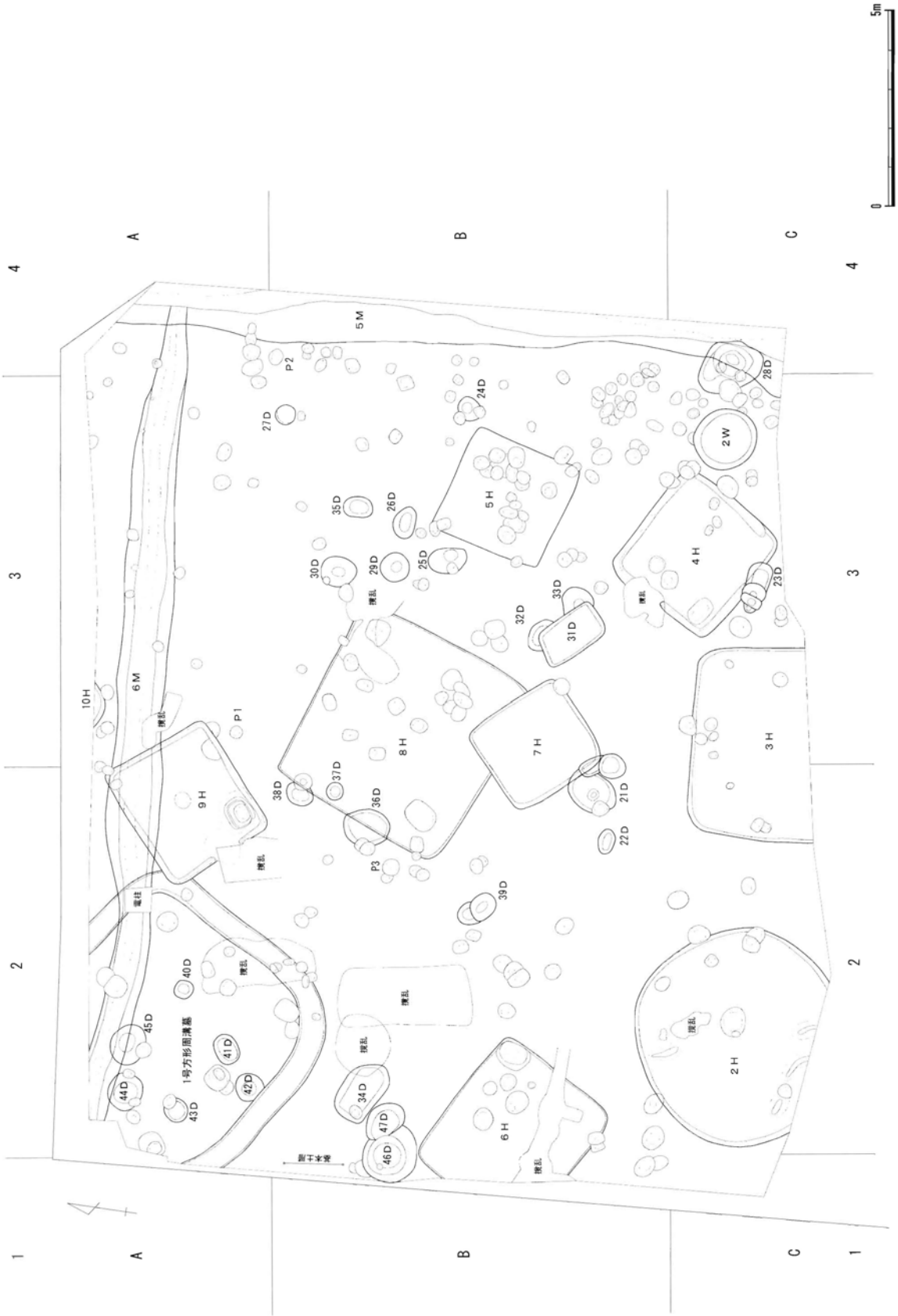
17日　プレハブ・トイレを設置する。今回のプレハブは、器材保管用のみである。

18日　表土剥ぎ作業に併行して、人員導入による発掘調査を開始する。器材搬入後、調査区域の整備と細部の遺構確認作業を実施する。

19日　遺構確認作業終了後、遺構精査を開始する。21・22Ｄについては、焼土が検出され、同時に人骨片が出土していることから、火葬墓と考えられる。

20日　中・近世以降の遺構の精査と併行して、古墳時代前期の住居跡の精査を開始する。

７月９日　調査区東隅の遺構確認作業を再度行う。調査区東隅には、調査当初から細長い溝状の掘り込みが確認できていたが、撹乱にするか遺構として取り扱うべきかが気になっていたため、最終判断のために再度確認作業を行った。その結果、硬化面や砂利・礫層が確認でき、



第４図　遺構分布図（1／150）

道路状遺構とも考えられたが、精査を進めるうちに溝底から水付き面（銹着面）を検出したため、水路跡ではないかと推測できた。ひとまず溝跡（５Ｍ）として取り扱うことにした。

11日　５Ｍの北端から、陶磁器が多量に出土した。おそらく５Ｍは位置関係を基に検討した結果、野火止用水跡と考えられる。

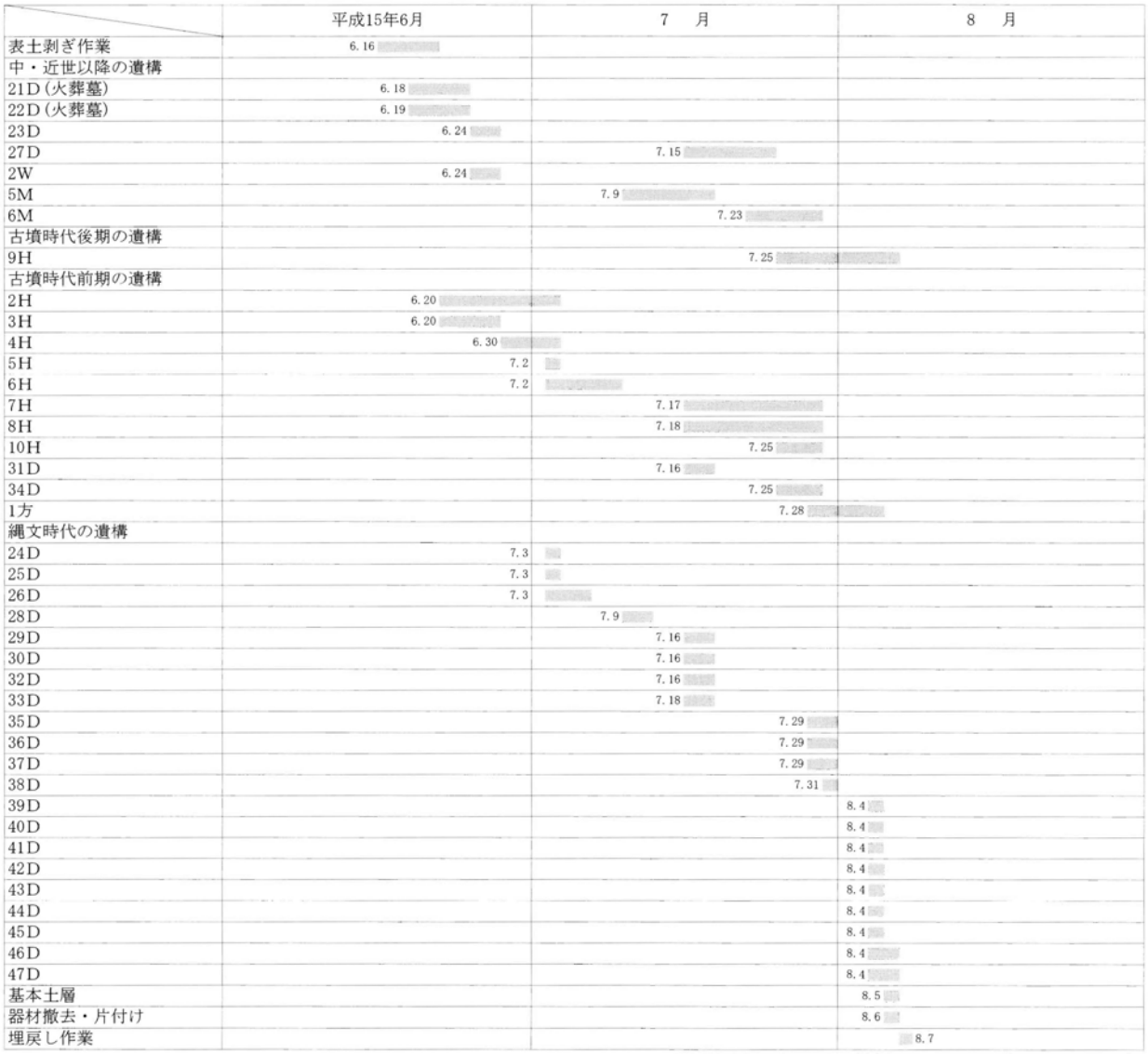
23日　調査区北隅にも５Ｍに直交するように溝跡が検出されていたため、これについても精査を開始する。この溝跡（６Ｍ）は南側上端に幅約15cmの粘土がベルト状に観察されていた。５Ｍ同様に野火止用水跡と考えられる。

25日　６Ｍの調査終了後に古墳時代後期の住居跡（９Ｈ）の精査を開始する。

28日　古墳時代前期の方形周溝墓（１方）の精査を開始する。

29日　１方の方台部の精査及び縄文土坑の精査を開始する。特に、１方の方台部から検出された６本ほどのピットについては、覆土の観察や方台部内に配置良く構築されていることから、同時期のものであり、１方に伴うものとして取り扱うことにした。

８月５日　基本土層の精査を開始する。



第５表　発掘調査工程表

６日　　すべての遺構精査を完了する。

７日　　プレハブ・トイレを撤去し、埋戻し作業を終了する。

第３節　基本層序

新邸遺跡は、武蔵野台地の北端部にあたり、遺跡の標高は南端で約15m、北端で約11mを測り、低地との比高差は５m前後である。地形的には北西方向に向かって台地が下がっており、標高10mの崖線下は遺跡外になっている。

今回の調査における基本層序を観察する箇所は、調査区北西隅に１ヶ所設定した。最下層は立川ローム層Ｘ層中である。以下、各層についての説明をすることにする。

第Ⅰ層　表土

以前は畑地であったため、耕作土層に相当する。層厚は約40～60cmである。

第Ⅱ層　縄文時代の漸移層である。

ａ・ｂ・ｃ層に分層される。ａ層→ｂ層→ｃ層の順でローム粒子が多く、明色傾向である。

第Ⅲ層　立川ローム層第Ⅲ層

黄褐色軟質ローム層（ソフトローム層）である。層厚は30cm前後である。

第Ⅳ層　立川ローム層第Ⅳ層

黄褐色硬質ローム層（ハードローム層）である。ソフト化の進行が著しい。

第Ⅴ層　暗黄褐色ローム層（第１黒色帯）

第Ⅵ層　黄褐色土層（ＡＴ包含層準）

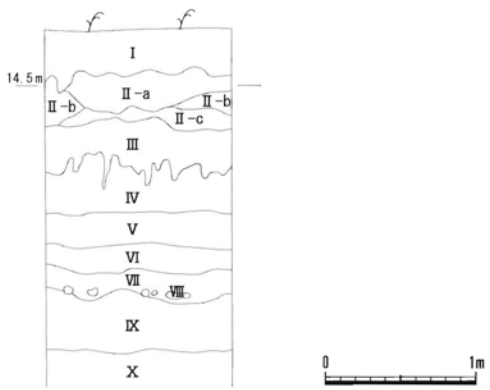
第Ⅶ層　暗黄褐色ローム層（第２黒色帯上半部）

第Ⅷ層　黄褐色ローム層

第Ⅶ層と第Ⅸ層の境にブロック状に散在するが、検出できない場合が多い。

第Ⅸ層　暗黄褐色ローム層（第２黒色帯下半部）

第Ⅹ層　黄褐色ローム層



第５図　基本層序（1／50）

第３章　検出された遺構と遺物

第１節　縄文時代

（１）概　要

縄文時代の遺構は、土坑21基、ピット１本が検出された。ここに示す土坑は、いずれも覆土の観察から縄文時代のものと判断したが、詳細な時期を示す遺物はほとんど出土しなかった。また、縄文の土坑は本調査地点の北西角から南東角に向かう幅10m程の間に分布する傾向が見られた。

（２）土　坑

24号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］後世のピット２基に切られる。（平面形）楕円形。（規模）63×54㎝。（長軸方位）Ｎ－33°－Ｗ。（深さ）16㎝。（覆土）ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

25号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）楕円形。（規模）98×66㎝。（長軸方位）Ｎ－30°－Ｗ。（深さ）24㎝。

［遺物］土器小破片が出土したが図示できるものはなかった。

［時期］縄文時代。

26号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］（平面形）楕円形。（規模）82×54㎝。（長軸方位）Ｎ－82°－Ｗ。（深さ）17㎝。（覆土）ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

28号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｃ－３・４）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）不整形（規模）172×126㎝。（長軸方位）Ｎ－32°－Ｗ。（深さ）72㎝。（覆土）６層に分層される。

［遺物］土器小破片が３点出土した。

［時期］縄文時代。

遺　物（第８図－１）

横位のＲＬ縄文を施文する土器である。口唇部は外反する。明褐色を呈し胎土には白色粒子・砂粒を含む。後期の粗製土器か。

29号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］（平面形）ほぼ円形。（規模）径72㎝。（深さ）24㎝。（覆土）３層に分層される。

［遺物］早期条痕文系の土器片２点が出土した。

［時期］縄文時代早期。

遺　物（第８図－２・３）

２は貝殻条痕文を有する土器の胴部片で、黒褐色を呈し、胎土には繊維・砂粒を含む。３はごく浅い条痕文を有し暗赤褐色を呈する胴部片である。胎土には繊維・砂粒を含む。

30号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。断面は擂り鉢状。（平面形）楕円形。（規模）90×78㎝。（長軸方位）Ｎ－10°－Ｗ。（深さ）27㎝。（覆土）ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器片が１点出土した。

［時期］縄文時代後期。

遺　物（第８図－４）

後期の粗製土器口縁部の破片である。文様はＬＲ縄文を横位に施し、内面の口唇部直下には沈線を巡らせる。褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。

32号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］31Ｄに切られる。（平面形）楕円形。（規模）86×不明㎝。（長軸方位）Ｎ－70°－Ｗ。（深さ）23㎝。（覆土）ローム粒子を含み・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

33号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］31Ｄに切られ、詳細不明。（平面形）円形か。（規模）76㎝。（深さ）33㎝。（覆土）ローム粒子を含み・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

35号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）楕円形。（規模）72×52㎝。（長軸方位）Ｎ－10°－Ｗ。（深さ）17㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

36号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

［構造］後世のピット、８Ｈに切られる。（平面形）楕円形。（規模）118×98㎝。（長軸方位）Ｎ－20°－Ｅ。（深さ）22㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

37号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

［構造］８Ｈの掘り方精査の際に検出された。（平面形）楕円形。（規模）46×42㎝。（長軸方位）Ｎ－74°－Ｅ。（深さ）８Ｈ貼床下から13㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

38号土坑

遺　構（第６図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

［構造］後世のピット、８Ｈに切られる。（平面形）楕円形。（規模）72×55㎝。（長軸方位）Ｎ－25°－Ｅ。（深さ）17㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器小破片が１点出土したが図示できなかった。

［時期］縄文時代。

39号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

［構造］断面は長軸方向に２段。（平面形）楕円形が重複。（規模）104×58㎝。（長軸方位）Ｎ－16°－Ｗ。（深さ）29㎝。（覆土）ローム粒子・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］早期条痕文系土器の小破片が１点出土したが図示できなかった。

［時期］縄文時代。

40号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］底面は平坦。（平面形）ほぼ円形。（規模）径46㎝。（深さ）18㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

41号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］断面は皿状。（平面形）楕円形。（規模）77×58㎝。（長軸方位）Ｎ－46°－Ｅ。（深さ）15㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］損傷著しい土器小破片が３点出土した。

［時期］縄文時代。

42号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］断面は丸底。（平面形）ほぼ円形。（規模）径70㎝。（深さ）31㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器小破片が１点出土したが図示できなかった。

［時期］縄文時代。

43号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）ほぼ円形。（規模）径60㎝。（深さ）10㎝。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・焼土粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器小片が数点出土したが図示できるものはなかった。

［時期］縄文時代。

44号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）楕円形。（規模）90×84㎝。（長軸方位）Ｎ－80°－Ｗ。（深さ）40㎝（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］土器片が１点出土した。

［時期］縄文時代前期。

遺　物（第８図－５）

縄文前期花積下層式土器の胴部片である。貝殻背圧痕文を施文する。黒褐色を呈し、胎土には繊維・砂粒を含む。

45号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ａ－２）グリッド。

［構造］後世のピットに切られる。（平面形）楕円形。（規模）106×86㎝。（長軸方位）Ｎ－78°－Ｗ。（深さ）32㎝（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

46号土坑

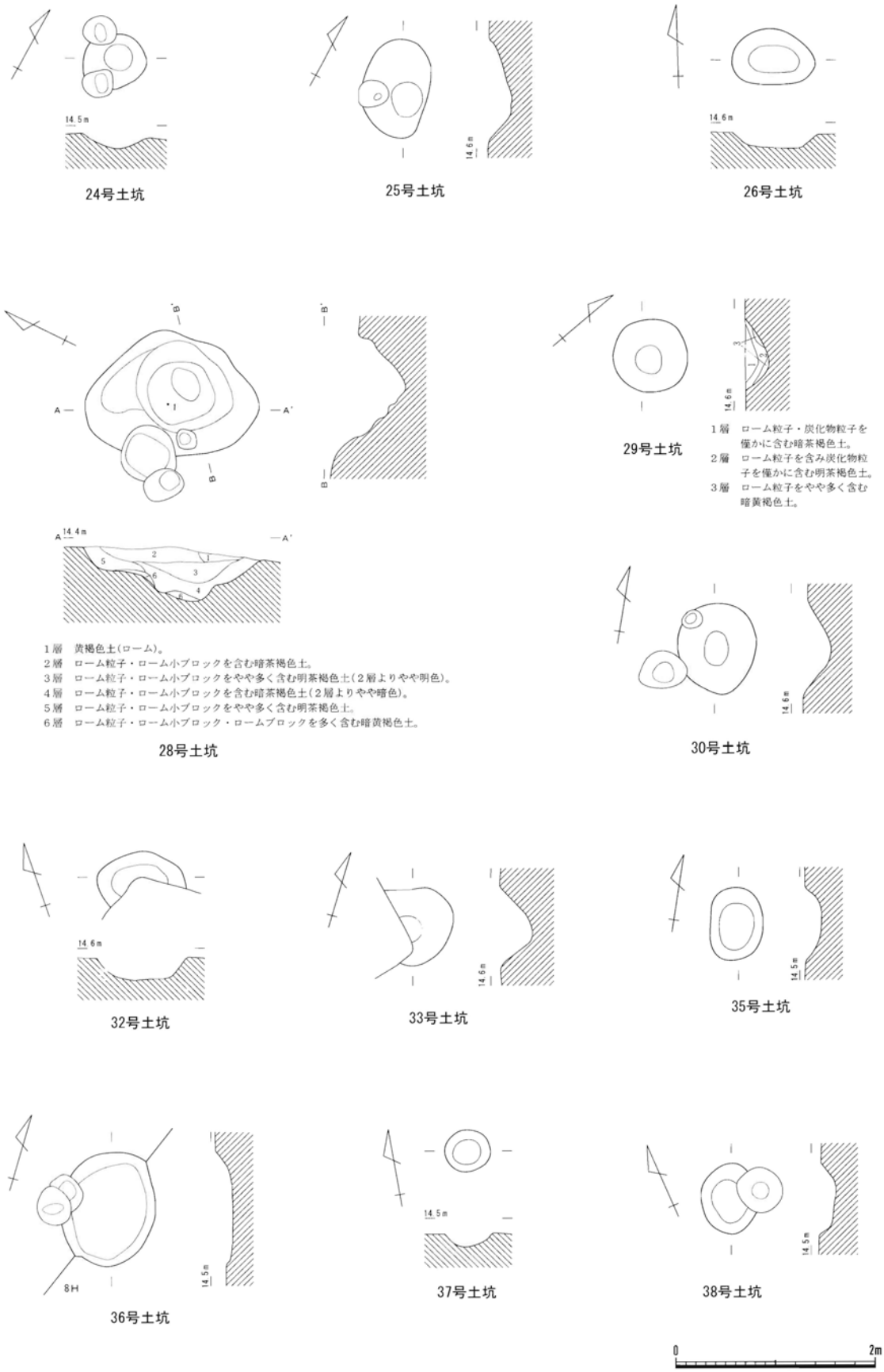
遺　構（第７図）

［位置］（Ｂ－１・２）グリッド。

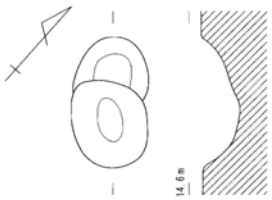
［構造］47号土坑と重複する。（平面形）楕円形。（規模）150×136㎝。（長軸方位）Ｎ－85°－Ｗ。（深さ）53㎝（覆土）６層に分層される。

［遺物］土器小破片が２点出土したが図示できるものはなかった。

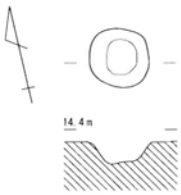
［時期］縄文時代。


14.5m
24号土坑
14.6m
25号土坑
14.6m
26号土坑
A
A'
B
B'
1
14.4m
2
3
4
5
6
1層　黄褐色土(ローム)。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土(２層よりやや明色)。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土(２層よりやや暗色)。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
28号土坑
14.6m
29号土坑
1層　ローム粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
2層　ローム粒子を含み炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土。
3層　ローム粒子をやや多く含む暗黄褐色土。
14.6m
30号土坑
14.6m
32号土坑
14.6m
33号土坑
14.5m
35号土坑
8H
14.5m
36号土坑
14.5m
37号土坑
14.5m
38号土坑
0
2m

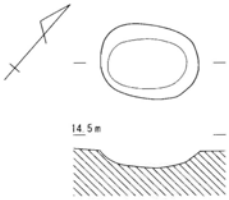
第６図　土坑１（1／60）



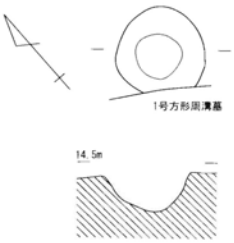
39号土坑



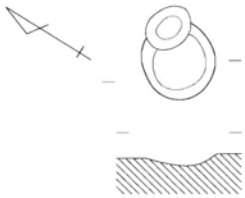
40号土坑



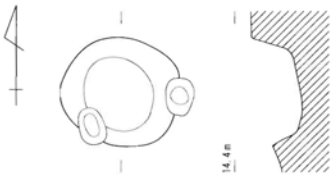
41号土坑



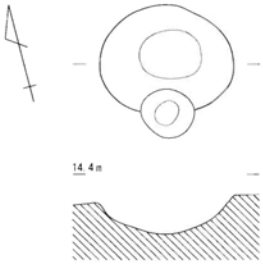
42号土坑



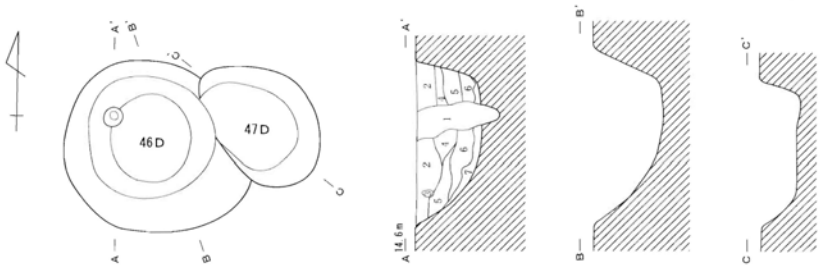
43号土坑



44号土坑



45号土坑

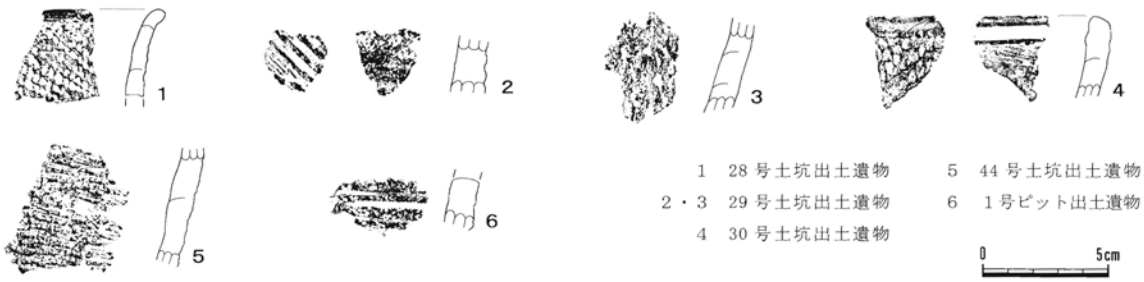


１層　後世のピット
２層　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土を僅かに含む暗茶褐色土。
３層　ロームブロック。
４層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
５層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土（４層より明色）。
６層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土。
７層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

46・47号土坑

0　2m

第７図　土坑２（1／60）



１　28号土坑出土遺物
２・３　29号土坑出土遺物
４　30号土坑出土遺物
５　44号土坑出土遺物
６　１号ピット出土遺物

0　5cm

第８図　土坑・ピット出土遺物（1／3）

47号土坑

遺　構（第７図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

［構造］46号土坑と重複する。（平面形）楕円形。（規模）114×不明cm。（長軸方位）Ｎ－54°－Ｗ。（深さ）32cm。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］縄文時代。

（３）ピット

１号ピット

遺　構（第４図）

［位置］（Ａ－３）グリッド。

［構造］（平面形）楕円形。（規模）32×28cm。（長軸方位）Ｎ－87°－Ｅ。（深さ）14.5cm。

［遺物］土器小片が出土した。

［時期］遺物より縄文時代前期か。

遺　物（第８図－６）

土器の胴部片で、縄文の地文に半裁竹管による平行した沈線文を施文する。明褐色を呈し、胎土には砂粒を含む。諸磯ｂ式。

第２節　古墳時代前・後期

（１）概　要

古墳時代の遺構については、前期の住居跡８軒・土坑２基・方形周溝墓１基、後期の住居跡１軒が検出された。

まず、前期の住居跡については、調査区のほぼ全域に亘って分布していることが判明した。これについては、第２地点で該期の住居跡１軒が検出されて以来無かったことであったため、予想を上回る状況と言える。住居跡の切り合いは、７Ｈと８Ｈの２軒が重複し、７Ｈが８Ｈを壊して構築していたことが明らかになった。住居形態は、正方形・長方形を基本とするが、２Ｈのみが隅丸方形を呈している。この形態差は、時間差である可能性が高いが、出土遺物から時期差を見出すには、遺物量が少なく明確に区分するのは困難であった。

そして今回特筆すべき遺構として、方形周溝墓１基が検出された。この方形周溝墓の特徴は、垂直に近い立ち上がりをもつ溝の断面構造、四隅の曲線形、覆土に被熱ロームと思われるローム小ブロック・ロームブロックを含むこと、さらに方台部に柱穴が配置されるなど、通常検出される方形周溝墓と比べ、精査中でも違和感をもつ遺構であった。

後期では、南西壁にカマドを有し、住居中央に１本の柱穴をもつ小型の住居跡１軒（９Ｈ）が検出された。遺物としては、カマドの左側を中心として、土師器坏・甕などが出土した。注目すべきは、南東

壁寄りの床面上から、ベンガラ塊が出土していることである。住居跡の時期は、出土した土器様相から７世紀中葉に比定される。

（２）住居跡

２号住居跡

遺　構（第９図）

［位置］（Ｂ・Ｃ－２）グリッド。

［住居構造］住居跡の南側は調査区域外である。（平面形）隅丸方形。（規模）5.40×5.16m。（長軸方位）Ｎ－58°－Ｅ。（壁高）33～42cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）壁際を除いて良く硬化している。貼床が２～６cmの厚さで施されている。入り口ピット付近と住居北側に、２～５cmの高さの凸堤が確認された。（炉）住居中央よりやや東に偏って位置する。76×60cmの楕円形を呈する粘土板炉である。一部壊れていたが径約46cm、厚さ４cmの円形状に粘土が焼けて硬化していた。その西側には焼けていない粘土が確認された。粘土の下が良く焼けて赤化していたことから、粘土板炉の前に地床炉として使用していた可能性がある。（柱穴）南西壁の近くにある深さ37cmのものが本住居の入口ピットと思われる。（覆土）18層に分層される。

［遺物］器台あるいは高坏の脚台部、壺・甕の破片、土錘が出土した。

［時期］古墳時代前期。

遺　物（第10図、第６表）

１は器台あるいは高坏の脚台部、２～６は壺、７～10は甕、11は土錘である。

３号住居跡

遺　構（第11図）

［位置］（Ｃ－２・３）グリッド。

［住居構造］南側は調査区域外である。（平面形）方形か。（規模）不明×4.94m。（壁高）９～12cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）住居中央付近に硬化した床面が確認できたが、全体的には軟弱である。貼床は３～12cmの厚さで施されていた。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかった。（覆土）ローム粒子を僅かに含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］坩・壺・甕が出土した。

［時期］古墳時代前期。

遺　物（第11図、第７表）

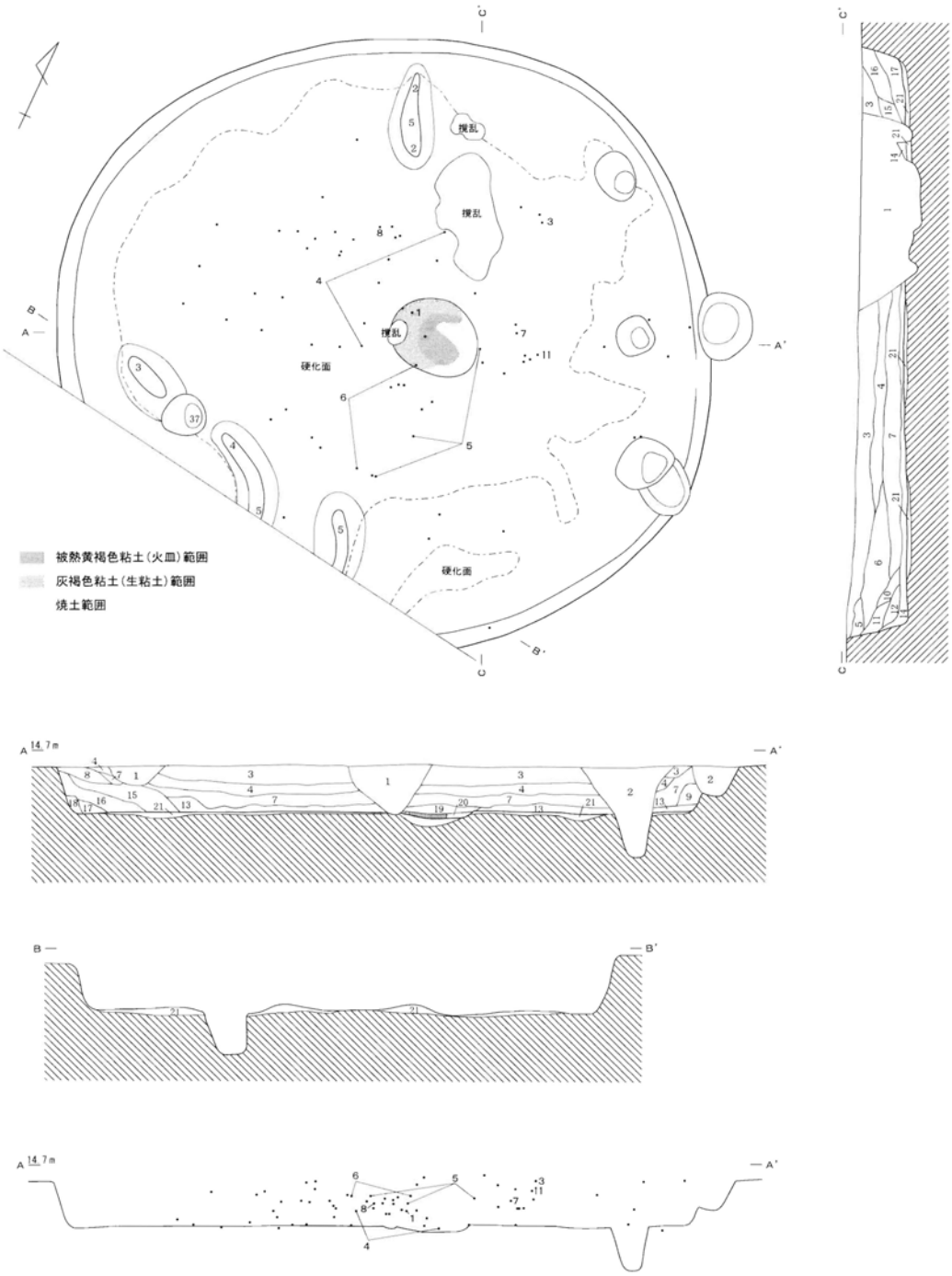
１は坩、２は壺、３～６は甕である。特に６はＳ字甕の脚台部と考えられる。

４号住居跡

遺　構（第12図）

［位置］（Ｂ・Ｃ－３）グリッド。

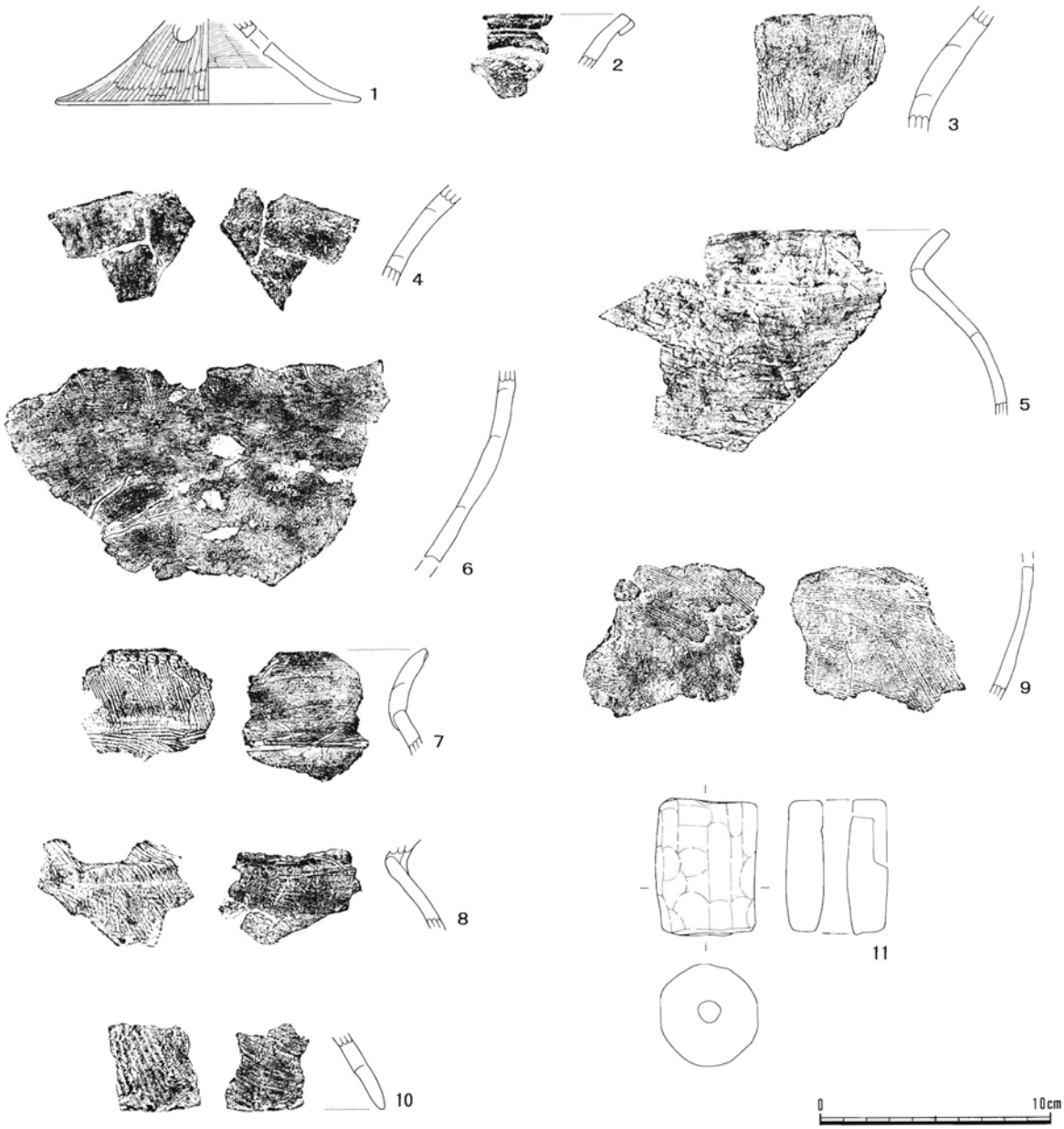
［住居構造］23Ｄと後世のピットに切られ、北西壁の一部は撹乱により壊されている。（平面形）方形。（規模）3.28×3.20m。（長軸方位）Ｎ－62°－Ｗ。（壁高）21～26cmを測り、壁は急斜に立ち上がる。（壁溝）南コーナー付近で一部途切れている。上幅16～26cm・下幅４～８cm・深さ３～11cmを測る。



1層　撹乱。
2層　後世のピット。
3層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
4層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土（3層よりやや暗色）。
5層　ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
6層　ローム粒子を僅かに含む黒褐色土。
7層　ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
8層　ローム粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む明茶褐色土。
12層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
13層　焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く含み、ローム粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
15層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒褐色土。
16層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
17層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土。
18層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む黒褐色土。
19層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを含む黄褐色土。
20層　焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・被熱粘土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土。
21層　貼床。

0　2m

第９図　２号住居跡（1／60）



第10図　２号住居跡出土遺物（1／3）

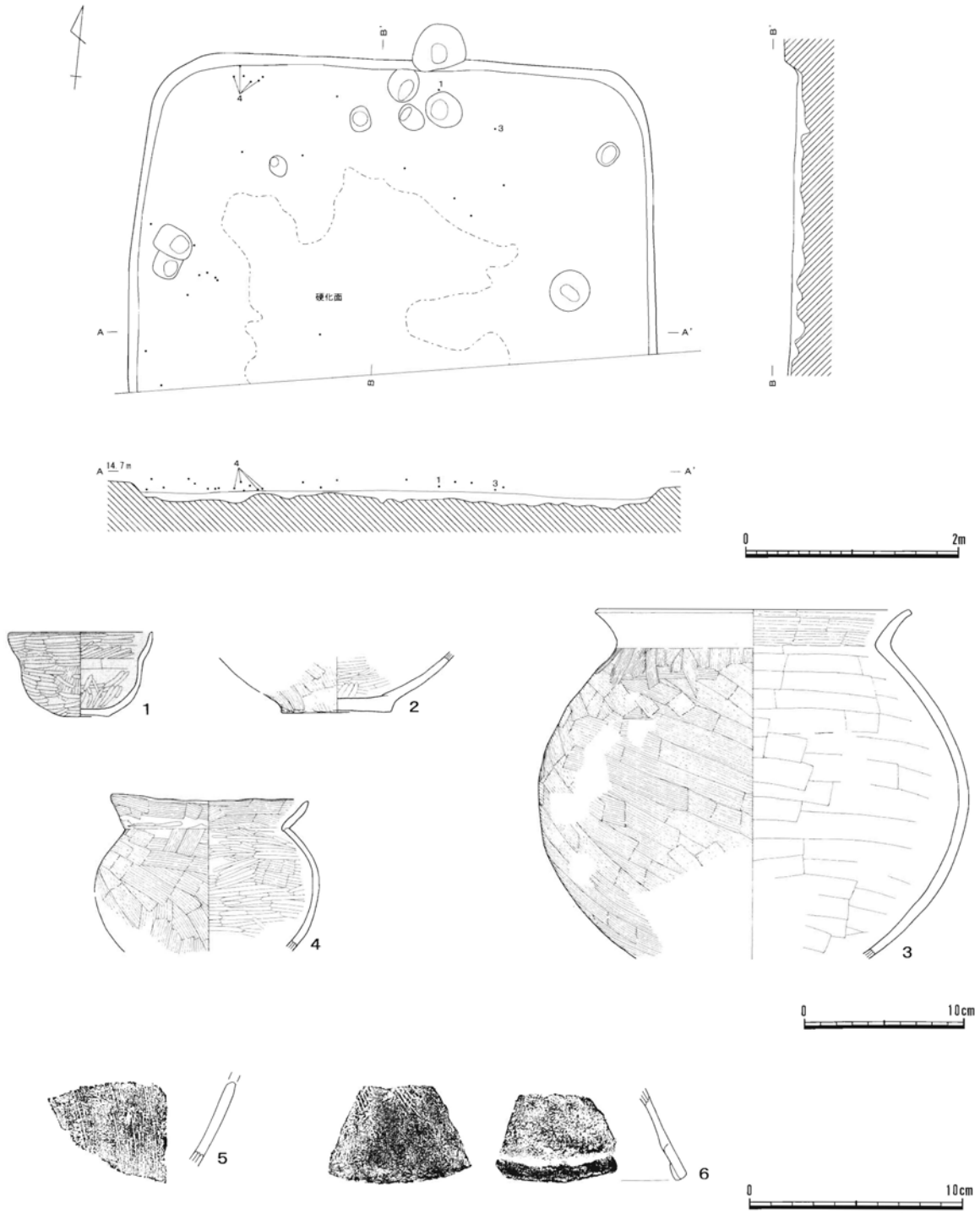
（床面）住居中央より北西壁に偏った部分がよく硬化していた。貼床は４～20cmの厚さで施されている。（炉）北コーナーより１ｍ程内側に入った所に位置する。ほぼ円形で、径42cm・３cm程の掘り込みを持つ地床炉である。中央部分は焼けて赤化している。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかた。（貯蔵穴）西コーナーに位置し、平面形は隅丸方形で規模70×46cm・深さ25cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。（覆土）11層に分層される。

［遺物］坩・台付甕が出土した。

［時期］古墳時代前期。

遺　物（第13図、第８表）

１～３は坩、４～12は甕である。



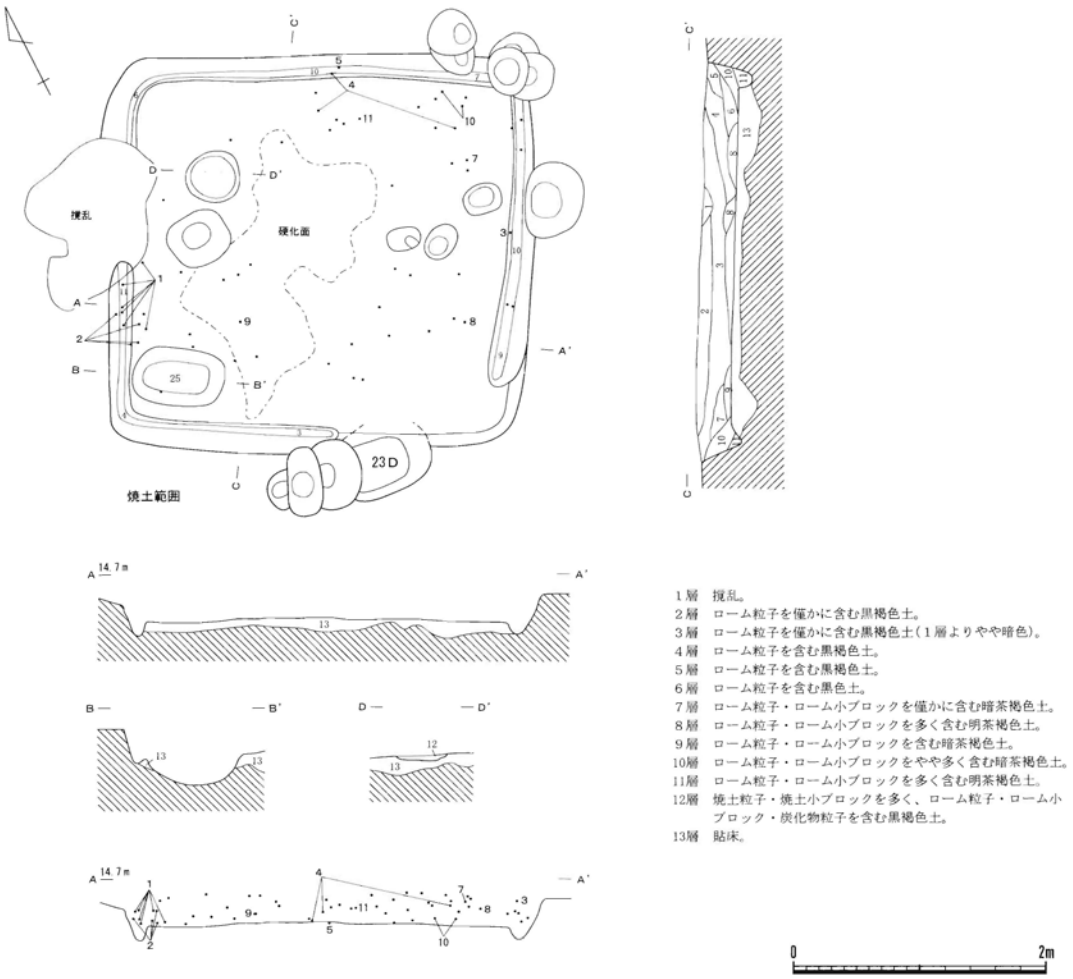
第11図　３号住居跡・出土遺物（1／60・1／4・1／3）

５号住居跡

遺　構（第14図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［住居構造］確認面と床面がほぼ同じであったため、壁は確認できなかった。さらに、多数のピットにより住居内も壊されていた。（平面形）方形。（規模）不明。（床面）住居中央から南側にかけて硬化した床面が確認できた。貼床の範囲は2.90×2.80ｍ、厚さ２～10㎝を測る。（炉）中央から北東コーナーに少し寄った所に位置する地床炉と思われるが、後世のピットにより壊されているため詳細は不明であ



第12図　４号住居跡（1／60）

る。平面形は楕円形、規模は不明×60㎝・深さ10㎝を測る。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかった。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子を含む黒褐色土を基調とする。

［遺物］甕の破片が僅かに出土した。

［時期］古墳時代前期。

遺　物（第14図、第９表）

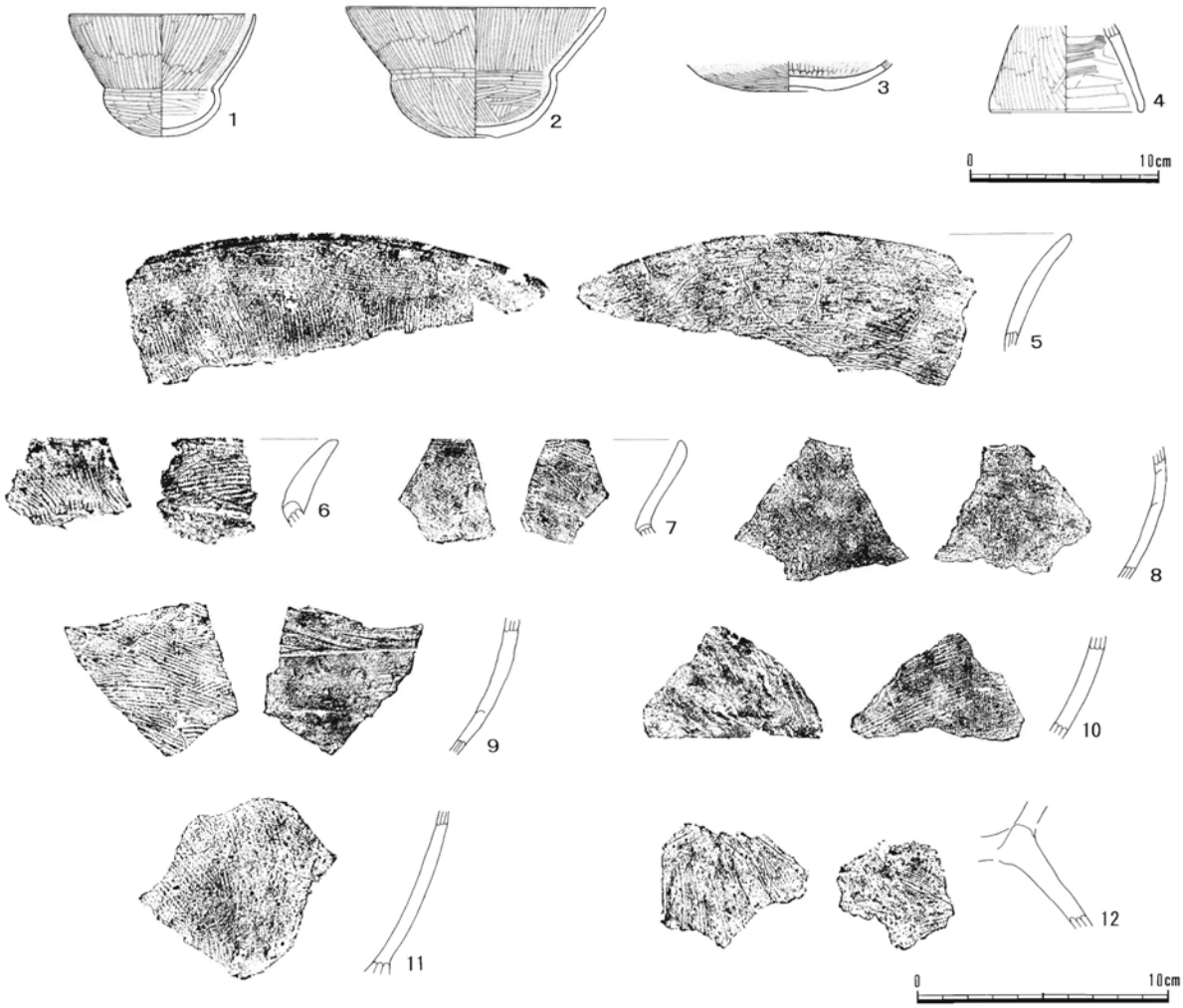
１・２は甕である。

６号住居跡

遺　構（第15図）

［位置］（Ｂ－１・２）グリッド。

［住居構造］西コーナーは調査区域外であり、さらに一部は撹乱により壊されている。（平面形）方形。（規模）3.94×3.48m。（長軸方位）Ｎ－58°－Ｗ。（壁高）５～９㎝を測る。（壁溝）確認できなかった。（床面）貯蔵穴付近に硬化した面が確認されたが、全体的には軟弱である。貼床は３～14㎝の厚さで施されていた。（炉）地床炉である。住居中央より北東に偏って位置し、58×50㎝の楕円形で、５㎝ほどの掘り込みを持つ。炉床は焼けて赤化していた。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかた。（貯蔵穴）



第13図　４号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

東コーナーに位置し、平面形は隅丸方形、規模84×66㎝・深さ35㎝を測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含み焼土粒子・焼土小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土を基調とする。底の近くから小型の坩が出土した。（覆土）焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。

［遺物］坩と壺・甕の破片、土製品（土玉）が出土した。

［時期］古墳時代前期。

［所見］焼土と炭化材が検出されていることから、焼失住居の可能性がある。

遺　物（第15図、第10表）

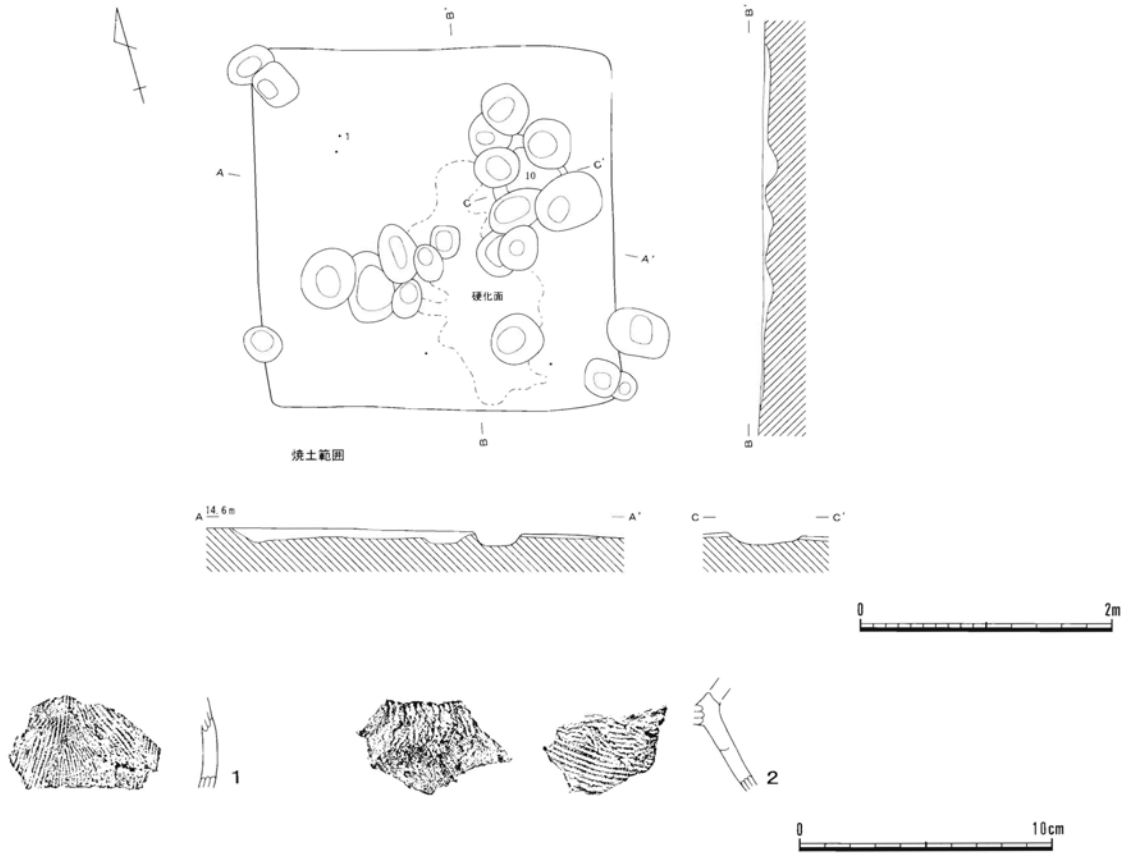
１・２は坩、３は壺、４・５は甕、６は土製品（土玉）である。５はＳ字甕であろう。６は大粒の丸玉であるため足玉と考えられる。７・８は石器であるかどうか不明である。

７号住居跡

遺　構（第16図）

［位置］（Ｂ－２・３）グリッド。

［住居構造］８Ｈを切り、21Ｄに切られる。（平面形）方形。（規模）2.70×2.52m。（長軸方位）Ｎ－



第14図　５号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）

43°－W。（壁高）20～22cmを測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）確認できなかった。（床面）住居中央から南西壁にかけて硬化した面が確認された。貼床は２～８cmの厚さで施されていた。（柱穴）検出されなかった。（覆土）４層に分層される。

［遺物］壺・甕の破片のみ出土した。

［時期］古墳時代前期。

遺　物（第16図、第11表）

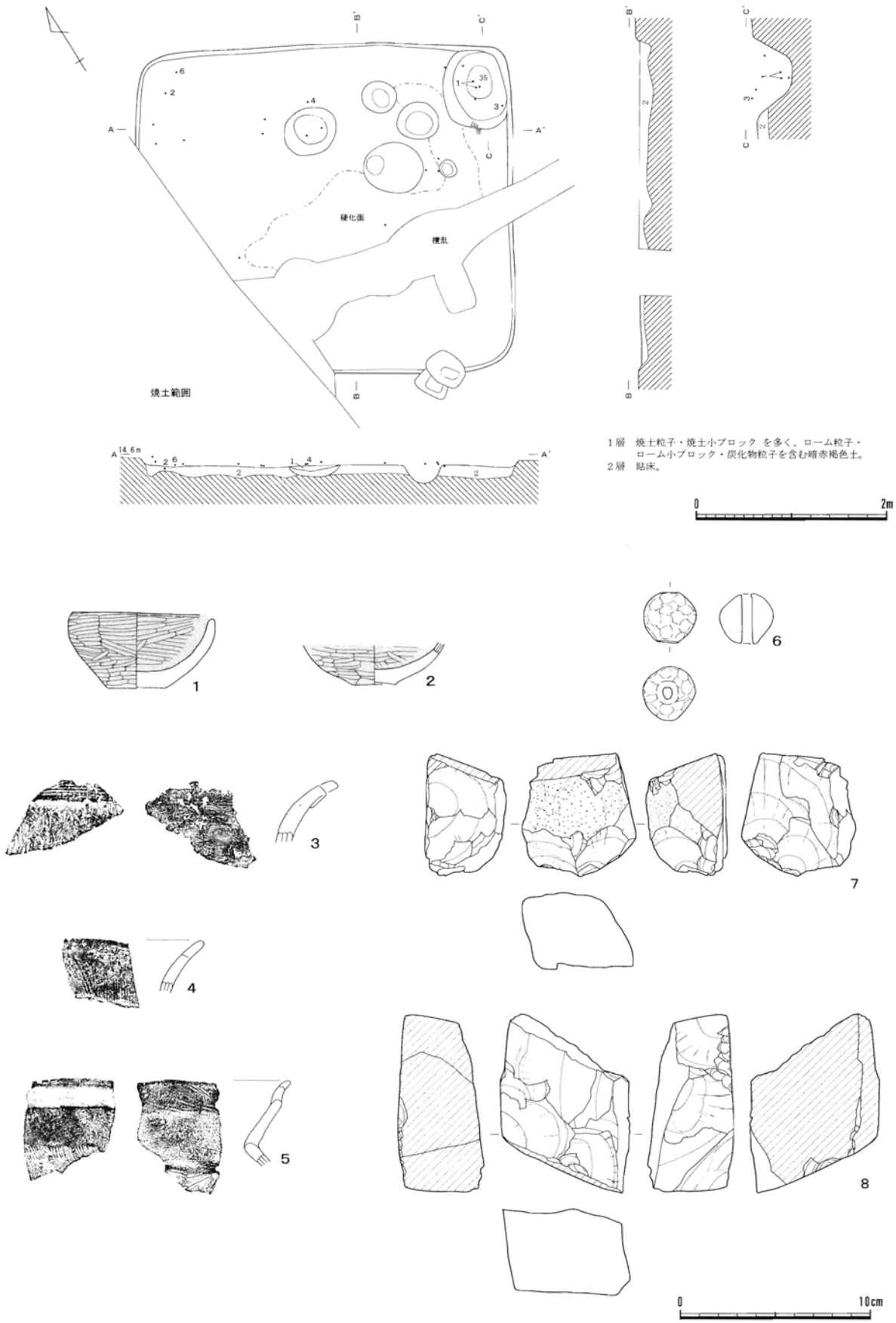
１～４は壺、５～８は甕である。

８号住居跡

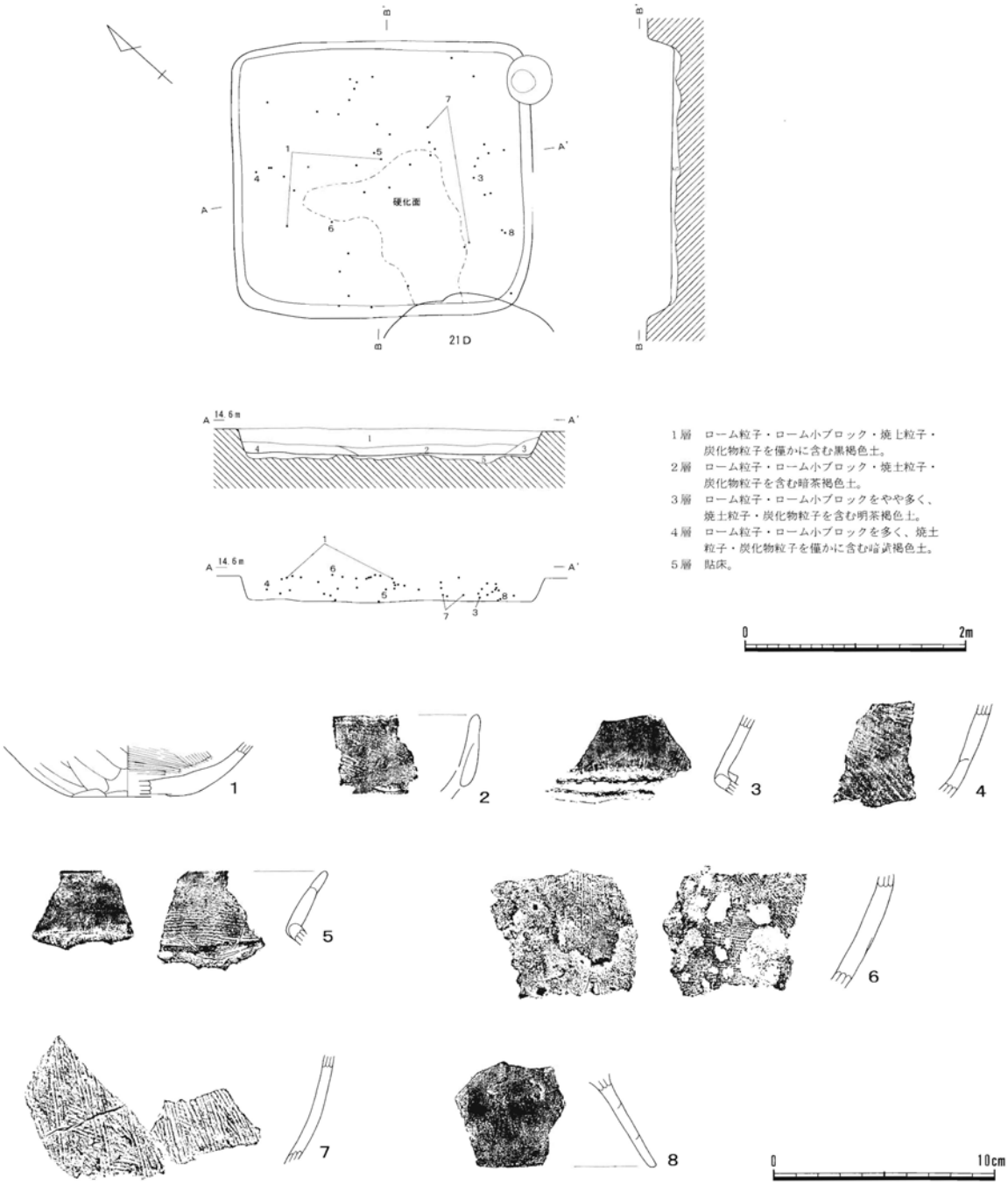
遺　構（第17図）

［位置］（Ｂ－２・３）グリッド。

［住居構造］７Ｈに切られる。北東コーナーは攪乱により壊されている。（平面形）方形。（規模）5.14×4.80m。（長軸方位）Ｎ－70°－Ｗ。（壁高）確認面からの掘り込みは浅く３～９cmを測る。（壁溝）確認できなかった。（床面）住居中央付近が良く硬化していた。貼床は２～16cmの厚さで施されていた。（炉）東壁の中央よりやや南に偏って位置するが、一部は後世のピットにより壊されている。平面形は楕円形で、55×50cm・深さ６cmの地床炉である。中央付近に焼土が確認されたが、炉床はあまり焼けていなかった。（柱穴）本住居に伴うものは検出されなかた。（貯蔵穴）２ヶ所確認された。貯蔵穴Ａは南西コーナー近くに位置し、平面形は隅丸長方形・規模80×64cm・深さ20cmを測る。覆土はローム粒子・



第15図　６号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）



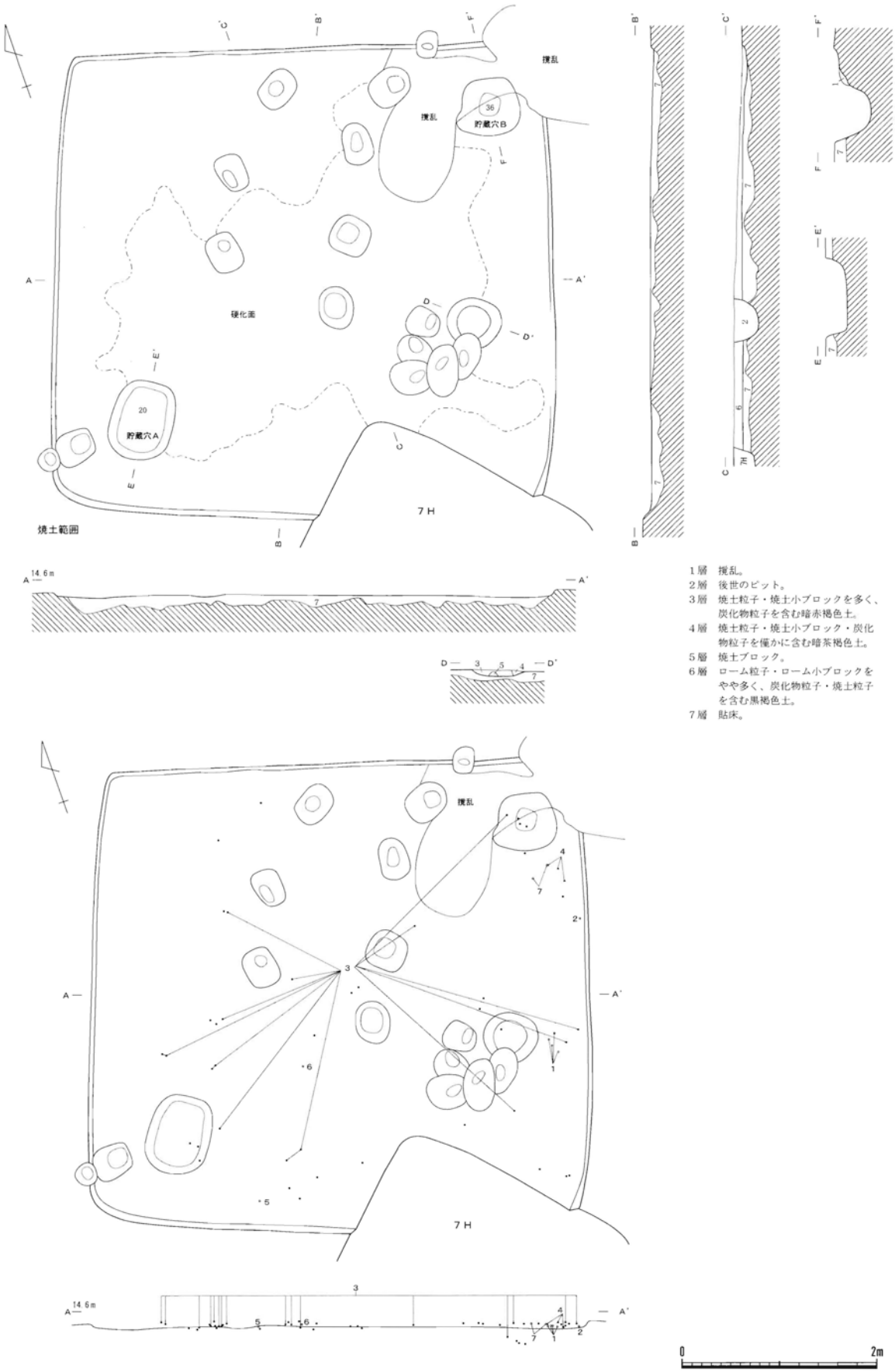
第16図　７号住居跡・出土遺物（1／60・1／3）

ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子を含む暗茶褐色土を基調とする。貯蔵穴Ｂは北東コーナー付近に位置するが、撹乱によりかなり壊されている。規模は不明であるが、深さは36cmを測る。覆土はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。（覆土）ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む黒褐色土を基調とする。

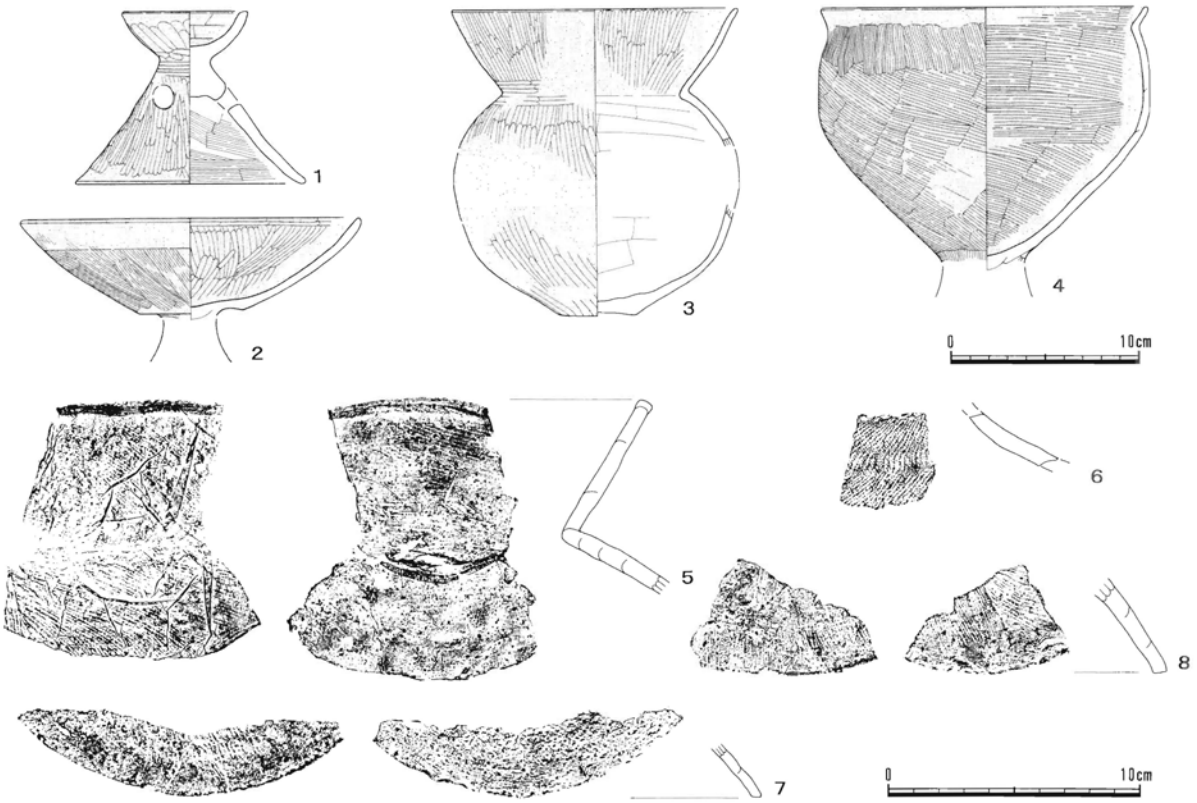
［遺物］器台・高坏・坩・壺・甕が出土した。

［時期］古墳時代前期。

［所見］覆土中から焼土や炭化材が検出されていることから、焼失住居の可能性がある。



第17図　８号住居跡（1／60）



第18図　８号住居跡出土遺物（1／4・1／3）

遺　物（第18図、第12表）

１は器台、２・７は高坏、３は坩、５・６は壺、４・８は甕である。

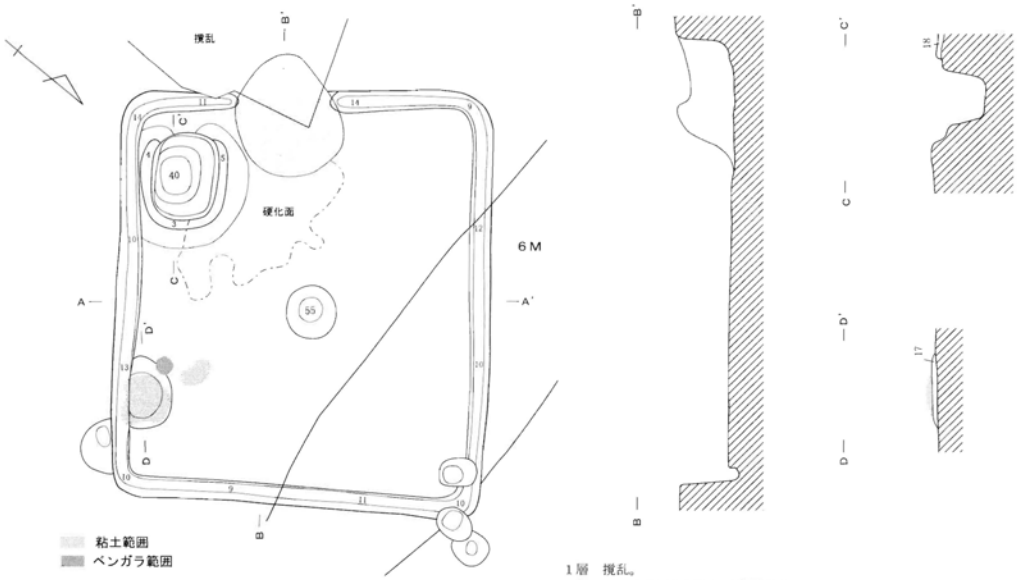
９号住居跡

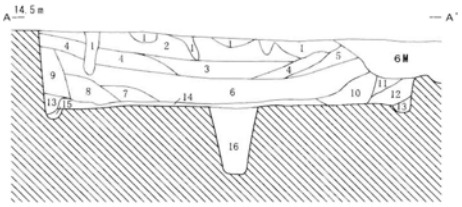
遺　構（第19・20図）

［位置］（Ａ－２・３）グリッド。

［住居構造］６Ｍに切られる。（平面形）長方形。（規模）3.38×2.94ｍ。（長軸方位）Ｎ－51°－Ｅ。（壁高）39～60㎝を測り、壁はほぼ垂直に立ち上がる。（壁溝）カマド部分を除いて全周する。上幅12～20㎝・下幅４～８㎝・深さ８～14㎝を測る。（床面）ほぼ直床であり、カマドの前がよく硬化していた。東コーナー付近南東壁際は、高さ４㎝・56×32㎝の楕円形に盛り土され、その上面からは白色粘土が検出された。その西側からは直径14㎝程の範囲でベンガラも検出された。（カマド）南西壁の中央よりやや南に位置するが、上層の一部は撹乱により壊されている。主軸方位はＮ－41°－Ｅ、長さ98㎝・幅85㎝・壁への掘り込み30㎝を測る。袖部はロームを馬蹄形状に残し、その上に粘土を被覆して構築されており、天井部も粘土で作られていたと思われる。煙道は85°の勾配で立ち上がっている。両袖部の内側と燃焼部は良く焼けていた。（柱穴）住居中央に深さ55㎝の柱穴が１本検出された。（貯蔵穴）南コーナーに位置し、平面形は隅丸長方形を呈する。規模は70×50㎝・深さ40㎝を測る。外側には３～５㎝の凸堤が巡らされており、その内側には幅10㎝程の段を有する。覆土はローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む明茶褐色土を基調とする。（覆土）15層に分層される。

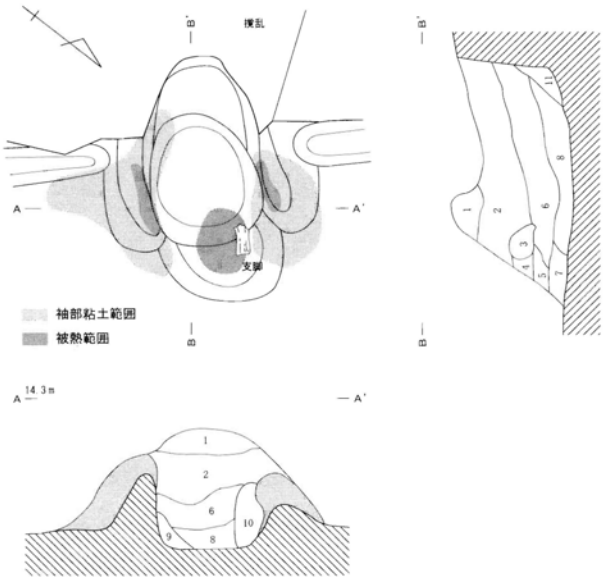
［遺物］カマド及び貯蔵穴周辺から坏・台付甕・甕、土製支脚が出土した。





1層　撹乱。
2層　ローム粒子を僅かに含む黒色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む黒色土(黒味強)。
4層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロックを含み、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む黒褐色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む明茶褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む明茶褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子を含む黒色土。
12層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロック・粘土小ブロックをやや多く、焼土粒子・炭化物粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
13層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子を僅かに含む明茶褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子・炭化材を含む暗黄褐色土。
15層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、炭化物粒子を僅かに含む暗黄褐色土。
16層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを僅かに含む暗黄褐色土（周囲をローム粒子・ロームブロックで充填）。
17層　ローム粒子・ロームブロックを多く、粘土粒子・粘土ブロックを含む暗茶褐色土。
18層　貼床。

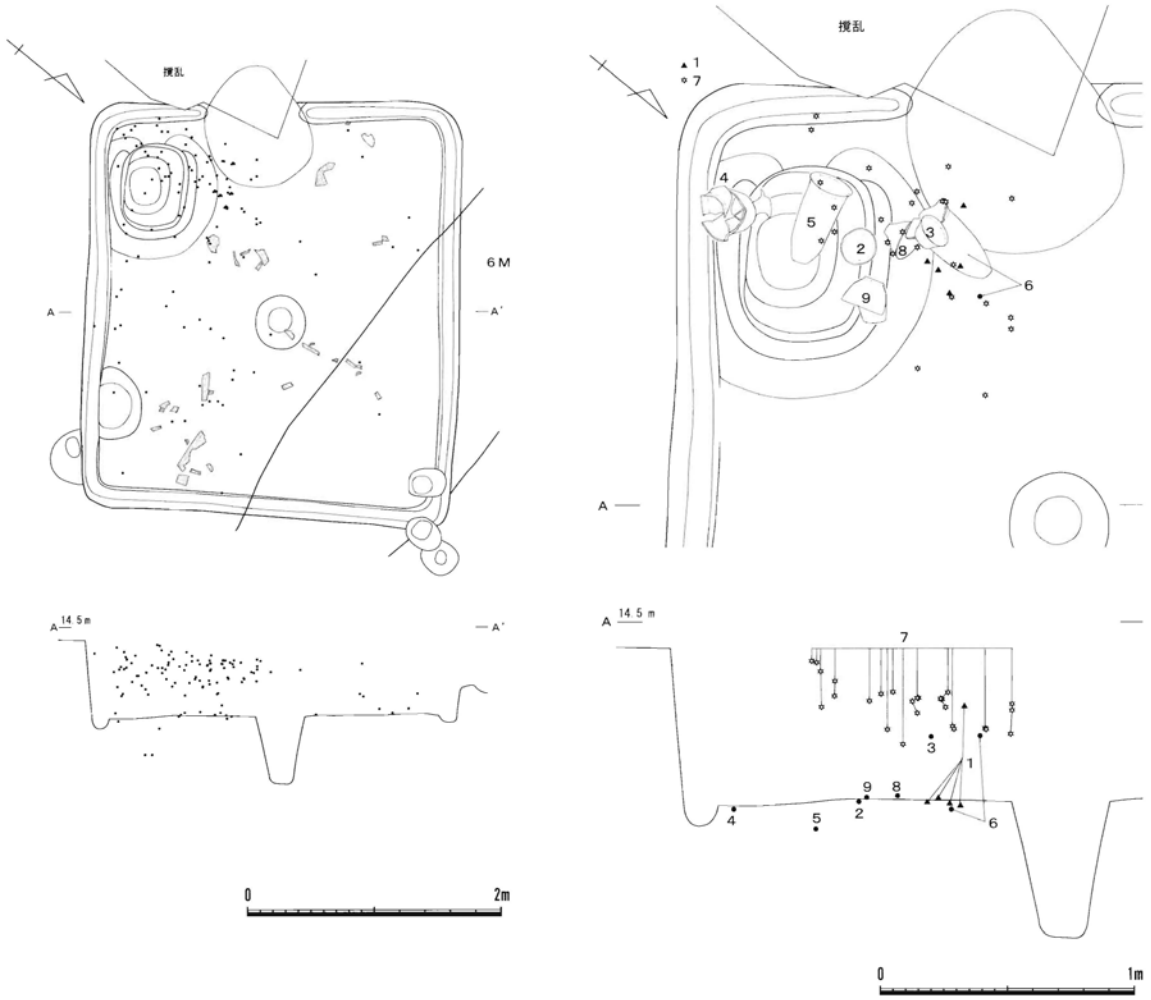
0　2m



1層　粘土粒子・粘土小ブロック・ローム粒子・ローム小ブロックを多く焼土粒子を僅かに含む暗茶褐色土。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む黒褐色土。
3層　灰白色粘土ブロック。
4層　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
6層　焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子・粘土粒子を含む暗茶褐色土。
7層　焼土粒子・焼土小ブロックをやや多く、ローム粒子・ローム小ブロック・炭化物粒子を含む暗茶褐色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロック・粘土粒子を含む黒色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、焼土粒子・焼土小ブロック・炭化物粒子を含む明茶褐色土。
10層　粘土粒子・粘土小ブロック・焼土粒子・焼土小ブロックを多く含む暗灰白色土。
11層　暗灰褐色粘土。

0　1m

第19図　９号住居跡・カマド（1／60・1／30）



第20図　９号住居跡遺物出土状態（1／60・1／30）

［時期］古墳時代後期（７世紀中葉）。

［所見］覆土中から、焼土と炭化材が検出されたことから焼失住居の可能性がある。ベンガラの分析は付編を参照。

遺　物（第21図、第13表）

すべて土師器である。１～３は坏、４～９は甕、10は土製支脚である。

10号住居跡

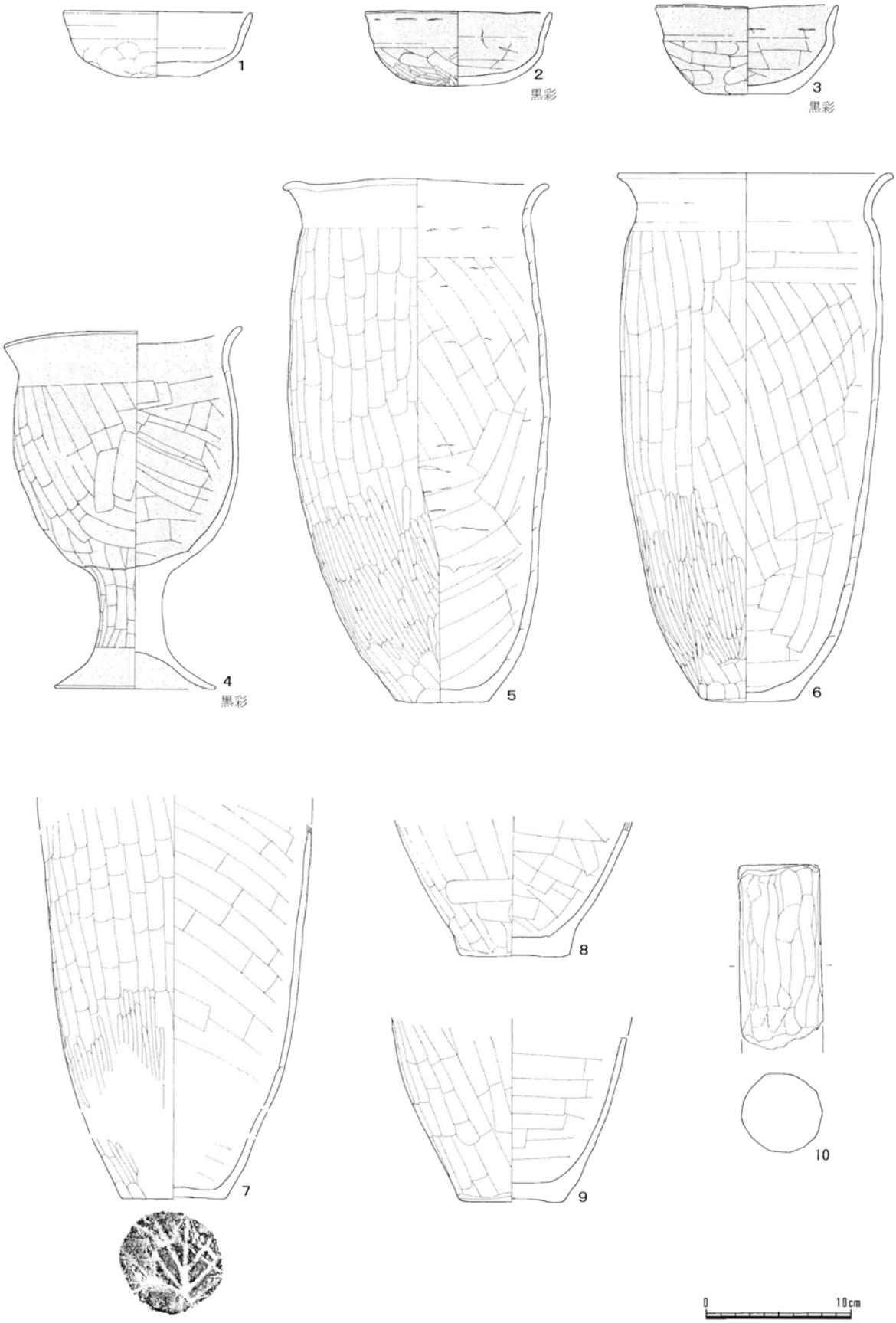
遺　構（第４図）

［位置］（Ａ－３）グリッド。

［住居構造］ほとんどが調査区域外であるため、詳細は不明。（床面）貼床は10㎝程の厚さで施されていた。（覆土）上層はローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土、下層はローム粒子・ローム小ブロックを多く、焼土粒子・炭化物粒子を含む暗黄褐色土を基調とする。

［遺物］出土しなかった。

［時期］古墳時代前期か。



第21図　９号住居跡出土遺物（1／4）

（３）方形周溝墓

１号方形周溝墓

遺　構（第22図）

［位置］（Ａ・Ｂ－２）グリッド。

［構造］６Ｍと９Ｈに切られ、40～45Ｄを切る。北側は調査区域外である。（周溝）周溝の外縁は南西－北東が6.70ｍである。平面形は隅丸方形と思われる。南西溝は確認できた範囲では、長さ5.50ｍ・上幅60～66㎝・下幅50～54㎝。南東溝は長さ5.9ｍ・上幅60×70㎝・下幅50㎝。北東溝は確認できた範囲では、長さ約2.80ｍ・上幅54～60㎝・下幅40～50㎝。溝底は比較的平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がっている。周溝の深さは標高から見ると全体的に等しいが、南コーナー付近は10㎝ほど浅くなっている。セクションＥ－Ｅ′の２層が本遺構の覆土であることから、60㎝以上の深さをもつことがわかる。覆土は16層に分層できた。特にセクションＢ－Ｂ′及びＤ－Ｄ′付近の上層のローム小ブロック・ロームブロックは、被熱により硬化したものと思われた。（方台部）方台部は南西－東北が5.50ｍで、柱穴Ｐ１～Ｐ６が配置良く検出された。今回の調査では、本遺構に伴うものと考えた。

［遺物］器台の脚部、壺・坩・甕の破片が出土したが、ほとんどが南西溝からの出土である。

［時期］古墳時代前期。

［所見］ここでは、方形周溝墓として扱ったが、方台部から検出された柱穴を本遺構に伴うものと考えた場合、上部に上屋構造を伴う遺構の可能性があり、従来「方形周溝墓」と称されている遺構の機能にも関わる重要な課題につながるものと考えられる。

遺　物（第23図、第14表）

１は器台、２は壺、３は坩、４～９は甕である。

（４）土　坑

31号土坑

遺　構（第24図）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］32・33Ｄを切る。壁面はほぼ垂直で、坑底面は平坦であったが、一部５～18㎝の厚さで貼床状に黄褐色土が、充填されていた。（平面形）長方形。（規模）172×102㎝。（深さ）70㎝前後を測る。（長軸方位）Ｎ－37°－Ｗ。（覆土）９層に分層される。

［遺物］図示できるものはなかった。

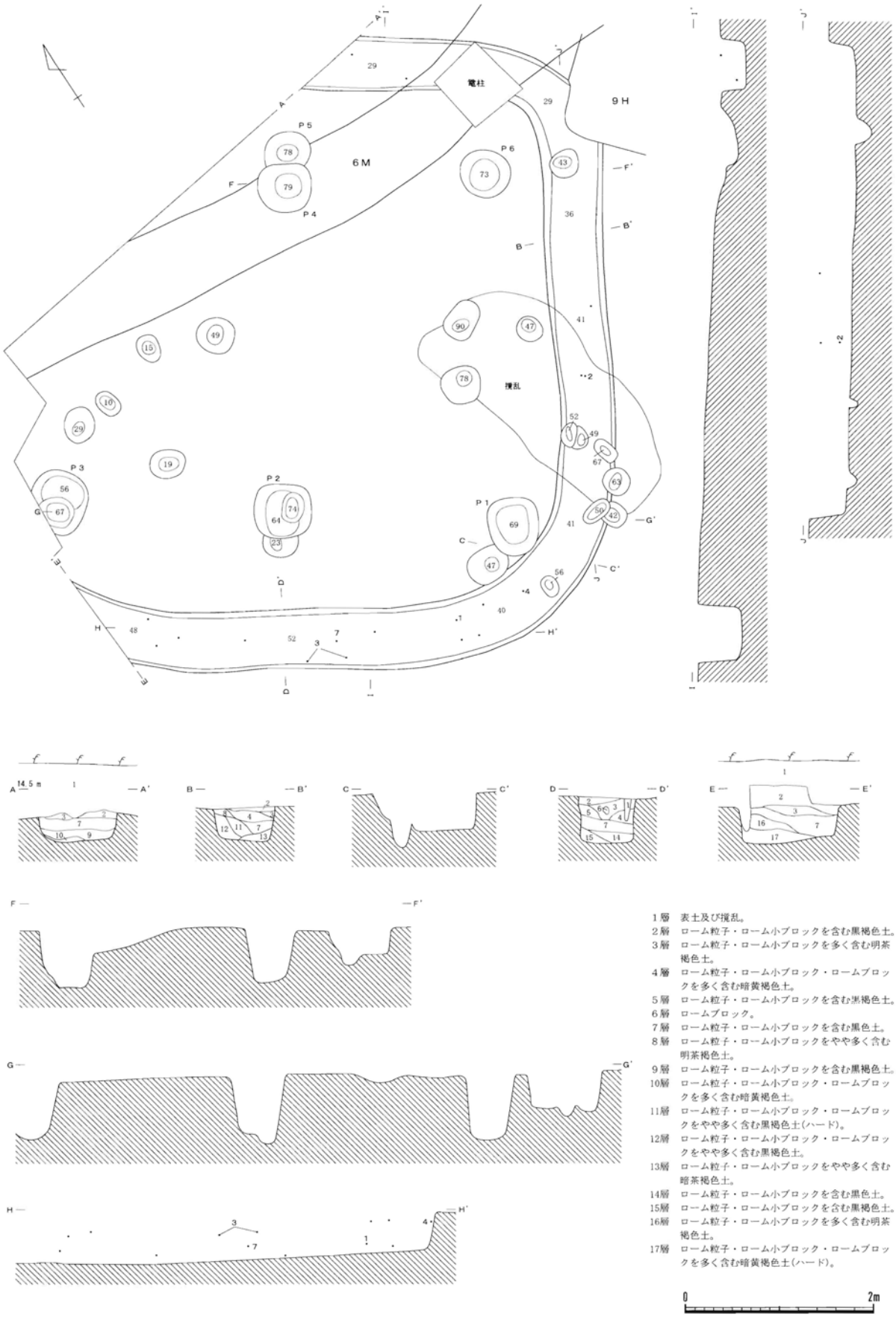
［時期］古墳時代前期か。

34号土坑

遺　構（第24図）

［位置］（Ｂ－２）グリッド。

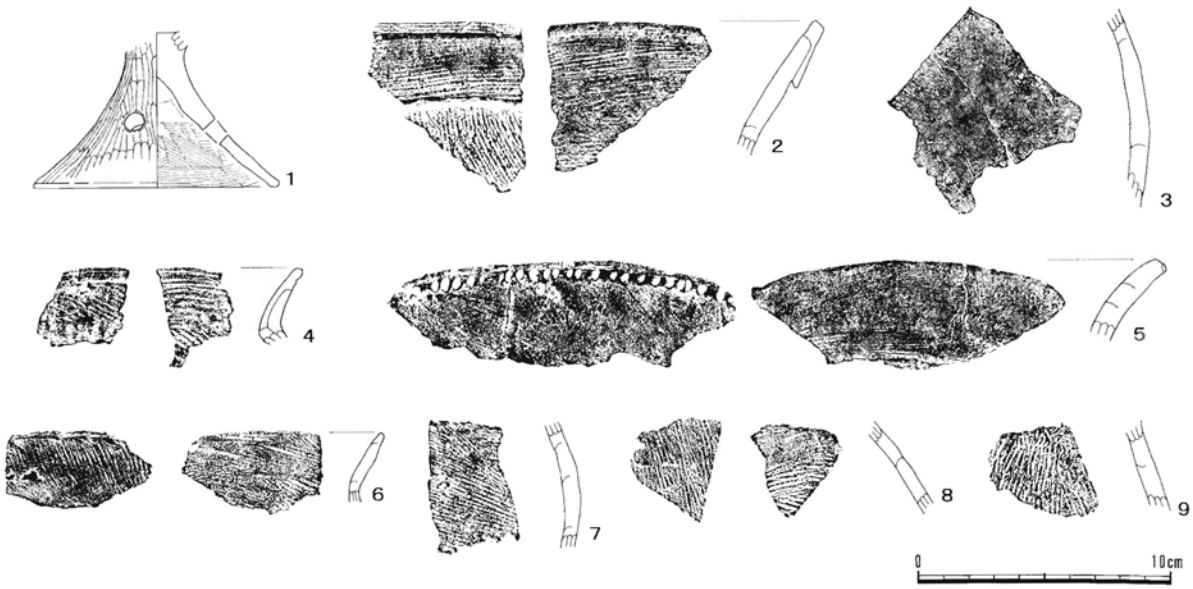
［構造］東側が一部撹乱により壊されている。壁面は急斜に立ち上がり、坑底面は平坦であるが西側が深くなっている。（平面形）ほぼ長方形。（規模）164×98㎝。（深さ）20～28㎝。（長軸方位）Ｎ－65°－Ｗ。（覆土）上層がローム粒子・ローム小ブロックを僅かに含む暗茶褐色土、下層がローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土を基調とする。



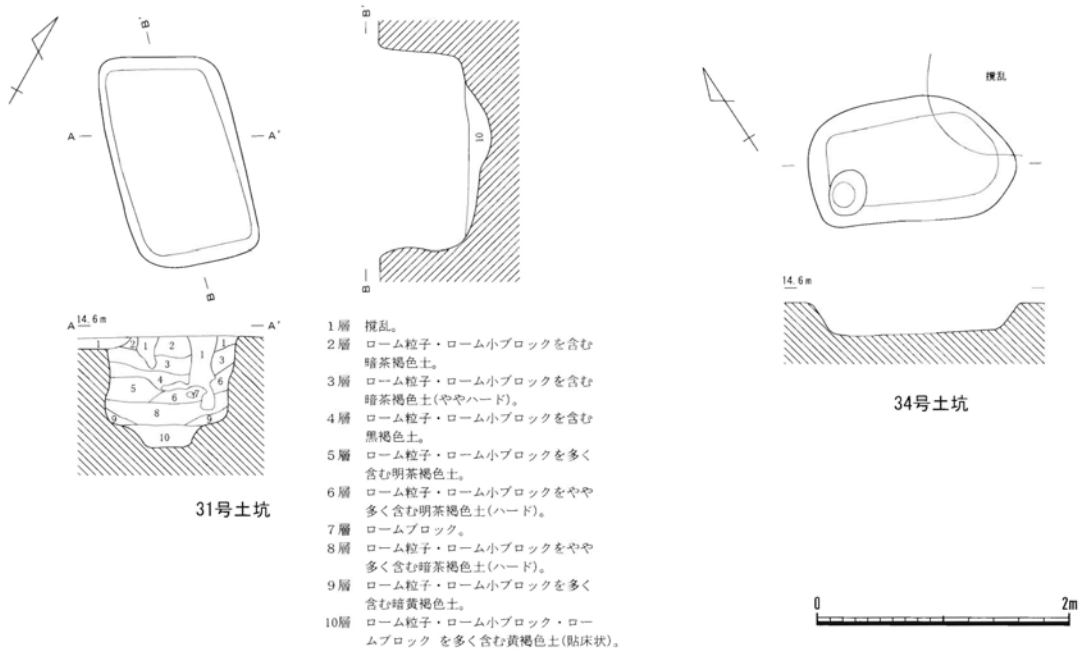
1層　表土及び攪乱。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
4層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
6層　ロームブロック。
7層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む明茶褐色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む黒褐色土(ハード)。
12層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックをやや多く含む黒褐色土。
13層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗茶褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒色土。
15層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む黒褐色土。
16層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む明茶褐色土。
17層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く含む暗黄褐色土(ハード)。

0　2m

第22図　１号方形周溝墓（1／60）



第23図　１号方形周溝墓出土遺物（1／3）



第24図　土坑（1／60）

［遺物］図示できる物はなかった。

［時期］古墳時代前期か。

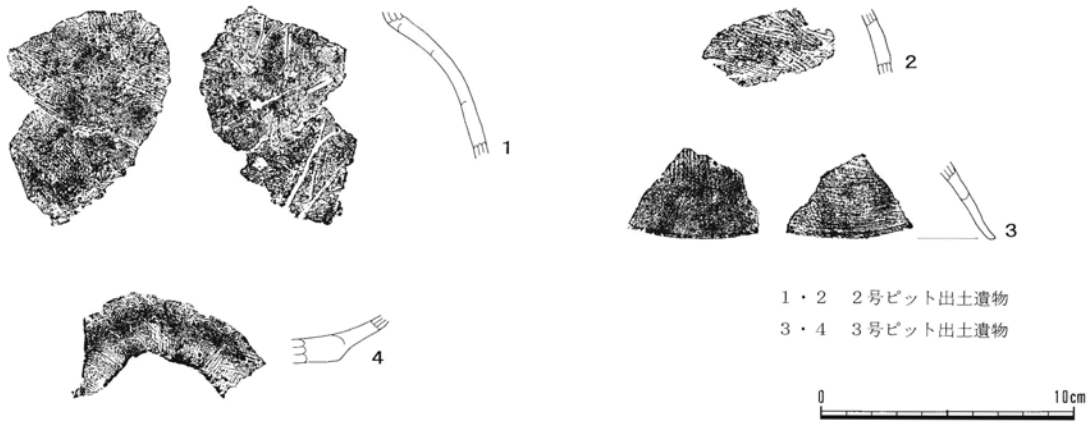
（５）ピット

調査区域内には多くのピットが検出されたが、その大部分が中世以降に比定できるものと考えられる。今回の報告では、そのすべてに遺構名を付けず、遺物が出土し、さらに実測図あるいは写真図版に図示できた遺物をもつピットに関してのみピット名を付け説明することにした。

今回、古墳時代前期としてピット名を付けたのは、Ｐ２・３の２本である（第４図）。

遺　物（第25図、第15表）

Ｐ２からは甕２点、Ｐ３からは高坏１点・壺１点が出土した。



第25図　ピット出土遺物（1／3）

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第10図1	器台	(3.7)	－	(13.2)	高坏の可能性もあり／脚台部破片／１ヶ所穿孔あり／外面赤彩	淡茶褐色／内外面黒斑あり	砂粒を僅かに含む	内面:ハケ目調整、裾部横ナデ／外面:縦位ヘラ磨き調整	炉上15cmの覆土中	脚部の30%程
第10図2	壺	－	－	－	口縁部／複合口縁／内面及び外面口縁部直下は赤彩	黄白色	砂粒を僅かに含む	内面:横位ヘラ磨き調整／外面:複合部ハケ目調整、以下横位ヘラ磨き調整	覆土中	小破片
第10図3	壺	－	－	－	頸部／内外面赤彩	明茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:横位ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後縦位ヘラ磨き調整	北コーナー近くの覆土中(床上約35cm)	小破片
第10図4	壺	－	－	－	頸部／内面に端末結節縄文が施文	黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:文様部以下に横位ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後縦位ヘラ磨き調整	炉の北西側の床上及び覆土中(床上約10cm)	小破片
第10図5	壺	－	－	－	広口壺か／「く」字状口縁／内外面赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面:横位ヘラ磨き調整	炉の南東側の覆土中(床上約25cm)	破片
第10図6	壺	－	－	－	胴部下半／外面赤彩	暗灰褐色	黄褐色粒子を多く含む	内面:剥離著しいが横位ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後横位あるいは斜位ヘラ磨き調整	炉の南側の覆土中(床上約25cm)	破片
第10図7	甕	－	－	－	口縁部／「く」字状口縁／口唇部外面にハケ状工具による刻みあり	淡茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:口縁部ハケ目調整、以下ヘラナデ／外面:ハケ目調整	炉の東側の覆土中(床上約20cm)	小破片
第10図8	甕	－	－	－	頸部～胴部上半	黒褐色	砂粒を僅かに含む	内面:粗いハケ目調整／外面:ハケ目調整	炉の北西側の覆土中(床上約20cm)	小破片
第10図9	甕	－	－	－	胴部中位～下半	明茶褐色	砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整	覆土中	小破片
第10図10	甕	－	－	－	台付甕の脚台部	砂粒を僅かに含む	暗茶褐色	内外面:粗いハケ目調整	覆土中	小破片
第10図11	土製品	－	－	－	土錘／長さ5.9cm・最大幅4.3cm・重さ121ｇ・穿孔径1.0cm／円筒形	暗茶褐色	茶褐色龍を僅かに含む	全体に指頭による押捺による成形痕が観察される	炉の東側の覆土中(床上約25cm)	一部欠損

（単位:cm）

第６表　２号住居跡出土遺物一覧

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第11図1	坩	5.4	9.0	3.0	口縁部内湾／底部は碁笥底／内外面赤彩	胎土は暗茶褐色	黄褐色粒子を含む	内面:口縁部ヘラ磨き調整、体部ヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後横位ヘラ磨き調整	北壁近くのほぼ床面上	口縁部の一部欠損／90%以上
第11図2	壺	(3.8)	－	6.8	平底	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	覆土中	胴部下半～底部80%程
第11図3	壺	(22.1)	(19.8)	－	「く」字状口縁／口唇部刻みなし／最大径は胴部中位	黒褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:口縁部ハケ目調整、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ハケ目調整	北壁近くのほぼ床面上	口縁部～胴部下半30%程
第11図4	甕	(9.9)	(12.3)	－	「く」字状口縁／口唇部刻みなし	黒褐色	黄褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	北西コーナーのほぼ床面上	口縁部～胴部下半40%程
第11図5	甕	－	－	－	胴部	淡茶褐色	砂粒を僅かに含む	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整	覆土中	小破片
第11図6	壺	－	－	－	台付甕の脚台部／裾部内面に折り返し部あり／S字甕と思われる	暗黄褐色を基調	金雲母をやや多く含む	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整後ナデ	覆土中	小破片

第7表　3号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第13図1	坩	6.6	9.9	－	小型丸底坩／口縁部僅かに内湾／内面体部を除き赤彩	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子を僅かに含む	内外面:ていねいなヘラ磨き調整	北西壁近くの覆土中(床上5～15cm)	70%程
第13図2	坩	7.0	13.8	2.9	口縁部僅かに内湾／底部は碁笥底／内外面赤彩	胎土は淡橙色	黄褐色留意・茶褐色粒子を含む	内外面:ていねいなヘラ磨き調整	北西壁近くの壁溝上層及び覆土中(床上5～16cm)	ほぼ完形品
第13図3	坩	(1.6)	－	4.0	底部は碁笥底／内外面赤彩	胎土は淡橙色	砂粒を僅かに含む	内外面:ていねいなヘラ磨き調整	南東壁近くの覆土中(床上約10cm)	体部下半～底部80%程
第13図4	壺	(4.6)	－	(8.2)	台付甕の脚台部／「ハ」字状	暗茶褐色	砂粒をやや多く含む	内面:ヘラナデ後一部ハケ目調整／外面:ヘラ磨き調整	北東壁近くの床面上及び覆土中(床上約10cm)	脚台部40%程
第13図5	甕	－	－	－	口縁部／外面に煤付着	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケ目調整後一部ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	北東壁中央の壁溝上層(床面レベル)	破片
第13図6	甕	－	－	－	口縁部／口唇部に刻みなし	暗茶褐色	茶褐色粒子を含む	内外面:ハケ目調整	覆土中	小破片
第13図7	甕	－	－	－	口縁部／口縁部僅かに内湾	暗茶褐色を基調	茶褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケ目調整後口唇部横ナデ／外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	東コーナー近くの覆土中(床上18cm)	小破片
第13図8	甕	－	－	－	胴部／外面に煤付着	内面:黒褐色／外面:黒色	暗茶褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケナデ／外面:密なハケ目調整	南東壁近くの覆土中(床上18cm)	小破片
第13図9	甕	－	－	－	胴部	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	住居中央からやや西コーナーに寄った覆土中(床上7cm)	小破片
第13図10	甕	－	－	－	胴部／外面に煤付着	内面:明茶褐色／外面:黒色	黄褐色粒子を含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	東コーナーのほぼ床面上	小破片
第13図11	甕	－	－	－	胴部下半／内面に煤付着	黒色を基調	砂粒を含む	内面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	北東壁近くの覆土中(床上約10cm)	小破片
第13図12	甕	－	－	－	台付甕の脚台部	暗茶褐色	黄褐色粒子を多く含む	内外面:ハケ目調整	覆土中	小破片

（単位:cm）

第8表　4号住居跡出土遺物一覧

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器 種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第14図1	甕	－	－	－	胴部	内 面：淡褐色土／外 面：黒褐色土	黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	内面:ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整後	住居中央からやや北西コーナーに寄った床面上	小破片
第14図2	甕	－	－	－	脚台部	暗茶褐色	茶褐色粒子をやや多く含む	内外面:粗いハケ目調整	床面上	破片

第９表　５号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器 種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第15図1	坩	4.0	7.6	3.0	口縁部は内湾／底部は碁笥底／厚手作り／内外面赤彩	胎土は暗黄褐色	茶褐色粒子をやや多く含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	貯蔵穴内	80%程
第15図2	坩	(2.1)	－	2.2	底部は碁笥底／内外面赤彩	胎土は暗赤褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:ヘラ磨き調整／外面:ヘラ削り後ヘラ磨き調整	北コーナーの床面上	体部下半から底部にかけて60%
第15図3	壺	－	－	－	口縁部～頸部／複合口縁／内面赤彩	暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子をやや多く含む	内面:ハケ目調整ヘラ磨き調整／外面:複合部ハケ目調整、頸部ヘラ磨き調整	貯蔵穴内	小破片
第15図4	甕	－	－	－	口縁部／口唇部刻みなし	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子を僅かに含む	内面:ヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整、口縁部はその後横ナデ	炉のすぐ北東の床面上	小破片
第15図5	甕	－	－	－	口縁部～胴部上半／Ｓ字甕と考えられる／外面に煤付着	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケ目調整／外面:指頭圧痕あり、肩部ハケ目調整／口縁部上半は内外面横ナデ	覆土中	小破片
第15図6	土製品	－	－	－	土玉／足玉と考えられる／直径2.8cm・穿孔径0.7cm・重さ17.6ｇ	暗黄褐色	砂粒を僅かに含む	指頭圧痕の成形痕のみが観察される	北コーナーの床面上	完形品
第15図7	石	－	－	－	石器かどうか不明／長さ7.3cm・幅4.1cm	－	－	－	覆土中	破片
第15図8	石	－	－	－	石器かどうか不明／長さ10.3cm・幅6.9cm	－	－	－	覆土中	破片

第10表　６号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器 種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第16図1	壺	(2.4)	－	6.0	底部／平底を呈し、中央部はやや窪む	黄橙色	茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:ハケ目調整／外面:ヘラナデ	住居中央から西コーナーにかけての覆土中(床上約20cm)	底部のみ50%
第16図2	壺	－	－	－	口縁部／複合口縁／内外面赤彩か	胎土は暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	覆土中	小破片
第16図3	壺	－	－	－	頸部～胴部／頸部に断面三角形の凸帯あり／内外面赤彩	胎土は暗茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	南東壁近くのほぼ床面上	小破片
第16図4	壺	－	－	－	胴部／外面赤彩	暗茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整、外面は粗いハケ目調整	北西壁近くの覆土中(床上約10cm)	小破片
第16図5	甕	－	－	－	口縁部／「く」字状口縁	暗茶褐色を基調	砂粒を含む	内面:ヘラナデ／外面:密なハケ目調整	住居中央の床面上	小破片
第16図6	甕	－	－	－	胴部	暗茶褐色を基調	砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整	住居中央からやや西コーナーに寄った覆土中(床上約25cm)	破片
第16図7	甕	－	－	－	胴部	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	住居中央から南コーナーにかけてのほぼ床面上	破片
第16図8	甕	－	－	－	脚台部／「ハ」字状	暗茶褐色	砂粒を含む	内面:ヘラナデ／外面:密なハケ目調整	南東壁近くの床面上	小破片

（単位:cm）

第11表　７号住居跡出土遺物一覧

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第18図1	器台	9.3	6.7	12.2	坏部は埦状／脚台部は裾部が大きく開く／脚台部内面を除き赤彩	胎土は暗茶褐色	砂粒をやや多く、金雲母を僅かに含む	坏部:内外面ヘラナデ／脚台部:内面ハケ目調整、外面ヘラ磨き調整、坏部との境は横方向のヘラ磨き調整	東壁近くのほぼ床面上	70%程
第18図2	高坏	(5.4)	18.0	－	坏部／坏部下半に稜をもつ／内外面赤彩	胎土は黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を含む	内面:ヘラ磨き調整／外面:摩耗が著しくやや不明であるがハケ目調整、口縁部はその後横ナデ	東壁近くの床面上	坏部90%強
第18図3	坩	16.4	(15.1)	4.0	口頸部は外傾／胴部最大径は中位／底部は碁笥底／口頸部内面及び外面赤彩	胎土は淡黄褐色	砂粒を僅かに含む	内面:口頸部ていねいにヘラ磨き調整、以下ヘラナデ／外面ていねいなヘラ磨き調整	住居の広い範囲（床面上及びほぼ床面上）に散在	40%
第18図4	甕	(14.1)	(17.3)	－	台付甕／脚台部を欠損／口唇部刻みなし／内外面赤彩か	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内外面:ハケ目調整、口縁部外面はその後横ナデ	貯蔵穴Ｂの南側のほぼ床面上	脚台部以外70%
第18図5	壺	－	－	－	口縁部～胴部	淡茶褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子を含む	内面:口頸部ハケ目調整後ヘラ磨き調整、胴部ハケナデ／外面:ハケ目調整	南壁近くの床面上	破片
第18図6	壺	－	－	－	胴部上半／単節斜縄文２段	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面:ヘラ磨き調整	住居中央からやや南西コーナー寄りの床面上	小破片
第18図7	高坏	－	－	－	脚台部／ハ字状／裾端部は平坦／内外面赤彩	胎土は暗茶褐色	黄褐色粒子をやや多く含む	内面:ハケ目調整／外面:ハケ目調整後ヘラ磨き調整	貯蔵穴Ｂの南側のほぼ床面上	破片
第18図8	甕	－	－	－	脚台部／ハ字状／裾端部は平坦	暗茶褐色	黄褐色粒子をやや多く含む	内外面:ハケ目調整	貯蔵穴Ａ内	破片

第12表　８号住居跡出土遺物一覧

挿図番号	器種	器高	口径	底径	特徴	色調	胎土	調整	出土位置	遺存度
第20図1	土師器坏	4.5	(13.0)	－	口縁部と体部の境に稜／粗雑な作り／幾分平底を意識しているものか／全体にやや黒く煤けていることから、黒色土器の可能性あり	淡茶褐色を基調	砂粒をやや多く、黄褐色粒子を僅かに含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り／口縁部直下は未調整(指頭押捺の成形痕)	カマド前面の床面上及び覆土中(床上約35cm)	40%程
第20図2	土師器坏	5.1	13.0	－	口縁部と体部の境に稜／粗雑な作り／全体に黒く煤けていることから、黒色土器の可能性あり	胎土は暗黄褐色	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後底部を中心に粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴上層(床面レベル)	ほぼ完形品
第20図3	土師器坏	6.1	12.6	6.0	口縁部と体部の境に稜／やや深身／底部は平底／粗雑な作り／黒色土器の可能性あり	胎土は暗黄褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下ヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ	カマド前面の覆土中(床上27cm)	完形品
第20図4	土師器甕	25.3	16.5	11.2	台付甕／口縁部は外反／脚台部は脚柱部をもち、裾部は「ハ」字状に開く／粗雑な作り／外面は黒く煤けている／全体に黒色を呈していることから黒色土器の可能性あり	胎土は暗茶褐色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部と脚台部裾部は横ナデ、その他はヘラ削り／外面:口縁部と脚部は横ナデ、その他はヘラ削り	貯蔵穴南縁の凸堤上	90%程
第20図5	土師器甕	36.5	18.4	6.4	口縁部と胴部中位のほぼ同位置に最大径／口縁部は外反／外面の胴部上半～中位に粘土付着痕、胴部中位～底部に二次焼成痕／粗雑な作り	暗橙色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下斜方向のヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ、胴部下半にはその後粗いヘラ磨き調整	貯蔵穴上層	ほぼ完形品
第20図6	土師器甕	36.9	19.0	6.6	口縁部に最大径／口縁部は外反／外面の胴部上半～中位に粘土付着痕、胴部中位～底部に二次焼成痕／粗雑な作り	暗橙色を基調	砂粒をやや多く含む	内面:口縁部横ナデ、以下斜方向のヘラナデ／外面:口縁部横ナデ、以下ヘラ削り後ヘラナデ、胴部下半にはその後粗いヘラ磨き調整	カマド前面の床面上及び覆土(床上25cm)	95%程

（単位:cm）

第13表　９号住居跡出土遺物一覧（１）

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	器 種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第20図7	土師器甕	(28.1)	－	7.2	胴部中位～底部／胴部中位～底部に二次焼成痕／底部に木葉痕	暗橙色	砂粒をやや多く含む	内面:斜方向のヘラナデ／外面:ヘラ削り後ヘラナデ、胴部下半にはその後粗いヘラ磨き調整	カマド前面から貯蔵穴にかけての覆土中(床上20～57cm)に散在	胴部中位～底部 80％程
第20図8	土師器甕	(9.9)	－	7.5	胴部下半～底部／底部がやや厚味をもつ／底部中央にやや窪みあり	淡茶褐色	砂粒をやや多く、茶褐色粒子を僅かに含む	内面:ヘラナデ／外面:ヘラ削り後ヘラナデ	貯蔵穴北西縁の凸堤上	胴部下半～底部 100％
第20図9	土師器甕	(12.9)	－	7.2	胴部下半～底部／輪積痕で剥離／底部中央に窪みあり	暗茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:ヘラナデ／外面:ヘラ削り後ヘラナデ	貯蔵穴北縁の凸堤上	胴部下半～底部 70％程
第20図10	土製品	－	－	－	支脚／円筒形／上面の一部遺存／遺存長12.6cm・直径5.8cm	暗茶褐色	茶褐色粒子を僅かに含む	平坦面をもつ成形痕	カマド内	80％程

第13表　９号住居跡出土遺物一覧（２）

挿図番号	器 種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	出土位置	遺存度
第23図1	器台	(6.4)	－	9.7	坏部底部～脚台部／高坏の可能性あり／裾部は大きく開く／坏部内面底部及び脚台部外面は赤彩	胎土は暗黄褐色	砂粒を僅かに含む	坏部:内面はヘラ磨き調整／脚台部:内面はハケ目調整、外面はハケ目調整後ヘラ磨き調整	南西溝の南コーナー寄りの覆土中(溝底上7cm)	脚台部 80％程
第23図2	壺	－	－	－	口縁部／複合口縁／口唇端部はシャープに面取り	暗黄褐色	黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	南東溝中央の覆土中(溝底上10cm)	破片
第23図3	坩	－	－	－	胴部／壺の可能性あり／外面赤彩	胎土は淡茶褐色	茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面:ナデ／外面:ハケ目調整後ていねいなヘラ磨き調整	南西溝中央の覆土中(溝底上約30cm)	破片
第23図4	甕	－	－	－	口縁部／口唇部刻みなし	暗橙色	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面:ハケ目調整／外面:ハケ目調整後横ナデ	南コーナーの覆土中(溝底上約30cm)	小破片
第23図5	甕	－	－	－	口縁部／口唇部外面に刻み	暗黄褐色	黄褐色粒子を多く、砂粒を含む	内外面:ハケナデ	覆土中	破片
第23図6	甕	－	－	－	口縁部／口唇部刻みなし	暗橙色	砂粒を僅かに含む	内外面:ハケ目調整	覆土中	小破片
第23図7	甕	－	－	－	胴部	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を含む	内面:ヘラナデ後粗いヘラ磨き調整／外面:ハケ目調整	南西溝中央の覆土中(溝底上約15cm)	小破片
第23図8	甕	－	－	－	胴部	内面:暗黄褐色／外面:黒褐色	黄褐色粒子を僅かに含む	内面:ハケ目調整後ヘラナデ／外面:ハケ目調整	覆土中	小破片
第23図9	甕	－	－	－	脚台部／ハ字状	淡茶褐色	黄褐色粒子・砂粒をやや多く含む	内面:ヘラナデ／外面:ハケ目調整	覆土中	小破片

第14表　１号方形周溝墓出土遺物一覧

挿図番号	遺構名	器種	器高	口径	底径	特　　徴	色　調	胎　土	調　　整	遺存度
第25図1	Ｐ２	甕	－	－	－	頸部～胴部中位／外面は黒く煤けている	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子をやや多く含む	内面：頸部はハケ目調整、胴部はヘラナデ後ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整後粗いヘラ磨き調整	破片
第25図2	Ｐ２	甕	－	－	－	胴部	暗茶褐色	黄褐色粒子・砂粒を多く含む	内面：ヘラナデ／外面：ハケ目調整	小破片
第25図3	Ｐ３	高坏	－	－	－	脚台部／器台の可能性もあり／「ハ」字状に開く／器厚が薄い	暗茶褐色	砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整／外面：ハケ目調整後口縁部は横ナデ	小破片
第25図4	Ｐ３	壺	－	－	－	底部／一部外面は黒く煤けている／平底甕の可能性もあり	暗茶褐色を基調	黄褐色粒子・茶褐色粒子・砂粒を僅かに含む	内面：ハケ目調整後ヘラ磨き調整／外面：ハケ目調整	破片

（単位:cm）

第15表　ピット出土遺物一覧

第3節　中世以降

（1）概　要

ここで扱う遺構・遺物の時代設定については、出土遺物や遺構の覆土からの判断では詳細な時代設定を行うことが難しかったため、中世以降という枠で捉えることにした。

検出された遺構は、火葬墓2基・土坑2基・井戸跡1基・溝跡2本などである。中でも最も新しい時代の遺構としては、昭和の耐火レンガを出土する27Dがあるが、2Wからもゴミなどの出土もあることから、これらの詳細図面の掲載は省略することにした。また、5・6Mのように野火止用水跡と考えられる遺構が検出され、当市での初めての発掘調査例となった。

さらに、調査区域内には数多くのピットが存在し、その大部分が中世以降に比定できるものと考えられるが、ピット内からの遺物の出土はなかったため、ピット名も敢えて付けなかった。ここでの詳細説明は割愛することにする。

（2）土　坑

21号土坑

遺　構（第26図）

［位置］（B－2）グリッド。

［構造］上層より人骨が出土し、覆土に焼土が確認されたため、火葬墓と思われる。3基が重複した形で図示したが人骨が集中して出土した部分は131×94cm・深さ8cmの楕円形で、中央付近には深さ40cm程のピットがあった。（長軸方位）N－23°－E。（覆土）6層に分層される。

［遺物］人骨と銅銭6枚（六文銭）が出土した。人骨の分析については、付編参照。

［時期］中世か。

遺　物（図版13－3）

六文銭である。高熱により変形し、銭貨の種類は判別できなかった。

22号土坑

遺　構（第26図）

［位置］（B－2）グリッド。

［構造］小骨片と歯が出土し、覆土に焼土が確認されたことから火葬墓と思われる。（規模）64×42cm。（深さ）5cm。（長軸方位）N－73°－W。

［遺物］小骨片と歯が出土した。人骨の分析については、付編参照。

［時期］中世か。

23号土坑

遺　構（第26図）

［位置］（C－3）グリッド。

［構造］４Ｈを切り、後世のピットに切られる。確認できた部分では、壁面は緩やかに立ち上がり、坑底面は平坦である。（規模）不明×60㎝。（深さ）26㎝。（長軸方位）Ｎ－80°－Ｗ。（覆土）４層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

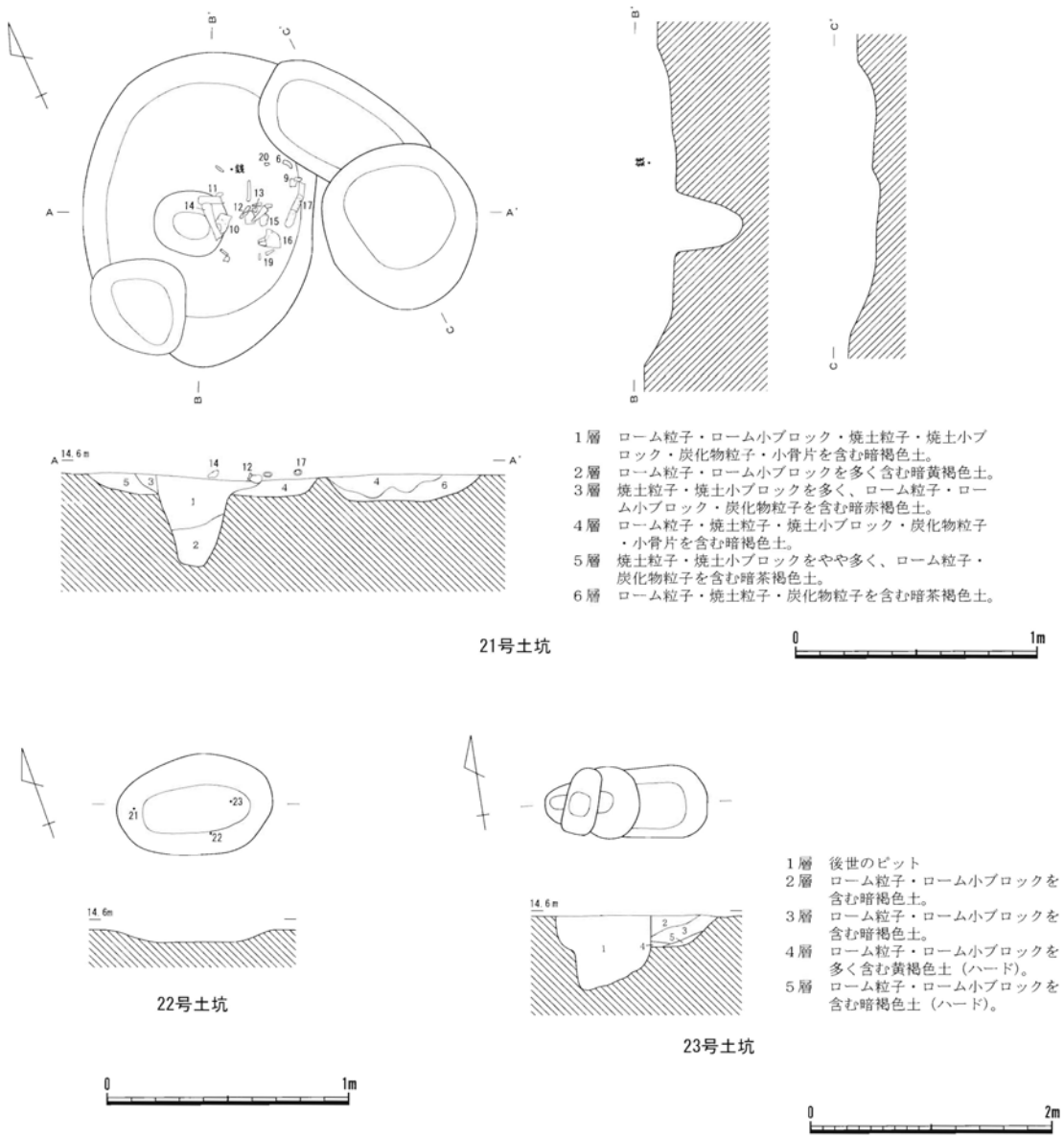
［時期］近世以降か。

27号土坑

遺　構（第４図、図版８－６・７）

［位置］（Ｂ－３）グリッド。

［構造］本遺構は出土遺物から昭和時代以降のものと判断し、基本構造として、以下に特徴を列記するに留めることにする。



第26図　土坑（1／30・1／60）

①掘り込みの平面形は円形で径102㎝を測る。

②掘り込みの内側に粘土が貼られ、その内部には木桶が設置されている。

③木桶の内部の底面立ち上がり部分には外の壁に向かって鉄釘が打たれ固定されている。

④木桶の深さは確認面から約28㎝。

⑤木桶の中からレンガ３点（赤レンガ２点と耐火レンガ１点）と酒フタやストローなどが出土した。

［遺物］刻印のある耐火レンガ１点を図示した。

［時期］現代。

遺　物（第27図）

“ＭＡＲＵＫＯＳＩ”の刻印のある耐火レンガである。長さ23.0㎝・幅11.5㎝・厚さ6.4㎝。この刻印のあるレンガは、丸越工業株式会社製品（註１）であり、ケイソウ土質耐熱煉瓦と呼ばれる。

第27図　27号土坑出土遺物（1／4）

（３）井戸跡

２号井戸跡

遺　構（第４図、図版８－８）

［位置］（Ｃ－３）グリッド。

［構造］本遺構は出土遺物から昭和時代に埋め戻されたものと判断し、基本構造の説明に留めることにする。（平面形）楕円形。（規模）開口部は長径1.60ｍ・短径1.5ｍで、上部に幅10～15㎝・深さ17～40㎝の段を有し、ロームが貼られていた。内側は長径1.30ｍ・短径1.22ｍを測る。

［遺物］ペットボトルなどのゴミ類が出土した。

［時期］近・現代か。

［所見］危険防止のため、深さ80㎝程掘り下げたところで調査を中止した。

（４）溝　跡（野火止用水跡）

５号溝跡

遺　構（第28図）

［位置］（Ａ～Ｃ－４、Ｃ－３）グリッド。

［構造］本遺構の東側半分は調査区外にあるものと思われる。確認面であるロームと本遺構の上端との境界はダラダラして区分は難しい。これについては、第28図の等高線を見ると本遺構及び６Ｍについても遺構の走行方位に平行して等高線が変化していることから、元々地形に合わせた構築を意図していたとも考えられるが、かなり広範囲にわたる基盤整備が行われていたとも考えられるであろう。断面形の基本は箱薬研形である。（規模）調査区東端の（Ａ－４）グリッドを中心に検出され、確認できる範囲での長さは17.2ｍである。（深さ）溝底面の標高は13.9ｍ前後であり、等高線の最高値14.4ｍから換算するとローム確認面からの深さは約50㎝である。（走行方位）Ｎ－４°－Ｗで、おおよそ南北方向に直線的に走行している。（覆土）24層に分層される。特に溝底に近い部分で砂礫が多く含まれるのは特徴的である。また、南端の上端を中心に粘土層が検出され、確認面近くの上層部分では広範囲に硬化面が確

認された。（溝底面の状態）いわゆる“水付き”と呼ばれる赤く酸化した面（銹着面）が広い範囲で確認できる。

［遺物］陶磁器を中心に土器・ガラス製品・土製品・石製品・銅銭が出土した。

［時期］近世～近代（19世紀後半～20世紀前半）。

［所見］本遺構は溝跡で取り扱ったが、人為的に構築された水路跡（野火止用水跡）と考えられる。規模については、大部分が調査区外の東側と考えられるため、詳細構造は不明とするしかない。ただ、第28図の礫範囲を溝底最下層と考えた場合、上端ラインで比較的安定している標高14ｍラインから北隅の調査区境界までの距離約0.6ｍを参考にすると、幅員はその倍の約1.2ｍと推定することができる。これについては、第34図の『野火止用水断面復元模式図』を参考にすると、粘土層の下層での幅員が約1.5ｍであることから、それよりやや規模は小さいが、誤差を考えると同程度の規模である可能性がある。

遺　物（第30図、図版13－4・図版14～16、第16表）

１・２は砥石である。１は長さ5.6㎝・幅2.9㎝・厚さ2.0㎝・重さ39.0ｇ。断面は三角形で全体に三角柱を呈している。２は上端は欠損している。長さ5.0㎝・幅3.7㎝・厚さ2.8㎝・重さ60.0ｇで、断面は中央部の厚さが薄くなっており撥状を呈している。

３・４は銅銭である。３は寛永通宝の破片で、４は半銭（明治十年）である。

５～99は陶磁器を器種別に集成した。５は猪口、６～25は湯飲茶碗、26～41は皿、42～51は飯茶碗・茶碗、52～57・78～83は鉢・くらわんか皿・蓋、58～68は徳利、69～72は小瓶・大瓶、73～77は土瓶、84～91は急須、92は油差し、93はおろし皿、94・95はレンゲ、96～99は擂鉢である。

100～106は土器で、100は瓦灯、102・103は風炉、104・105は手焙り、106は焜炉である。

107～112はガラス製品で、107・108はランプである。その他は器種は不明であるが、小瓶であろう。

113・114は石筆である。113は長さ2.3㎝・重さ2.1ｇ。断面は0.6×0.8㎝の楕円形を呈している。114は長さ2.0㎝・重さ1.3ｇ。断面は0.5×0.6㎝の楕円形を呈している。

115・116は素焼人形である。115は狐拳で、高さ3.2㎝。116は箱庭道具で、高さ2.5㎝。

６号溝跡

遺　構（第29図）

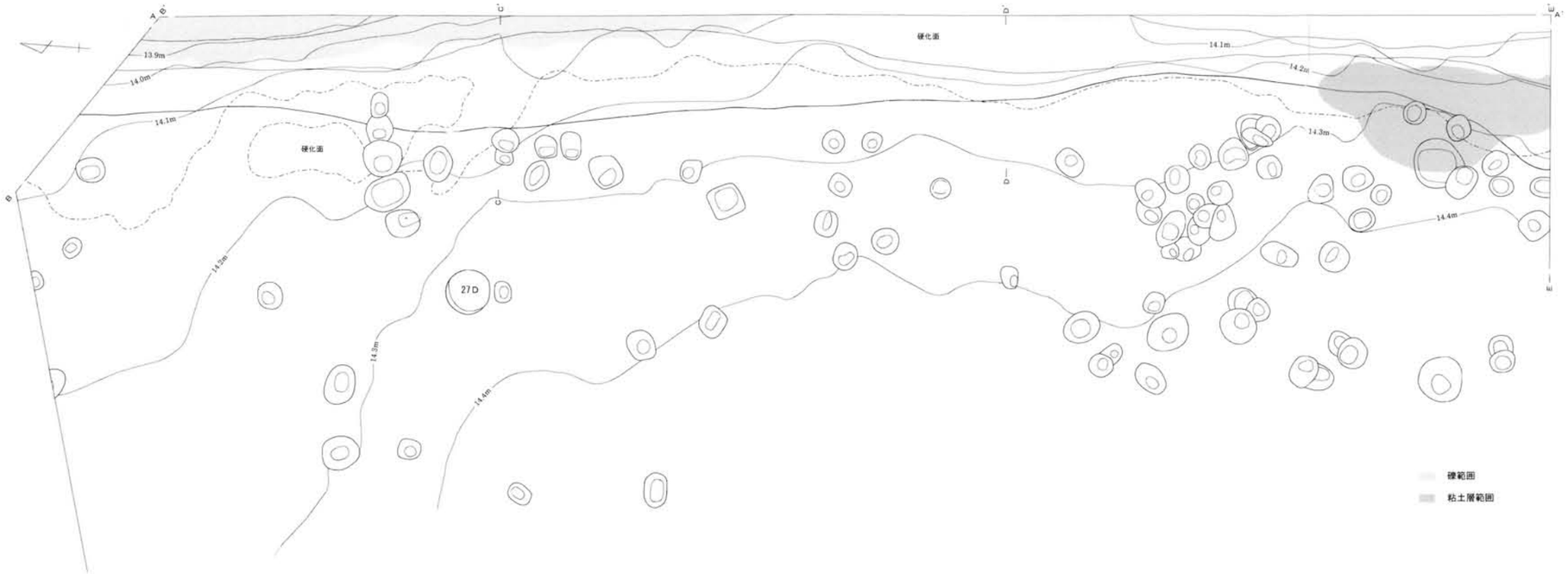
［位置］（Ａ－２～４）グリッド。

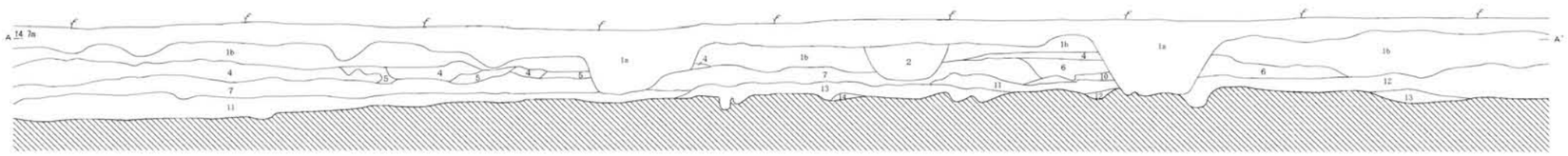
［構造］５Ｍと調査区北東端で直交し、西側に走行している。なお、平面図に図示できなかったが、南側の上端に沿って幅15㎝程の灰白色粘土層（８層）が走行していることが確認できた。（規模）確認できた範囲での長さは20.8ｍである。上幅40～134㎝・下幅10～40㎝を測り、断面形は箱薬研形である。（深さ）20～32㎝。（走行方位）Ｎ－Ｗ。（覆土）10層に分層される。

［遺物］出土しなかった。

［時期］近世～近代。

［所見］本遺構は溝跡として取り扱ったが、５Ｍと同様に人為的に構築された水路跡（野火止用水跡）と考えられる。なお、調査当初は本遺構を最近の排水溝と安易に考えていたこともあり、南側の上端に沿って検出された灰白色粘土層については実測を行わず除去してしまった。おそらく、この灰白色粘土層は、第34図の『野火止用水断面復元模式図』を参考にすると堤防の役割を果たしたものと考えられる。

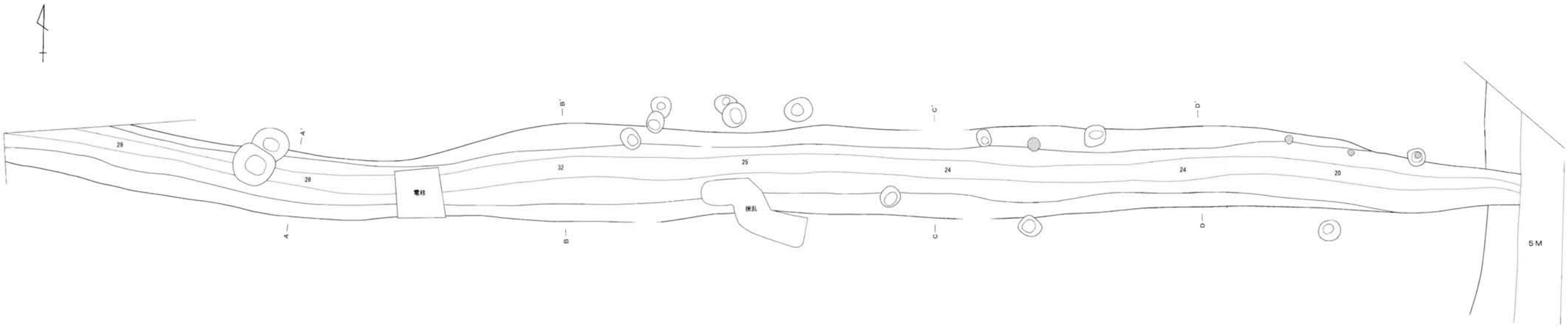




1a層　表土。
1b層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石・礫を含む暗褐色土。
2層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土(後世のピット)。
4層　黄褐色土(ローム充填土)。
5層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石・礫を含む暗褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石・礫を含む暗褐色土(11層の礫を含む)。
8層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土。
9層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗茶褐色土(ハード・鉄分を含む)。
11層　砂礫層(陶磁器を多く出土)。
12層　ローム粒子・ローム小ブロックを含み・小石を僅かに含む暗褐色土(ハード)。
13層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石・礫を含む暗褐色土。
14層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。
15層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土(ハード)。
16層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗褐色土。
17層　黄灰褐色粘土(鉄分を多く含む)。
18層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土(ハード)。
19層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗褐色土。
20層　ロームブロック。
21層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く含む暗褐色土。
22層　暗茶褐色土(漸移層)。
23層　ローム粒子・ローム小ブロック・灰褐色粘土を多く含む暗茶褐色土(混和粘土層)。
24層　ローム粒子・ローム小ブロック・小石を含む暗褐色土。
25層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

0　2m

第28図　5号溝跡（1／60）

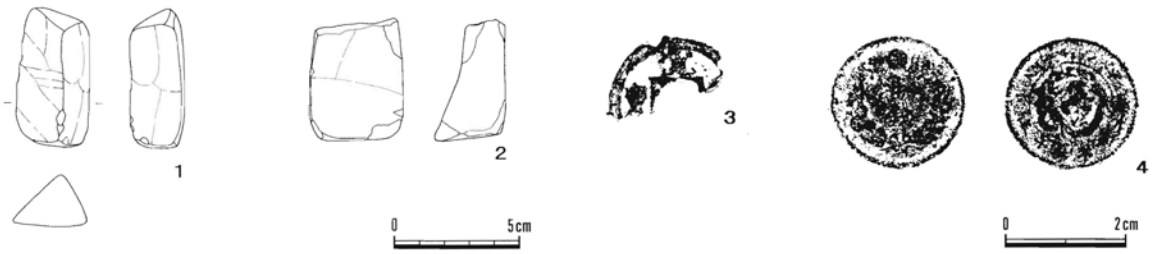


柱根状の硬化面

1層　撹乱。
2層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗茶褐色土。
3層　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子をやや多く含む含む明茶褐色土。
4層　ロームブロック。
5層　ローム粒子・ローム小ブロック・ロームブロックを多く、粘土粒子を含む暗黄褐色土。
6層　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックをやや多く含む含む明茶褐色土。
7層　ローム粒子・ローム小ブロック・粘土粒子・粘土小ブロックを多く含む含む暗褐色土。
8層　ローム粒子・ローム小ブロックを含む灰白色粘土。
9層　粘土粒子・粘土小ブロックを多く、ローム粒子・ローム小ブロックを含む暗灰褐色土。
10層　ローム粒子・ローム小ブロックをやや多く、粘土粒子・粘土小ブロック含む暗茶褐色土。
11層　ローム粒子・ローム小ブロックを多く含む暗黄褐色土。

0　2m

第29図　6号溝跡（1／60）



第30図　５号溝跡出土遺物（1／3・4／5）

註１　丸越工業株式会社の松浦一弘氏にはメールにて懇切丁寧に対応していただいた。丸越工業株式会社は、本社が石川県七尾市石崎町に所在し、10年ほど前には東京営業所が関東地方（浅草・神田・埼玉）を転々とし、志木市館（志木市館２－５－２）でも一時営業を行っていたという。丸越工業株式会社がケイソウ土質耐熱煉瓦を“ＭＡＲＵＫＯＳＩ”ブランドとして生産を始めたのが昭和28年で、古いタイプはＪＩＳマークや品番が刻印され、新しいタイプはインクのスタンプになっているという。さらに、“ＭＡＲＵＫＯＳＩ”の刻印下にも刻印があり、この一部が破損していたため、松浦氏に確認してもらった。その結果、ＪＩＳ分類（Ａ・Ｂ・Ｃ表示）が一般になるのは昭和31年頃以降であり、その以前は、“Ｎ－１”“Ｎ－２”（№１、№２かも）の刻印で販売していたということであることから、今回の刻印レンガは昭和31年頃以前の初期に近い製品である可能性が濃厚という見解である。

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	種別	器種	法量			製作の特徴	産地推定	時期
			器高	口径	底径			
図版13-4-5	磁器	猪口	－	－	－	内面に見込み／酸化コバルト	肥前系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-6	磁器	湯飲茶碗	4.7	7.0	2.8	外面：松竹梅文／8と類似、セット物か	瀬戸系	19c 中頃
図版13-4-7	磁器	湯飲茶碗	5.0	－	3.0	外面：草花文	瀬戸系	19c
図版13-4-8	磁器	湯飲茶碗	4.8	(7.4)	2.8	外面・松竹梅文／6と類似、セット物か	瀬戸系	19c 中頃
図版13-4-9	磁器	湯飲茶碗	4.7	(8.2)	－	外面：松文／内面に見込みあり	瀬戸系	19c 中頃
図版13-4-10	磁器	湯飲茶碗	3.0	－	－	外面：草花文	瀬戸系	19c 中頃
図版13-4-11	磁器	湯飲茶碗	3.3	(7.4)	(3.0)	内外面：草花文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-12	磁器	湯飲茶碗	5.0	4.6	2.8	外面：草花文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-13	磁器	湯飲茶碗	4.7	(7.4)	3.2	外面：中華風人物文／印盤	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-14	磁器	湯飲茶碗	4.6	(6.6)	－	外面：草花文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-15	磁器	湯飲茶碗	4.3	(6.6)	－	外面：松文、鳥文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-16	磁器	湯飲茶碗	4.4	－	－	外面：文字文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-17	磁器	湯飲茶碗	4.4	－	－	外面：草花文／印判	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-18	磁器	湯飲茶碗	(3.3)	－	2.8	外面：文字文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-19	磁器	湯飲茶碗	4.3	－	－	外面：竹文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-20	磁器	湯飲茶碗	4.5	－	(3.4)	外面：草花文／赤絵付	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-21	磁器	湯飲茶碗	5.0	(6.6)	－	外面：風景文	肥前系	19c 中頃
図版13-4-22	磁器	湯飲茶碗	5.0	(6.8)	－	外面：草花文、寿文／酸化コバルト	肥前系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-23	磁器	湯飲茶碗	4.7	7.0	3.2	外面：一重圏線	肥前系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-24	磁器	湯飲茶碗	(3.5)	(6.4)	－	外面：蝶文	肥前系	19c 後半～20世紀前半
図版13-4-25	磁器	湯飲茶碗	(2.3)	－	(2.6)	内面：赤絵付か	肥前系	19c
図版14-26	磁器	小皿	1.9	(11.0)	－	内面：草花文、角福文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-27	磁器	小皿	2.1	(11.0)	－	内面：草花文、亀文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-28	磁器	輪花皿	(2.1)	－	－	内面：草花文／酸化コバルト	肥前系	19c 後半～20世紀前半
図版14-29	磁器	青磁小皿	2.1	－	(5.8)	内面：草花文	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-30	陶器	小皿	2.6	－	－	内面：植物文／外面：松葉文	肥前系	19c 前半
図版14-31	磁器	輪花大皿	(3.0)	－	－	内面：芙蓉手／32と同一個体	肥前系	19c 前半
図版14-32	磁器	輪花大皿	－	－	－	内面：芙蓉手／31と同一個体	肥前系	19c 前半
図版14-33	磁器	大皿	－	－	－	内面：植物文／色絵？／被熱	肥前系	19c
図版14-34	陶器	皿	－	－	－	内面：花文、洋風絵	瀬戸系？	？
図版14-35	磁器	皿	(1.7)	－	(8.0)	内面：花文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-36	磁器	皿	－	－	－	内面：松竹梅文／酸化コバルト／スタンプ	肥前系	？
図版14-37	陶器	鉢か皿	(2.3)	－	(6.8)	高台の高さ1.4cm	唐津系	？
図版14-38	陶器	馬目皿	－	－	－	鉄絵	瀬戸系	19c 前半
図版14-39	陶器	小皿	1.4	－	－	40・41に類似	？	19c 中頃
図版14-40	陶器	小皿	1.6	8.4	3.4	灯明具に使用／タール付着／ピン痕あり／灰釉	？	19c 中頃
図版14-41	陶器	小皿	1.6	(8.4)	3.0	39・40に類似	？	19c 中頃
図版14-42	磁器	飯茶碗	5.8	(11.5)	－	内面：口縁部文様／外面：草花文／上手	？	19c 後半～20世紀前半
図版14-43	磁器	飯茶碗	(4.7)	(11.5)	－	内面：口縁部文様／外面：植物文／印版	？	19c 後半～20世紀前半
図版14-44	磁器	飯茶碗	(4.5)	(11.5)	－	内面：口縁部文様／外面：巴文、丸に矢羽根／印版	？	19c 後半～20世紀前半

（単位：cm）

第16表　５号溝跡出土遺物一覧（１）

（　）は現存値及び推定値

挿図番号	種別	器　種	法　量			製作の特徴	産地推定	時期
			器高	口径	底径			
図版14-45	磁器	飯茶碗	(5.4)	－	4.6	外面：草花文／内面に寿文の見込みあり	？	19c 後半～20世紀前半
図版14-46	磁器	飯茶碗	(3.9)	(11.2)	－	内面：口縁部文様／外面：桜文／印版	？	19c 後半～20世紀前半
図版14-47	磁器	飯茶碗	(3.1)	－	－	外面：鮹唐草文／上手	肥前系	19c 前半
図版14-48	磁器	飯茶碗	(3.0)	－	－	内面：口縁部文様／外面：植物文	肥前系	19c 前半
図版14-49	磁器	茶碗	(4.5)	－	－	内面：口縁部文様／外面：菊花文／印版	？	19c 中頃
図版14-50	磁器	茶碗	(5.5)	－	－	外面：植物文／上手	？	19c 中頃
図版14-51	磁器	広東碗	(6.3)	－	(5.5)	外面：植物文／内面に寿文の見込みあり	肥前系	19c 中頃
図版14-52	磁器	鉢	4.5	－	－	内面：青海波文、家紋／外面：梅文／酸化コバルト	？	19c 後半～20世紀前半
図版14-53	磁器	角鉢	－	－	－	内面：竹文、格子目文／外面：松竹梅文	肥前系	19c 前半
図版14-54	磁器	角鉢	－	－	－	53・55と同一個体／被熱	肥前系	19c 前半
図版14-55	磁器	角鉢	－	－	－	53・54と同一個体	肥前系	19c 前半
図版14-56	磁器	くらわんか皿	4.9	－	－	内面：植物文／外面：唐草文	肥前系	19c 前半
図版14-57	磁器	蓋	(3.0)	－	－	外面：植物文	肥前系	19c 前半
図版14-58	磁器	酒徳利	(12.3)	－	－	外面：松竹梅文／酸化コバルト	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-59	磁器	酒徳利	－	－	－	お燗用／薄手	瀬戸系	19c 後半～20世紀前半
図版14-60	磁器	酒徳利	－	－	－	神酒徳利／外面：梅花文	肥前系	18c 後半
図版14-61	磁器	徳利	－	－	－	外面：鮹唐草文	肥前系	19c 前半
図版14-62	磁器	酒徳利	(3.6)	1.4	－	63・64と同一個体	肥前系	19c 前半
図版14-63	磁器	酒徳利	－	－	－	62・64と同一個体	肥前系	19c 前半
図版14-64	磁器	酒徳利	－	－	－	神酒徳利／外面：鮹唐草文／62・63と同一個体	瀬戸系	19c 前半
図版14-65	陶器	徳利	(3.0)	－	－	黄瀬戸	瀬戸	18c 後半
図版14-66	陶器	徳利	(5.6)	－	－	一部灰釉	瀬戸	？
図版14-67	陶器	徳利	－	－	－	一部灰釉	信楽系	？
図版14-68	磁器	徳利	(8.0)	－	－	角印銘あり		？
図版14-69	陶器	小瓶	8.2	－	4.8	鉄釉	瀬戸	19c 前半
図版14-70	陶器	大瓶	－	－	－	鉄釉	瀬戸	？
図版14-71	陶器	大瓶	－	－	－	鉄釉	瀬戸	？
図版14-72	磁器	壺・瓶？	－	－	－	酸化コバルト		？
図版15-73	陶器	土瓶	－	－	－	鉄釉	信楽系	19c
図版15-74	陶器	土瓶	－	－	－	75・76同一個体か	信楽系	？
図版15-75	陶器	土瓶	－	－	－	74・76同一個体か	信楽系	？
図版15-76	陶器	土瓶	2.3	－	(8.0)	74・75と同一個体か		？
図版15-77	陶器	土瓶	(2.9)	－	－	外面：文様	益子？	？
図版15-78	陶器	蓋	(2.7)	－	－	灰釉	信楽系	？
図版15-79	陶器	土鍋蓋	(1.3)	－	－	鉄釉	信楽系	？
図版15-80	陶器	笠原鉢	－	－	－	内外面灰釉	瀬戸	？
図版15-81	陶器	鉢	(5.2)	－	－	灰釉	瀬戸	？
図版15-82	陶器	鉢	－	－	－	灰釉	瀬戸	？
図版15-83	陶器	鉢	－	－	－	内外面灰釉	瀬戸	？
図版15-84	陶器	急須	－	－	－	外面：波文／朱泥？	常滑系？	？
図版15-85	磁器	急須	(5.0)	－	－	外面：草文、蛍、唐草文	？	？
図版15-86	磁器	急須	(5.0)	－	－	外面：文字	？	？
図版15-87	磁器	急須	(7.5)	－	－	把手／外面：文字	？	？
図版15-88	磁器	急須	－	－	－	注口／89と同一個体	？	？
図版15-89	磁器	急須	－	－	－	把手／桜の花弁の透かし彫りあり／88と同一個体	？	？
図版15-90	磁器	急須	(3.8)	1.8	－	把手／瑠璃釉	？	？
図版15-91	陶器	急須	－	－	－	注口／灰釉	？	？
図版15-92	陶器	油差し	(8.5)	－	－	灰釉	瀬戸系	？
図版15-93	陶器	おろし皿	－	－	－	鉄釉	？	？
図版15-94	磁器	レンゲ	(3.2)	－	－	内面文様	？	？
図版15-95	陶器	レンゲ	(3.7)	－	－	内面：草花文／洋風絵／34とセット物か	？	？
図版15-96	陶器	擂鉢	(7.4)	(32.8)	－	内面に11本単位のハケ目	？	？
図版15-97	陶器	擂鉢	－	－	－	口縁部／内面にハケ目	？	？
図版15-98	陶器	擂鉢	(3.5)	－	－	底部／内面にハケ目	？	？
図版15-99	陶器	擂鉢	－	－	－	底部／内面に櫛状にハケ目	？	16c か？
図版15-100	土器	瓦灯	(2.8)	(7.0)	－	土師質／透明釉	在地系	？
図版15-101	土器	？	－	－	－	外面に文様	在地系	？
図版15-102	土器	風炉	(5.0)	－	－	口縁部／黒色	在地系	？
図版15-103	土器	風炉	(4.5)	－	－	口縁部／黒色	在地系	？
図版15-104	土器	手焙り	(4.4)	－	(21.0)	脚台部／黒色	在地系	？
図版15-105	土器	手焙り	－	－	－	黒色／外面叩き目痕あり	在地系	？
図版15-106	土器	焜炉	(2.1)	－	－	下敷き／穿孔	？	？
図版15-107	ガラス製品	ランプ	－	－	－	頸部／透明	？	？
図版15-108	ガラス製品	ランプ	(0.9)	－	－	底部／透明	？	？
図版15-109	ガラス製品	不明	－	－	－	径1.4cmの円形に加工／厚さ0.2cm	？	？
図版15-110	ガラス製品	瓶	(3.7)	3.7	－	透明（薄い青緑色）	？	？
図版15-111	ガラス製品	小瓶	(3.4)	－	－	透明（薄い青緑色）	？	？
図版15-112	ガラス製品	小瓶	(5.3)	－	3.9	透明（緑色）	？	？

（単位：cm）

第16表　５号溝跡出土遺物一覧（２）

第４節　遺構外出土遺物

ここでは、表土や撹乱から出土した遺物、そして遺構内であるが、明らかに他時期の混入品である遺物を前節までの各時代の出土遺物と区別し、遺構外出土遺物として扱うことにする。

今回、遺構外出土遺物としては、縄文時代の石器・土器（早・前・中・後・晩期）、古墳時代前期の遺物（土器・ガラス小玉）に分類できる。

縄文時代の石器（第31図１～７、第17表）

１・２は剥片、３は両極剥片、４は磨製石斧、５は打製石斧、６・７は石皿の小片と思われる。石材は１がチャート、２・３が黒曜石、４が緑色岩、５がホルンフェルス、６・７が片岩である。

縄文時代の土器（第31・32図８～42、第18表）

縄文遺物包含層は、ごく緩い傾斜の下側にあたる調査区西側に僅かに残り、東側は削平されていた。そのため出土遺物も調査区西側から多く出土しているが、多くは後世の遺構からの出土であった。

８～11が早期末葉の条痕文系土器である。

12～23は前期の土器で、12は前葉の花積下層式土器、13・14は中葉の関山式土器、15～23は後葉の諸磯式土器である。

24～34は中期の土器で、27～29は前葉の五領ヶ台式土器、30は中葉の阿玉台式土器、31は後葉の曽利式土器、32～34は後葉の加曽利Ｅ式土器である。24～26は型式不明の土器である。

35～37は後期前葉の土器で、35・36は称名寺式土器、37は堀之内式土器である。

38～42は晩期後葉の安行３Ｃ式土器である。

古墳時代前期の遺物（第32図43～50）

43～49は土器で、43は壺形土器、44は坩形土器、45～49は甕形土器である。

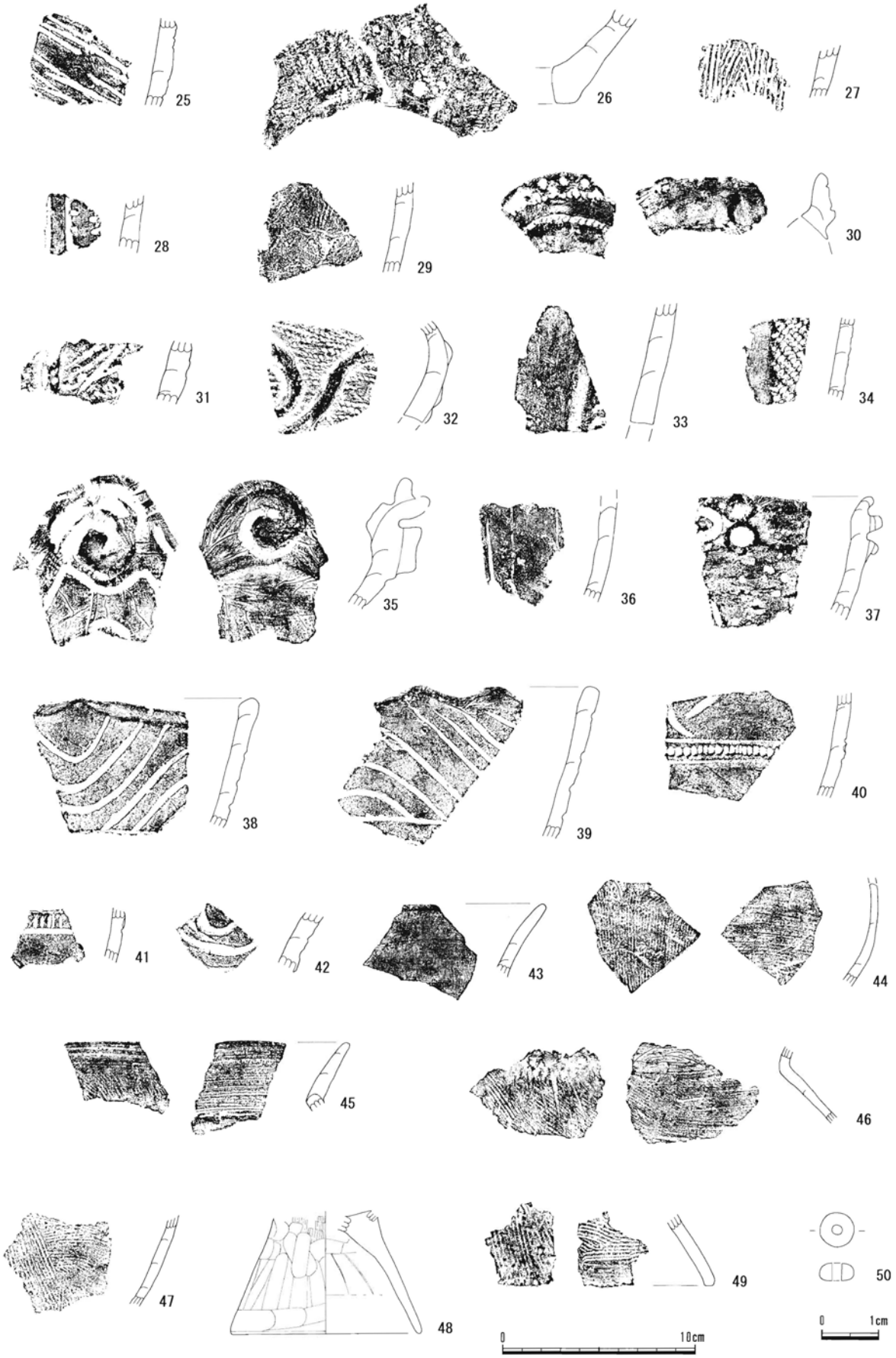
43は口縁部破片で、不鮮明であるが内面には赤彩が施されている。胎土の色調は暗黄褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒・小石を僅かに含む。内面はハケ目調整ヘラ磨き調整、外面はハケ目調整後横ナデが施される。

44は胴部破片で、内外面赤彩が施される。色調は全体に赤褐色を呈し、胎土には砂粒を僅かに含む。内外面ハケ目調整が施される。

45は「く」の字口縁を呈する口縁部破片で、色調は黒褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・砂粒を僅かに含む。内外面はハケ目調整が施されるが、口縁部はその後横ナデが施される。46は頸部から胴部上半にかけての破片で、色調は暗茶褐色を呈し、胎土には黄褐色粒子・橙色粒子を含む。内外面ハケ目調整が施される。47は胴部破片で、色調は黒褐色を基調とし、胎土には砂粒を僅かに含む。内面ヘラ磨き調整、外面はハケ目調整後粗いヘラ磨き調整が施される。48・49は台付甕の脚台部で、48は現器高6.5㎝・底径9.9㎝。色調は淡茶褐色を呈し、胎土には砂粒・小石（最大６㎜）を僅かに含む。内面はハケナデ、外面は細かいヘラ磨き調整後ナデが施される。49は小破片で、色調は黒褐色を基調とし、胎土には砂粒・小石を多く含む。内外面ハケ目調整が施される。

50はガラス小玉である。径0.6㎝・高さ0.4㎝・穿孔径0.2㎝・重さ0.2ｇ。色調はアクワ・ブルー（淡青色）を呈する。

第31図　遺構外出土遺物１（2／3・1／3）



第32図　遺構外出土遺物２（1／3・1／1）

挿図番号	器種	石材	遺存状態	長さ	幅	厚さ	重量	出土位置
第31図 1	剥片	チャート	打面部分欠	2.3	1.8	0.5	1.2	5M
第31図 2	剥片	黒曜石	上端欠	2.2	2.1	1.1	3.3	2H
第31図 3	両極剥片	黒曜石	下端欠	2.1	1.3	0.6	1.0	2H
第31図 4	磨製石斧	緑色岩	刃部欠	7.5	4.1	2.8	101.5	(A－2)グリッド
第31図 5	打製石斧	ホルンフェルス	完形	5.7	4.7	1.7	57.5	6M
第31図 6	石皿	片岩	小片	6.3	2.2	1.9	15.4	5M
第31図 7	石皿	片岩	小片、凹あり	9.1	4.2	1.3	64.5	6H

（単位：cm・g）

第17表　遺構外出土の石器一覧

挿図番号	部位	文様・特徴など	色調	時期・型式	胎土混入物					出土位置	備　考
					繊	角	礫	砂	他		
第31図8	頸	隆帯	褐色	条痕文系	○	○			白	1方	
第31図9	胴	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○	○		○	白	(C－2)グリッド	
第31図10	胴	貝殻条痕文	赤褐色	条痕文系	○		○	○	白	9H	
第31図11	胴	貝殻条痕文	暗褐色	条痕文系	○	○		○	白	2H	
第31図12	胴	貝殻背圧痕	褐色	花積下層	○		○			9H	
第31図13	胴	異条斜縄文	褐色	関山	○			○		2H	R直前段合撚
第31図14	胴	横位ＬＲ縄文	褐色	関山	○			○		(B－3)グリッド	
第31図15	胴	半裁竹管による肋骨文／円形刺突文	明褐色	諸磯ａ				○		2H	
第31図16	口縁	横位ＲＬ縄文地文に、半裁竹管による横位2条の結節沈線文	灰褐色	諸磯ｂ		○		○		8H	
第31図17	胴	ＲＬ縄文地文に沈線文	明褐色	諸磯ｂ		○		○		8H	
第31図18	胴	ＲＬ縄文地文に浮線文／浮線文上にはＲＬ縄文	褐色	諸磯ｂ			○	○		1方	
第31図19	胴	半裁竹管による沈線文	褐色	諸磯ｂ			○	○		6H	
第31図20	胴	ＬＲ縄文地文に半裁竹管による横位2条の平行沈線文	褐色	諸磯ｂ			○	○		7H	細礫の混入が顕著
第31図21	胴	ＲＬ縄文地文に浮線文／浮線文上に刻み	明赤褐色	諸磯ｂ				○		8H	
第31図22	胴	半裁竹管による沈線文・弧線文	灰褐色	諸磯ｂ				○		7H・(B－3)グリッド	
第31図23	胴	ＬＲ縄文	褐色	諸磯か？				○	ガ	(A－2)グリッド	
第31図24	口縁	沈線	明赤褐色	中期前半			○	○		2H	
第32図25	胴	半裁竹管による沈線文	褐色	中期？		○		○		2H	
第32図26	底	ＲＬ縄文	赤褐色	中期前半				○		2H	
第32図27	胴	集合沈線	褐色	五領ヶ台			○	○		2H	細礫の混入が顕著
第32図28	胴	沈線、刺突文	褐色	五領ヶ台			○	○	白	2H	
第32図29	胴	Ｌ縄文地に横位結節文	褐色	五領ヶ台				○		(B－2)グリッド	
第32図30	口縁	扇形把手縁辺に棒状工具で押捺／押引文	褐色	阿玉台				○	金	8H	
第32図31	胴	隆帯による懸垂文／沈線文	褐色	曽利		○		○		2H	
第32図32	口縁	Ｌ撚糸／隆帯による曲線文	赤褐色	加曽利ＥⅠ～Ⅱ				○		試掘トレンチ(TR－3)	
第32図33	胴	磨消懸垂文／ＲＬ縄文	明褐色	加曽利ＥⅡ～Ⅲ			○	○		表土	
第32図34	胴	微隆起／ＬＲ縄文	明褐色	加曽利ＥⅢ～Ⅳ				○		2H	
第32図35	口縁	渦状把手／ＬＲ縄文／沈線	赤褐色	称名寺				○		(B－2)グリッド	
第32図36	胴	縦位の沈線文	褐色	称名寺か				○		(A－2)グリッド	
第32図37	口縁	沈線／刺突による「8」字状文	褐色	堀之内				○		(B－3)グリッド	
第32図38	口縁	沈線による曲線文／口縁部のＢ字形突起	黒褐色	安行３Ｃ		○		○		2H	
第32図39	口縁	沈線による曲線文／口縁部のＡ字形小突起	黒褐色	安行３Ｃ		○		○		2H	
第32図40	胴	横位の平行沈線の間に押引文／弧線文	黒褐色	安行３Ｃ		○		○		6H	
第32図41	胴	横位の平行沈線の間に連続刺突文	暗褐色	安行３Ｃ				○	ガ	6H	
第32図42	胴	沈線による曲線文（入組文か）	褐色	安行３Ｃ				○		8H	

※繊：繊維　角：角閃石　金：金雲母　礫：細礫　砂：砂粒　白：白色粒子　ガ：ガラス状粒子

第18表　遺構外出土の縄文土器一覧

第４章　調査のまとめ

本書は、平成15年度に発掘調査を実施した新邸遺跡第８地点の発掘調査報告書である。市内における遺跡別に見た調査件数では、西原大塚遺跡が140地点を越える中、新邸遺跡は現在においても第９地点であることは、開発状況としてもかなり少ないと言える。発掘調査としては、昭和63（1988）年の第３地点以来の実施となった。

ここでは、今回の発掘調査で得られた貴重な資料について、調査のまとめを行うことにする。

第１節　古墳時代前期の遺構・遺物について

（１）遺構について

１．住居構造の特徴（第19表）

今回の調査では、古墳時代前期の住居跡が８軒（２～８・10H）検出されている。ここでは、住居跡の基本構造について考えてみることにする。そこで第19表を参照し、当市の一般的な弥生時代後期の住居跡とその構造を比較することにしたい。

まず、**平面形**については、２Ｈが隅丸方形で円形に近いプランをもつが、その他はかなり直線的な方形プランである。規模については、８Ｈが今回の中で最大住居で５ｍ台、３Ｈが４ｍ台、４・６Ｈが３ｍ台、５・７Ｈは２ｍ台の最小住居であった。

壁溝は、４Ｈのみで確認できたが、全周せずに南コーナーは途切れている状況であった。

炉跡をもつ住居跡としては、粘土板炉が２Ｈの１軒、地床炉が４～６・８Ｈの４軒で、３・10Ｈは調査区外にある可能性もあるが、７Ｈについては確認できなかった。粘土板炉については、当市では弥生時代で最古段階に位置付けられる田子山遺跡第31地点21号住居跡（尾形　1998）が粘土板炉であることから、現時点では古い様相の特徴と考えたい。また、炉跡の位置であるが、当市では２Ｈのように住居

遺構名	平面形	規模（m）	壁溝	炉跡		祭壇状遺構	貯蔵穴			入口梯子穴		主柱穴	備考
				形態	位置		有無	凸堤	位置	有無	位置		
2H	隅丸方形	5.40×5.16	無	粘土板炉	長軸上中央やや北東寄り	－	?	有	入口右	有	長軸上	無	粘土板炉前に地床炉として使用されていた可能性あり
3H	方形?	不明×4.94	無	－	－	－	－	－	－	－	－	無	南側は調査区外
4H	方形	3.28×3.20	有	地床炉	北コーナー	無	有	無	西コーナー	無	－	無	
5H	方形	不明	無	地床炉	北東コーナー	無	無	－	－	不明	－	無	床硬化面のみの検出であるため、規模は不明としたが、検出規模は2.90×2.80m
6H	方形	3.94×3.48	無	地床炉	短軸上北東壁寄り	無	有	無	東コーナー	不明	－	無	
7H	方形	2.70×2.52	無	無	－	無	無	－	－	無	－	無	8H を切る／竪穴の掘り込みのみで付設施設は確認できなかった
8H	方形	5.14×4.80	無	地床炉	南東壁寄り	無	有	無	A-南西コーナー B-北東コーナー	無	－	無	7H に切られる／今回の調査で最大規模
10H	－	－	無	－	－	－	－	－	－	－	－	－	大部分が調査区外で詳細不明

第19表　古墳時代前期の住居跡の特徴

長軸上やや中央から北側に寄って位置するのが一般的なため、北コーナーや北東コーナーに位置する今回の炉跡は特異なものと言える。

祭壇状遺構と考えられている赤色砂利層の範囲については、通常では入口梯子穴のすぐ右側で検出されるが、今回はすべての住居跡で確認できなかったことは特筆すべきであろう。

貯蔵穴は４・６・８Ｈで存在するが、５・７Ｈでは確実に存在しなかった。また存在するものでも通常は入口梯子穴のすぐ右側に位置し、その周囲に凸堤がまわるものであるが、４Ｈが西コーナー、６Ｈは東コーナー、８Ｈは２つ存在し、Ａが南西コーナー、Ｂが北東コーナーというように安定していないと言える。２Ｈについては貯蔵穴が未確認であるが、北側で凸堤が確認できることから、その内側に貯蔵穴が存在するものと考えられる。

入口梯子穴についても長軸上の北壁近くの存在するのが通常であるが、２Ｈで確認できるのみであり、主柱穴についてもすべての住居跡で確認できなかった。

以上のように、今回検出された古墳時代前期の住居跡は、２Ｈを除き、当市の弥生時代後期の住居跡に通常備わっているはずの付随施設の多くが欠落している状況であった。こうした状況については、以前、西原大塚遺跡第65地点（尾形・深井・青木　2004）の報告中、372Ｙと373Ｙの比較で触れたことがあるが、弥生時代後期からの伝統的な住居構造の解体が窺え、特に祭壇状遺構の欠落は祭祀儀礼にも重大な変化があったことが指摘できよう。

２．１号方形周溝墓について

今回検出された１号方形周溝墓は、本文中でも説明したが、方台部から検出された柱穴を本遺構に伴うものと判断した。そこで、本例が通常の方形周溝墓と違った機能を持つ遺構であるとしたら、どういう遺構の可能性があるか簡単に触れることにする。

①周溝を有する建物跡（及川　1998、飯島　1998、福田　1999）

これは、従来から「墓」と考えられてきた遺構が、大部分は住居跡であるという、方形周溝墓の機能そのものを根本的に覆すものとなった。中でも、福田　聖氏は、埼玉県内の低地の周溝遺構について、「墓」であるのか「建物」であるのか両者を見分けるための検証を継続的に実施している。この見分けは、地道な作業であるが、遺跡の性格まで変えてしまうという重要な検証であるため、今後の研究に大いに役立つものであろう。

②古代神社遺構（井上　2000・2001）

井上尚明氏の研究による「小型の区画施設によって囲繞された、単数あるいは少数の掘立柱建物は、実用的な生活空間から分離された祭祀に関わる空間」とした「古代神社遺構」である。

この神社遺構については類例化されているので、簡単に説明することにする。

タイプ１　○建物の周囲に柱穴列が巡り、その外側に２重を基本とした区画施設が囲繞する。
　　○区画施設の規模は、鳥羽遺跡では50ｍ、武蔵国府関連遺跡では約30ｍであるが、内側の区画に注目すると、12ｍ・15ｍと大きな差はないという。

タイプ２　○１×１間の建物の周囲に柱穴列が巡り、その外側に区画施設が囲繞する。
　　○タイプ１と共に建物の周囲の柱穴列は建物の一部ではなく、柵列の可能性が高い。

以上、①の「周溝を有する建物跡」の事例では、低地での検出を前提としているため、台地上で検出

された１号方形周溝墓とは、立地条件に決定的な違いがあると言える（註１）。これについては、現時点では遺構プランだけで判断するのは非常に難しく、さらに柱穴が伴うという判断においても方形周溝墓と若干時期の異なる掘立柱建築遺構が、同じ位置に存在していた可能性もあることから、今後の検出例の増加を待って検討する必要があるであろう。

そして、②の井上氏による「古代神社遺構」の類型化した分類では、１号方形周溝墓は、遺構プランだけで判断した場合、タイプ２に帰属することも可能であると言うことである。

いずれにせよ、今回検出された１号方形周溝墓の性格について、ここで判断するのは難しく、さらに現時点で判断することは避けるべきであると考えられるため、今後の課題とすることにしたい。

最後に、１号方形周溝墓を調査した所見として、以下の点で通常の方形周溝墓とは違和感があった遺構であるという印象を付け加えてまとめとしたい。

①通常の方形周溝墓の周溝は、多少なり下幅は上幅より狭くなり、「Ｖ」字に近い断面形を呈しているというイメージであるが、１号方形周溝墓の周溝の壁はほぼ垂直に立ち上がっている。

②周溝の覆土全体にローム粒子・ローム小ブロックを多く含んでいるが、セクションＢ－Ｂ′及びＤ－Ｄ′付近の上層のローム小ブロック・ブロックは、カリカリ感があり、被熱ロームであると思われた。

③方台部からは６本ほどの柱穴が配置良く検出された。これらの柱穴のうち、Ｐ１～５は２本の重複形態をもち、住居跡あるいは掘立柱建築遺構であるならば、建替えが行われた可能性があったと判断できる資料である。これらの柱穴の覆土は図示できなかったが、確実に中・近世以降の覆土とは異なり、さらに縄文時代の暗茶褐色土の覆土とは違い、今回検出された古墳時代前期の住居跡及び１号方形周溝墓の覆土に類似するのものであった。

（２）遺物について

今回の調査で出土した古墳時代前期の土器については、決して絶対量としては多くはなかったが、全体の器種構成としては、坩・器台・高坏・壺・甕形土器（以下、「形土器」を省略）に分類できる。

以下、廻間編年（大塚　1990・1994）を参考に住居跡と方形周溝墓から出土した土器を見てみることにする。なお、５Ｈについては遺物が少ないため省略する。

１．住居跡出土土器

２Ｈ出土土器（第10図）

器台あるいは高坏（１）・壺（２～６）・甕（７～10）で構成される。１は脚台部でやや不鮮明であるが外面は赤彩されている。「ハ」字状を呈し、裾部が大きく広がる器形は高坏に多く、廻間編年の高坏Ｃ類の７期（Ⅲ式期２段階）以降の特徴である。壺は２が幅の狭い複合口縁を呈し、４は口縁部内面に文様が施文される。５は外面に赤彩が施される広口壺であろうか。甕は７が「く」字状口縁を呈し、口唇部に刻みをもっていない。

３Ｈ出土土器（第11図）

坩（１）・壺（２）・甕（３～６）で構成される。１の坩は小型坩で、全面赤彩され、ヘラ磨き調整が施されるが、全体に粗い作りである。甕は２・３共に「く」字状口縁を呈し、口唇部に刻みをもたないタイプである。特に３は口縁部はハケ目調整ではなく、横ナデであることに注目される。６はＳ字甕の脚台部である。

４Ｈ出土土器（第13図）

坩（１～３）・甕（４～12）で構成される。坩はすべて小型精製土器で、１は小型丸底土器である。小型丸底土器の出現は、廻間編年ではⅢ式期３段階以降である。甕はすべて「く」字状口縁を呈し、口唇部に刻みをもたないタイプである。５はハケ目調整が細かく、外面口縁部には横方向に施されている。

６Ｈ出土土器（第15図）

坩（１・２）・壺（３）・甕（４・５）で構成される。坩は小型坩で、１は厚手でやや粗雑な作りである。５の甕はＳ字甕であるが、全体に厚手で、肩部には縦方向のハケ目調整が施されており、横ハケは施されていない。

７Ｈ出土土器（第16図）

壺（１～４）・甕（５～８）で構成される。壺は２が複合口縁を呈し、３は肩部に断面三角形の凸帯まわる。甕は５が「く」字状口縁を呈し、口唇部の刻みをもたないタイプである。

８Ｈ出土土器（第18図）

器台（１）・高坏（２・７）・坩（３）・壺（５・６）・甕（４・８）で構成される。１の器台は脚台部が基部が柱状ではなく、全体に「ハ」字状を呈する。この器形は、高坏の脚台部も同様に廻間Ⅱ式期３段階から出現し、Ⅲ式期２段階以降には主体となっている。２は有段高坏で、坏部が浅身タイプもやはりⅢ式期２段階以降に顕著になる特徴と言える。３の口頸部が短く大きく開くタイプの大型坩は、Ⅲ式期４段階の標識遺跡となる名古屋市若葉通遺跡SB02出土の壺Ｄの中型壺に器形が類似している。４の土器は、全面赤彩が施されているが、器形と調整技法から甕として考えた。

２．１号方形周溝墓出土土器（第23図）

器台（１）・壺（２）・坩（３）・甕（４～９）で構成される。ほとんどが小破片であるが、１の器台の脚台部は８Ｈの器台同様に廻間Ⅱ式期３段階から出現し、Ⅲ式期２段階以降には主体となる土器である。２の壺は全面ハケ目調整が施される複合口縁を呈し、甕は口唇部に刻みをもつもの（５）と刻みをもたないもの（４・６）が存在する。

以上、今回検出された住居跡と方形周溝墓からは、坩・器台等の小型製品が出土しており、小型精製土器についても４Ｈと１号方形周溝墓では確実に共伴している。さらに４Ｈでは小型丸底土器、８Ｈでは坏部の浅身の有段高坏や口頸部が短く大きく開くタイプの大型坩は、Ⅲ式期３・４段階以降の特徴とする土器として把握できる。さらに、甕に見られる口唇部の刻みの有無や口縁部の横ナデあるいは粗いハケ目調整の出現といった細かい特徴などからも細分は可能であると言えるが、ここでは、すべての住居跡出土の甕が「く」字状口縁を基本形とすることから、時期としては、大まかに古墳時代前期の範疇の中で捉えることは可能と考えられる。

赤塚次郎氏による廻間編年は、「欠山式土器古相以外をもって廻間式土器様式を設定し東海地域最古の土師器」（大塚　1990）としていることからも、廻間編年Ⅲ式期３・４段階を主体とする特徴をもつ今回の資料は、前期でも中葉以降に位置づけられる可能性がある。

第２節　古墳時代後期の９号住居跡について

（１）住居跡の基本構造

今回の調査では、古墳時代後期の住居跡が１軒（９Ｈ）検出されている。ここでは、住居跡の基本構造についてを考えてみることにする。

まず、**平面形**は、およそ東西に長軸方向をもつ長方形を呈する。**規模**については、3.38×2.94ｍであることから、古墳時代中・後期では市内最小住居となった。これまでの市内の小型住居は、城山遺跡第１地点（佐々木・尾形　1988）の48Ｈ（3.28×3.22ｍ）、58Ｈ（3.76×3.42ｍ）、21Ｈ（4.02×3.38ｍ）がその部類に属するが、今回の９Ｈはこれらの規模を下回る結果となった。このことから、現時点における３ｍ台の小型住居については、古墳時代中・後期全体で見た中では、７世紀中～後葉の時期に限定できるものと考えられる。

主柱穴については、住居中央の深さ55㎝の１本が伴うものと判断した。１本柱の住居跡の類例として、市内でもその例は浮かばなかったが、城山遺跡第１地点を改めて見てみると、21・58Ｈの住居中央に後世のピットとされる１本のピットが存在している。これについては、今後の良好な資料の増加を待って検討してみたいが、小型住居に関しては、無柱穴住居のものが多く存在することでもあり、１本柱の住居跡が存在する可能性があるであろう。

カマドについては、南西壁の中央よりやや南に位置している。上層部がやや撹乱により破壊されているが、比較的に遺存状態は良好と言える。袖部はロームを馬蹄形状に掘り残すタイプで、これは６世紀以降、市内では一般的な構造のものである。粘土はローム両袖部上から天井部にも被覆させていることが確認でき、「煙道付きへっつい型竈」（田中　1993）ではないことが判断できた。燃焼部の位置は、壁から燃焼部の中心までの距離が約45㎝であり、これは中野遺跡第25地点（尾形・深井　2001）の調査で、６世紀前葉の18号住居跡が約80㎝であるので、かなり外側に移行している傾向にある。煙道部に相当する壁への掘り込みは30㎝であるが、市内では、壁への掘り込みが20㎝未満の未発達なものが一般的なことから、やや掘り込みが深いと言えるかもしれない。

貯蔵穴については、南コーナーに位置し、70×50㎝の隅丸長方形のものである。位置はカマドの左横に存在し、長軸の向きはカマドを主軸方位とした場合、主軸方位に併行している。この状況は、市内の中野・中道・城山遺跡の一般的な住居跡では、貯蔵穴はカマドの右横に位置し、長軸方位がカマドに向かって直交するため、やや様相が異なると言える。おそらく、小型住居でカマド左横のコーナースペースが狭いため、機能的にある程度の大きさの貯蔵穴を必要し、さらにスペースを広くしたい場合は、必然的に縦長にすることで対処したのであろう。

以上、９Ｈは市内では最小住居であり、住居内に付随する施設にやや特異な様相が見られた。これについては、本住居跡が７世紀中葉という古墳時代から律令時代の過渡期という時期に相当することを考えると、どうやら古墳時代的な様相を示す集落の解体が根底にあったのではないかと想像される。

（２）出土土器の様相について

出土土器については、すべて土師器で、器種としては、坏・甕に分類される（第21図１～９）。全体

の土器のイメージとしては、作りが粗雑のもので、口縁部は真円にはならない歪んだ器形を呈するものである。

まず、坏は３点（１～３）出土している。いずれも作りは粗雑で、器面全体が煤けていることから黒色土器の可能性がある。１～３は口径13cm前後をもち、小型化の傾向は顕著ではない。そのため、７世紀後葉までは下らないものと理解できる。

甕は台付甕１点（４）と長甕５点（５～９）の６点出土している。特にこの時期での台付甕は珍しいであろう。長甕では最大径の位置に注目すると、５は口縁部と胴部中位のほぼ同位置に、６は口縁部と胴部上半のほぼ同位置にそれぞれ最大径をもっている。基本的には６のタイプの方が僅かに新しい様相と考えられる。やはり、口縁部に最大径をもつタイプが顕著ではないため、７世紀後葉までは下らないものと理解できる。

以上、９Ｈ出土土器については、すべて在地系土師器（尾形　2005・尾形　2006）の土器で構成され、坏・甕の特徴は、７世紀中葉に比定できるであろう。

（３）ベンガラについて

９Ｈから検出した赤色塊は、付編での分析でも掲載しているが、ベンガラであることが判明した。出土状態は、東コーナー付近南東壁際の白色粘土が検出された西側の床面上からで、直径14cm程の範囲に広がっていた。推測にすぎないが、何かの容器、例えば木製の椀に入ってたものが容器だけが腐ってベンガラのみの検出になったものと思われる。

志木市におけるベンガラの出土例としては、城山遺跡第１地点（佐々木・尾形　1988）の古墳時代後期（６世紀中葉）の22Ｈ－３の土器内に見られた赤色塊があげられる。報告書中では、特に触れられていなかったが、内面が真っ赤に染まっていることから、この土器は単なる塗彩ではなく、赤色塗料の容器ではないかと考えられる。

埼玉県桶川市西Ｉ遺跡（今井　1990）の古墳時代前期の２号住居跡からは、床面に２基の小ピットを掘り、その中にはいずれも台付甕の脚台部を逆さにした中にベンガラを入れ、その後壺の胴部破片を蓋にした貯蔵容器が検出されている。

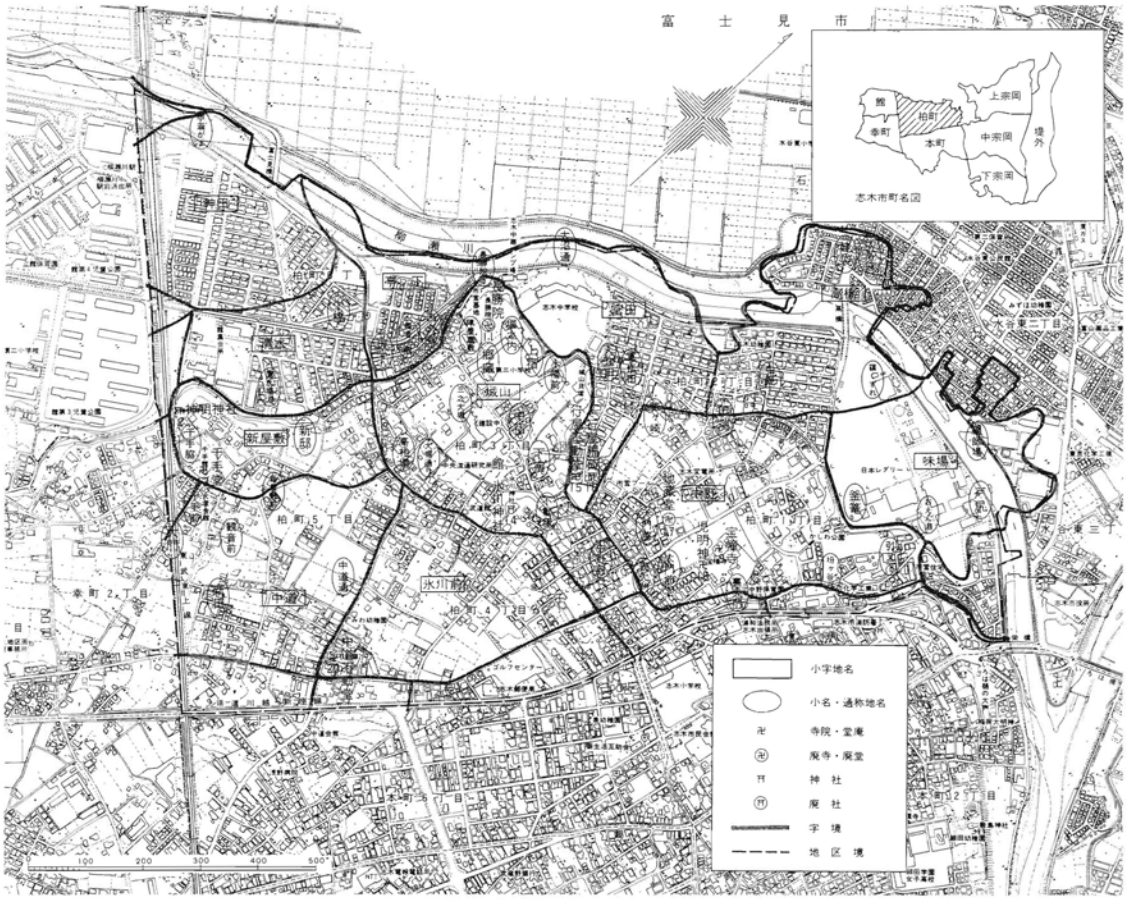
こうした赤色塗料は、当地域では直接的な土器作りのための使用とは考えられないため、今後は何に使用したものか用途の追究が要求されよう。

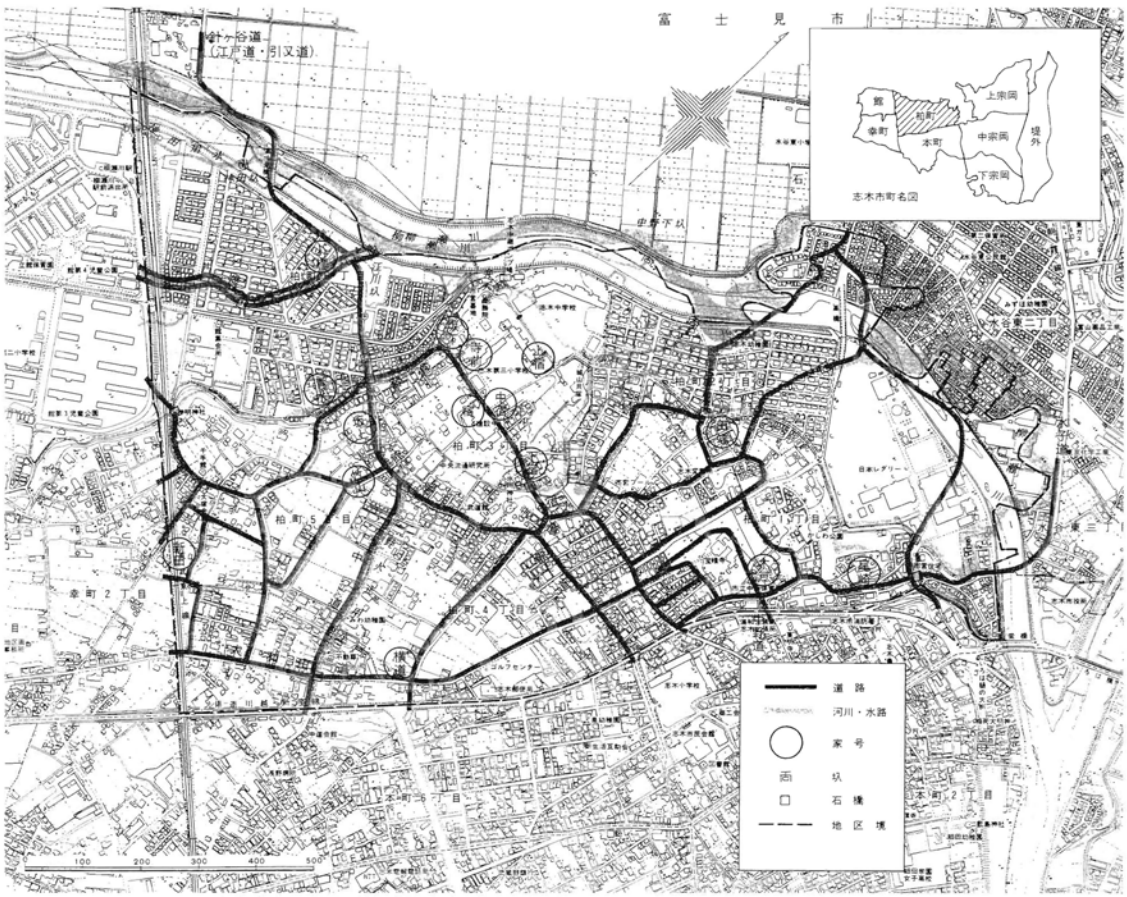
第３節　野火止用水跡について

（１）野火止用水の流路について

今回検出された５・６Ｍについては、報告中では溝跡として取り扱ったが、以下の内容から野火止用水跡と考えられる。

第33図は『郷土の地名』（志木市　1988）から一部抜粋した柏町地区の概要図である。これによると、本地点の東側に隣接する道路は南方向へ直線的に延びる道に相当し、この道は「稲荷道」と呼ばれている。そのルートは、大塚千手堂から小名「大門」を通り、そこで今は東武東上線に寸断されているが、元々はそのまま南西方向に延び、300m程（資料１では３町）で現在の幸町４丁目の小字「稲荷山」付





第33図　志木市柏町地区の概要図

近の県道川越・新座線（通称「防衛道路」）へと通じ、その後新座市北野付近へ延びている（註２）。

野火止用水は、幸町４丁目以北では、ちょうどこの「稲荷道」と同じ流路をもっていることから、本調査区の東側に隣接する道路が「稲荷道」に相当することで、５Ｍが野火止用水に相当することが自然に理解できるであろう。さらに６Ｍについても小名「千手前」から左折し、小名「千手脇」へ流れる野火止用水として一連の遺構として把握される。

しかし、ここで疑問であるが、調査区北東隅を見ると、５Ｍは６Ｍへ屈曲するのではなく、さらに北方向に走行していることである。これは、前述した小名「千手前」から左折し、小名「千手脇」へ流れる野火止用水は、さらに５Ｍの延長部の北側に存在し、今回の６Ｍは『郷土の地名』には掲載されていない別の遺構であると判断するしかない。その場合、調査区西側が東側より標高が低くなるため、６Ｍから５Ｍへ流れ込むことは考えられないので、排水目的の施設ではないと言える。

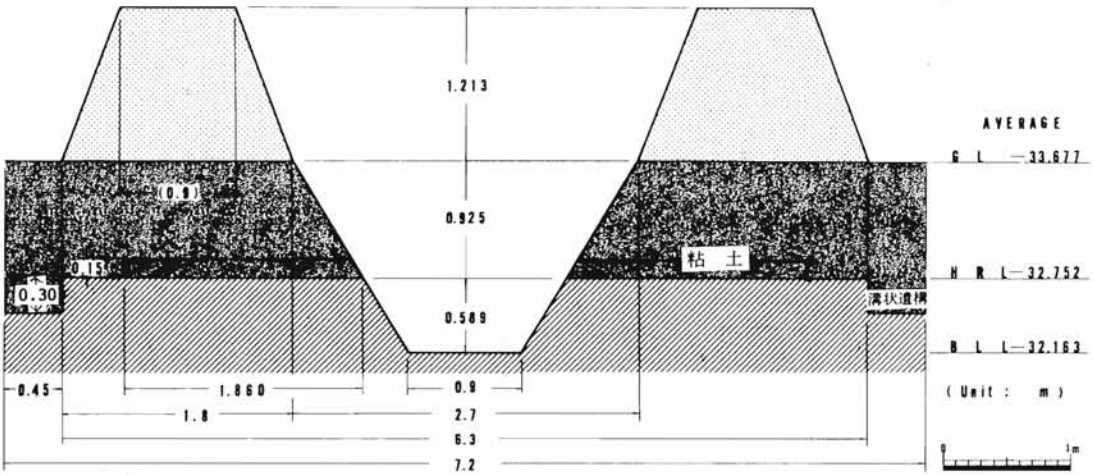
現時点では、５Ｍよりも幅員の小さい６Ｍは野火止用水として、『郷土の地名』等の記録にも残らないほどの小規模な支流跡として理解できるものである。

（２）５・６Ｍの構造上の特徴について

５Ｍについては、溝底近くから砂礫層が検出され、溝底面からはいわゆる“水付き”と呼ばれる赤く酸化した面（銹着面）が広く観察できたことに注目される。さらに、セクションＤ－Ｄ′の断面形が箱薬研形に削られていることから、この遺構は人為的に構築された水路跡と考えられる。

６Ｍについては、５Ｍのように砂利層などの覆土は観察できなかったが、南上端に沿って幅20cm程の灰白色粘土層が堆積していることが確認できた。この粘土層についてどう考えるかであるが、これについては、野火止用水の整備事業の一貫で実施された新座市の野火止用水本流の発掘調査（斯波　1989）の事例を参照することにする。第34図はその報告中に提示された「野火止用水断面復元模式図」であるが、これによると、断面の両上端には堤防の一部として「粘土」が使用されていることがわかる。

つまり、６Ｍで検出された粘土層についてもこの堤防の一部として使用されたものと考えることができるであろう。しかし、６Ｍで両上端での粘土の使用が観察できなかった理由としては、本流から離れた小規模な末流であるため、同一構造にならなかったのではないとかと思われるが、水害防止のために堤防の斜面に施された腹付（はらづけ）程度のものであった可能性がある。５Ｍの南端で確認できる粘土層及び23層のように土混じりの粘土層についても同様なことが言えるのではないだろうか。



第34図　野火止用水断面復元模式図（1／60）

第４節　周辺の歴史環境と野火止用水の終焉について

（１）大塚千手堂について

ここでは、５・６Ｍを野火止用水跡と判断して、第33図と第１・２図を参照し、周辺の状況を見てみることにする。そうすると、本地点はその北側に隣接する「大塚千手堂」（註３）の参道の西側に位置していることがわかる。そのため、今回検出された２基の火葬墓（21・22Ｄ）、そして５Ｍから出土した図版15－99の擂鉢の破片が16世紀代の時期であることから、大塚千手堂関連の遺構・遺物として把握できる可能性がある。

大塚千手堂に関連する遺構については、第１地点から検出されている（佐々木・尾形　1986）。この調査では、段切状遺構の基礎面から多くの土坑・溝跡・ピット群が検出され、４号土坑からの六文銭の出土や地下式壙の形態をもつ６号土坑が検出されるなど、墓域的な様相を示すものであった。

その他、平成12年度の中道遺跡第53地点から確認された段切状遺構と思われる遺構、平成16年度の中道遺跡第61・62地点から確認された地表下90㎝程という深い位置からの広い範囲での硬化面についても実際に大塚千手堂関連の遺構の可能性があるとして文化庁に報告し、盛土保存が適用されている。

それでは大塚千手堂関連の広がりを把握するために、その関連遺構の分布状況を見てみると、東西方向では第１地点のＡ～Ｇグリッドの西側から中道遺跡第53・61・62地点までの約100ｍが範疇として捉えられる。南北方向では北側がやや不明であるが、仮に南北方向も東西方向と同値とした場合、10,000㎡（１ha）もの広大な敷地をもつ寺院であることが理解できる。

これについては、資料１を参照してもらいたい。この資料は、『舘村旧記』（註４）から抜粋した「大

大塚千手堂之事

（中略）抑此千手堂は昔は松林山観音寺大受院とて天台宗にして古は七堂大伽藍なりといへり。寺中に宿坊弐ヶ寺杉本坊・松本坊といへり。又宮戸境の谷通りに寺家五ヶ寺あり、故に其所の字を尓レ今呼で寺家谷と云也。千手堂の大門は稲荷山迄三※町程也。昔此堂の造作は宮殿楼閣・金銀の鋲を以て耀し、観音の尊像は光明赫奕として錦襴の戸帳を掛錦の絣を引せ仏具・花皿・花鬘・瓔珞・幡・天蓋を掛ならべ、或は客殿・庫裏・鐘楼其外門の冠木は竜虎梅竹を瑪瑙・珊瑚等の珠玉を以て鏤たれば妝も極楽浄土かと疑ふ、斯尊霊場なりしども、※元弘・建武の比（後太平記の時分也）天下兵乱の時分焼失して退転せりとなり。

又其後日蓮宗より寺に取立大乗院と号ス。抑此法花宗は天台宗より日蓮上人出て一宗をひろむる也。

（中略）然ルに此寺※永禄四年当初柏之城没落の刻焼払われて以来堂ハ雖レ無レ之昔の旧跡を呼て尓レ今千手堂とハ云也。

『舘村旧記』より

※一町は六十間、約一〇九㍍なので、三町は約三二七㍍。
※元弘は一三三一～一三三三年、建武は一三三四～一三三六年。
※永禄四年は一五六一年。

資料１　『舘村旧記』の抜粋資料

塚千手堂之事」の記事の一文がある。これによると、大塚千手堂は、「松林山観音寺大受院」と称し、「天台宗」に属し、「七堂大伽藍」をもち、「極楽浄土かと疑ふ、斯尊霊場」であることが記述されている。つまり当時は、七堂大伽藍をもつ程の敷地の広大さ、そして視覚的にも金銀や錦、瑪瑙・珊瑚等の珠玉などが目に留まるような絢爛さ、さらに最高の賞賛とも言える「極楽浄土」かと疑うほどの尊厳のある霊場であったというのである。

このことから、前述したように新邸遺跡や隣接する中道遺跡での過去の調査内容を照合すると、どうやら『舘村旧記』にある大塚千手堂の記事については、信憑性があるものと評価できる段階に来ているのではないかと考えたい。第33図をもう一度見てみると、この大塚千手堂の東に「観音前」という小名が残っているが、この地区はおそらく「松林山観音寺大受院」の手前を意味するものであろうことから、やはり広大な敷地をもつ寺院があった可能性は十分考えられる。

この「松林山観音寺大受院」は、二度の火災に遭遇しており、一度目は元弘・建武の頃（1331～1336年）に焼失し、その後日蓮宗に取り立てられ大乗院と称す日蓮宗の寺院になり、二度目は永禄４（1561）年の柏城没落の際に焼失し、その後は寺の一部である千手堂のみが再建されたという内容である。

（２）野火止用水の終焉について

今回検出された５・６Ｍから出土した遺物についてであるが、５Ｍからは陶磁器を中心に遺物が多く出土したが、６Ｍからは遺物が出土しなかった。ここでは、５Ｍから出土した遺物を検討することで、本地点で検出された野火止用水の機能停止の時期について考えることにしたい。

『志木市史』（志木市　1990）によると、野火止用水は、承応４（1655）年に開削工事が実施され、「野火止新田への生活用水供給を目的に、時の川越城主松平信綱の家臣安松金右衛門を普請奉行として工事が行われ、わずか40日で竣工した」と説明されている。その後、志木市では「昭和40年（1965）までは、市場通りの中央を用水が通り、銀杏並木があった」と説明され、昭和に入ってからもこの用水は庶民の生活に密接な関わりがあったと理解できるであろう。

そこで、本地点の周辺を見てみると、本地点の南側、第33図で「大門」とある位置には東武東上線が通っており、「稲荷道」を切断していることがわかる。つまり、今回の野火止用水跡の機能が停止した時期については、真っ先にこの東武東上線の開通が関係していると考えるのが自然であろう。

東武東上線は、その前身を東上鉄道と呼ばれていた。東上鉄道が開通したのは、池袋駅～田面沢駅間（現在の川越市駅～霞ヶ関駅間の中程に位置）で、大正３（1914）年５月１日である（朝霞市博物館2003）。

おそらく、大正３年の東上鉄道の開通をもって、この野火止用水は機能を失ったものではないだろうか。そこで、５Ｍから出土した遺物の時期が東上鉄道の開通の時期に照合できるか検討したいと思う。

今回、朝霞市教育委員会の野沢　均氏に資料鑑定を依頼したところ、まず言えることは、陶磁器・土器の年代について19世紀後半以降の資料が多く、特に器種としては湯飲茶碗や飯茶碗を主体に日常品であり、宗教関連の資料は極めて少ないということであった。そのため、今回検出された５Ｍ・６Ｍは、生活用水を目的として機能した野火止用水跡の可能性が高いという結論であった。

以上、今回５Ｍから出土した陶磁器・土器は、19世紀後半以降という時期設定で20世紀前半以前であるという設定を条件とするならば、今回の野火止用水が機能を停止した要因は、東上鉄道の開通ということができるであろう。東上鉄道は、後に東武東上線として名称を変え現在に至っているが、こうした

近代化の波が志木市の近世を発展させた舟運の衰退の要因にもなり、庶民の生活様式をも大きく変化させたものであろう。東上鉄道の開通後は野火止用水は機能を失い、空堀になった用水跡は解体され埋め戻されることになったが、その際に近隣の人達あるいは普請を行った者達によって、不用になった食器類が捨てられたのではないかと推測される。

そして新たな生活様式は、それに合った生活用品を誕生させ、生活に深く浸透し、歴史そのものの画期として象徴されるのであろう。

［註］

（１）低地で検出される「周溝をもつ建物跡」では、建物跡にどうして周溝を伴うかが重要な問題であろう。これについては、以前、志木市で『水害と志木』（志木市教育委員会　1988）をテーマに「水塚」の文化財調査を実施したが、その中で、「屋敷の外側に、洪水の際の水流が宅地に激突する勢いを緩和させるための構え堀を設けている」（47頁）という「構え堀」の機能に関係するものではないかとイメージがつながる。

（２）『郷土の地名』は、志木市の地名に関するすべてが詳細に調査されており、その中で野火止用水の流路が示されている。柏町地区については、37頁参照。

（３）『志木市の社寺』（志木市教育委員会　1985）によると、本尊は千手観世音菩薩（木造）で、創建は鎌倉末期から室町中期頃と推定されている。

（４）『舘村旧記』の著者等については、本報告書の11ページ参照。この資料は、志木市において平成８年３月25日付けで市指定文化財に指定されている。種別：有形文化財、種類：古文書・書籍・典籍、所在地：柏町３丁目３番28号、所有者：宮原詳一。

［引用・参考文献］

朝霞市博物館　2003『第12回企画展　朝霞と鉄道』朝霞市博物館

赤塚次郎　1990『廻間遺跡』（財）愛知県埋蔵文化財センター

1994「３・４世紀の東海地域」『東日本の古墳の出現』株式会社　山川出版社

飯島義雄　1998「古墳時代前期における「周溝をもつ建物」の意義」『群馬県立歴史博物館紀要』第19号　群馬県立歴史博物館

井上尚明　2000「考古学から見た古代の神社－もう一つの律令祭祀－」『埼玉県立博物館紀要－25』埼玉県立博物館

2001「古代神社遺構の再検討」『研究紀要』第16号　財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団

今井正文　1990『西Ⅰ遺跡』下日出谷西遺跡群発掘調査会

尾形則敏　1998「志木市田子山遺跡の弥生時代後期の事例について－田子山遺跡第31地点の弥生時代21号住居跡出土の資料－」『あらかわ』創刊号　あらかわ考古談話会

2005「第４章　調査のまとめ　第２節　148号住居跡出土の土師器の胎土分析と考古学的な検証」『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

2006「七世紀における「在地系土師器」の出現と歴史的意義－武蔵野台地北西部の無彩系・黒色系土師器の一事例－」『埼玉の考古学Ⅱ』埼玉考古学会設立50周年記念論文集

尾形則敏・深井恵子　2001『埋蔵文化財調査報告書２』志木市の文化財第31集　埼玉県志木市教育委員会

尾形則敏・深井恵子・青木　修　2004『志木市遺跡群14』志木市の文化財第36集　埼玉県志木市教育委員会

2005『城山遺跡第42地点』志木市遺跡調査会調査報告第10集　埼玉県志木市遺跡調査会

及川良彦　1998「関東地方の低地遺跡の再検討－弥生時代から古墳時代前半の「周溝を有する建物跡」を中心に－」『青山考古』第15号　青山考古学会

佐々木保俊　1987『新邸遺跡第２地点　西原大塚遺跡第４地点発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第３集　志木市遺跡

調査会

1991「第3章　新邸遺跡第3地点の調査」『西原大塚遺跡第7地点　新邸遺跡第3地点　中野遺跡第7地点　中野遺跡第8地点　城山遺跡第6地点発掘調査報告書』志木市の文化財　第15集　埼玉県志木市教育委員会

佐々木保俊・尾形則敏　1986『新邸遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第2集　埼玉県志木市遺跡調査会

1988『城山遺跡発掘調査報告書』志木市遺跡調査会調査報告第4集　埼玉県志木市遺跡調査会

志木市　1988『郷土の地名』

1990『志木市史　通史編上』

志木市教育委員会　1985『志木市の社寺』志木市の文化財第10集　埼玉県志木市教育委員会

1988『水害と志木』志木市の文化財第12集　埼玉県志木市教育委員会

斯波　治　1989『埼玉県指定史跡「野火止用水」本流　発掘調査報告書』新座市遺跡調査会

田中茂良　1993「竈構造に関しての一考察」『研究紀要Ⅱ』市原市埋蔵文化財センター

福田　聖　1999「埼玉県における低地の周溝墓と建物跡（1）－周溝墓とは何かを探るための試み－」『埼玉考古』第34号　埼玉考古学会

［付　　編］

自 然 科 学 分 析

Ⅰ．赤色塊の成分分析

藤根　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

新邸遺跡第８地点の調査では、古墳時代後期の９号住居跡（９Ｈ）から赤色塊が検出された。

ここでは、赤色塊の材質を検討するために蛍光Ｘ線分析およびＸ線回折分析を行った。

2．試料と方法

試料は、９Ｈの覆土中に含まれる赤色塊（赤色 10R 5/8）であり、最大20㎜程度の塊が多く含まれていた。赤色塊の分析は、化学組成を調べるために蛍光Ｘ線分析を行い、鉱物組成を調べるためにＸ線回折分析を行った。なお、赤色塊の一部を水で溶いて光学顕微鏡観察を行った。

蛍光Ｘ線分析は、典型的な赤色物についてアクリル板試料台に載せて点分析した。測定は、Ｘ線分析顕微鏡（㈱堀場製作所製 XGT－5000TypeⅡ）を用いた。測定条件は、Ｘ線導管径100μm、電圧50KV、電流自動設定、測定時間500sec である。なお、定量計算は、標準試料を用いない FP 法（ファンダメンタルパラメータ法）で半定量分析を行った。

Ｘ線回折分析は、６㎜程度をメノウ乳鉢で粉末化し、スライドグラス上に展開・乾固した。測定は、㈱リガク製デスクトップＸ線回折装置 MiniFlex で行った。測定条件は、電圧30kV、電流15mA、Cu-Ｘ線管、走査範囲６～100°、計数時間1.0sec、ステップ幅0.02°の連続測定を行った。鉱物の同定は、付属の定性分析プログラムにより鉱物種の同定を行った。

3．結果および考察

蛍光Ｘ線分析では、典型的な赤みの強い部分（第20表の試料 No1・2)では、鉄のピークが明瞭に検出され、半定量分析において酸化鉄（Fe2O3）が最大89.23％と高い値であった（第20表、第35図の蛍光Ｘ線スペクトル図)。

また、Ｘ線回折分析では、ヘマタイト（赤鉄鉱:Hematite）および石英（Quartz）が明瞭に検出された（第35図のＸ線回折スペクトル図)。

さらに、赤色塊を水で溶いて光学顕微鏡で観察したところ、直径2.5μm 前後、最大長さ50μm の赤色のパイプ状ベンガラが確認された（第35図の蛍光Ｘ線スペクトル図の顕微鏡写真)。

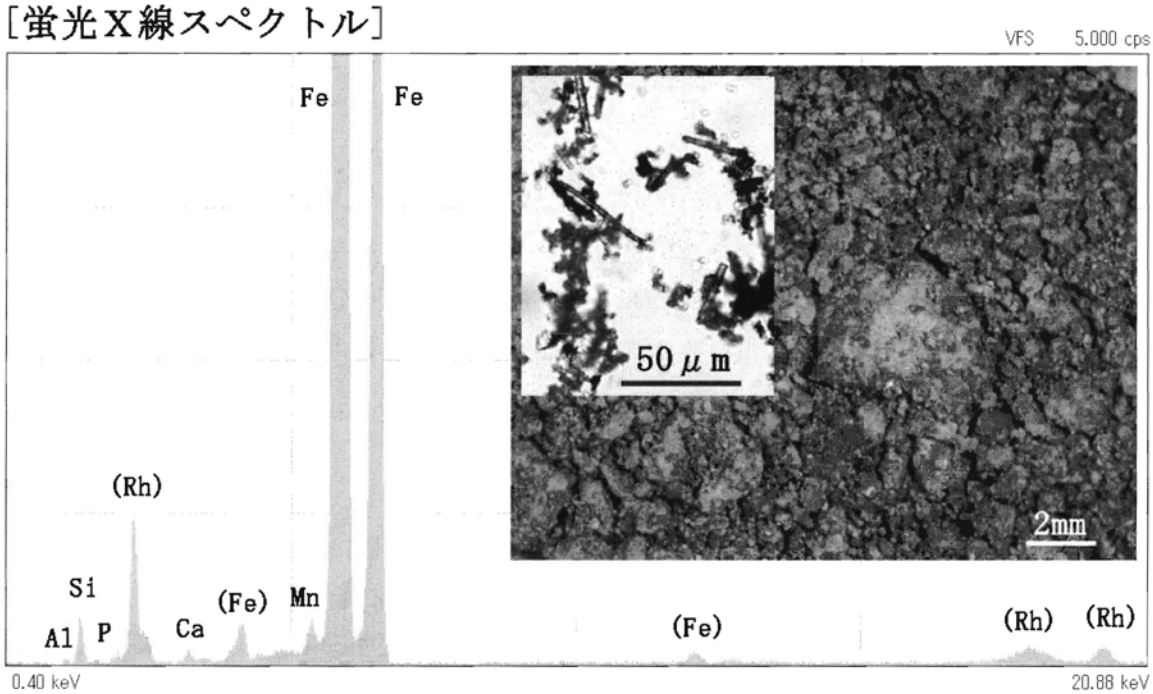
以上のことから、鉄の化合物（主に赤鉄鉱など）を焼いたベンガラと考える。

ベンガラは、大きく鉄細菌系と非鉄細菌系に分かれる（馬淵・杉下・三輪・沢田・三浦　2003)。鉄細菌系のベンガラとしては、パイプ状ベンガラが知られており、珪藻化石を伴うことから崖端の湧水部

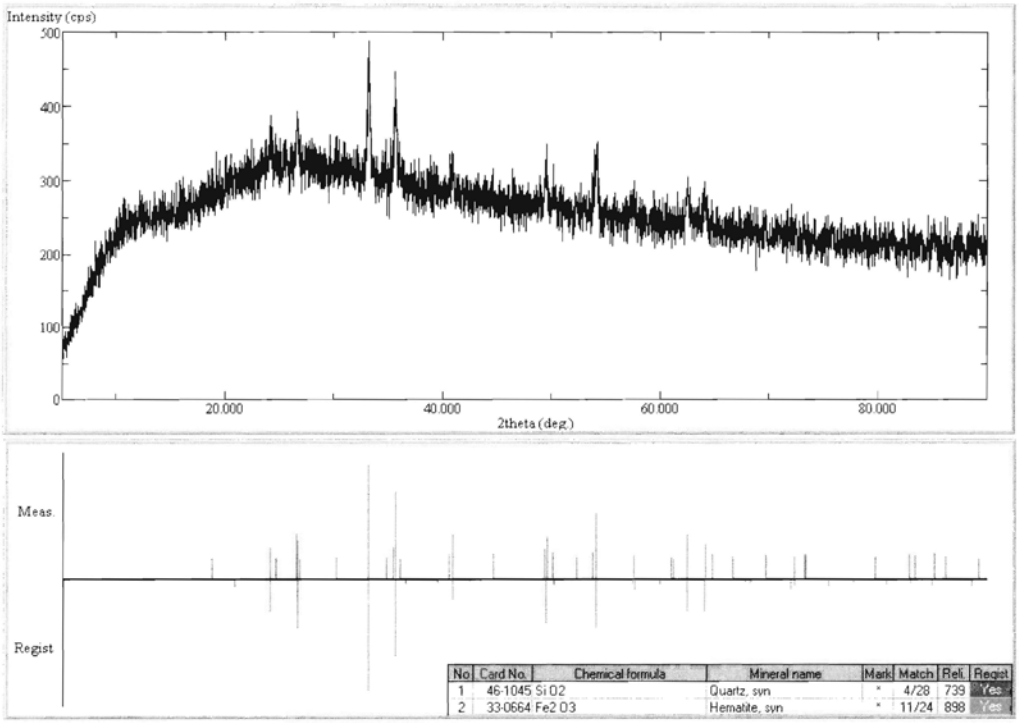
試料	試料 No	Al_2O_3	SiO_2	P_2O_5	K_2O	CaO	MnO	Fe_2O_3	Total
赤色塊	1	1.48	8.56	0.26	0.06	0.17	0.23	89.23	99.99
	2	0.51	11.63	0.32	0.01	0.21	0.17	87.16	100.01
平　均		1.00	10.10	0.29	0.04	0.19	0.20	88.20	

第20表　分析顕微鏡による蛍光Ｘ線分析結果（半定量分析）

［蛍光X線スペクトル］



［X線回折スペクトル］



［蛍光X線スペクトル図］

元素記号　Al:ｱﾙﾐﾆｳﾑ、Si:ケイ素、P:ﾘﾝ、Ca:ｶﾙｼｳﾑ、Mn:ﾏﾝｶﾞﾝ、Fe:鉄、(Rh:ﾛｼﾞｳﾑ)

［X線回折スペクトル図］

鉱物名　Hematite:ヘマタイト（赤鉄鉱）、Quartz:石英

第35図　赤色塊の蛍光X線スペクトル図及びX線回折スペクトル図

や水田などの環境下で生成されたことが考えられている（岡田　1997）。

試料は、パイプ状ベンガラが認められたことから、鉄細菌系のベンガラであり、赤色顔料に使用したことが考えられる。

4．おわりに

ここでは、新邸遺跡第８地点の古墳時代後期の住居跡から出土した赤色塊について、化学組成を調べるために蛍光Ｘ線分析を行い、鉱物組成を調べるためにＸ線回折分析を行った。その結果、赤色塊は、鉄 Fe が特徴的に多く検出され、また赤鉄鉱も含まれ、かつパイプ状ベンガラが確認されたことから、鉄細菌系のベンガラであることが分かった。このことから、この赤色塊は、赤色顔料として使用された赤色塊と考えられる。

［引用文献］

馬淵久夫・杉下龍一郎・三輪嘉六・沢田正昭・三浦定俊　2003『文化財科学の事典』P522 朝倉書店

岡田文男　1997「パイプ状ベンガラ粒子の復元」『日本文化財科学会第14回大会研究発表要旨集』P38・39

Ⅱ．出土人骨について

黒澤 一男（パレオ・ラボ）

1．はじめに

埼玉県志木市柏町５丁目の新邸遺跡第８地点において多数の人骨の骨片が出土した。以下に出土した人骨の観察所見を記す。

同定に際しては、国立歴史民族博物館の西本研究室所蔵の標本を使用させていただいた。ここに感謝の意を表する。

2．出土人骨所見

人骨はおおむね灰白色の焼骨であり、骨幹部の破片には焼骨特有の湾曲したひび割れが多数確認される。それらは数cm程度の小さな破片となっているものがほとんどであるため同定にいたるものは少ない。また破片を接合しようと試みていくつかのものは接合することはできたが、焼骨であるため変形が著しく、かつ脆弱な状態であるため接合面が崩壊し、大半のものは接合にはいたらなかった。

同定した結果を第22表に記し、以下に遺構ごとにそれらの特徴を記す。

【21Ｄ出土人骨】

21Ｄより出土した骨片からは、頭蓋骨・椎骨・四肢骨などが認められた（第21表）。

頭蓋骨は２cm弱の板状骨小片と２cm角の骨片の２片のみ検出されており、板状骨の骨厚は、およそ３mm程度と薄く、一辺が縫合面となっている。なお小片であるため位置などは不明である。もう１つの骨片は、内耳道がみられ、側頭骨の錐体部である。

四肢骨は破片化しており、多くは細片となっている。また、焼骨に特徴的に認められる湾曲したひび割れが多数確認される。同定されたものとしては、大腿骨、橈骨と腓骨があるが、破片化しているため、全体の形状を把握することができず、性別や年齢などの特徴を検討することはできない。しかし大腿骨と橈骨など骨端が検出されており、これらの骨端は骨化が完了していることから成人の骨と考えられる。

そのほかに、椎骨や仙骨(?)、肋骨、寛骨、膝蓋骨、踵骨や足根骨、中手骨または中足骨、指骨が検出されている。いずれも破片化し、変形しているため、全体の形状を把握することができず、詳細な検討にはいたらない。

【22D出土人骨】

22Dより出土した骨片からは、歯のみ同定された（第21表）。そのほかに海綿質のかたまりと、細片化した緻密質の骨片が検出されているが、いずれも同定にはいたらない。

歯は左上顎第2小臼歯で、歯根部が欠如しており、歯冠部のみ検出されている。焼かれているため、詳細な検討にはいたらないが、咬頭が残存し、咬耗がさほど進行していないことから年齢のそれほどいっていない青年から壮年と考えられる。

3．おわりに

新邸遺跡第8地点から検出された人骨は、焼骨であり、破片化しているため、性別や年齢など詳細な検討にはいたらないが、21Dおよび22Dの両者とも成人のものと考えられ、22Dより出土した人骨は青年から壮年の可能性が高いと考えられる。

遺構番号	No.	部　位	左右	残存状態	備　考
21D	図版17- 1	頭蓋骨			
	図版17- 2	側頭骨	右	錐体破片	
	図版17- 3	椎骨		椎体破片	4個
	図版17- 4	椎骨		椎弓破片	2個
	図版17- 5	肋骨		骨幹部破片	3個
	図版17- 6	肋骨		骨幹部破片	
	図版17- 7	腓骨		骨幹部	
	図版17- 8	橈骨		近位部破片	
	図版17- 9	寛骨	右	腸骨体破片	
	図版17-10	大腿骨	左	大腿骨滑車	
	図版17-11	大腿骨	左	遠位部後面破片	
	図版17-12	大腿骨	右	骨幹部	
	図版17-13	膝蓋骨			
	図版17-14	脛骨（？）		近位部破片	
	図版17-15	踵骨	左		
	図版17-16	足根骨			
	図版17-17	足根骨			
	図版17-18	中手 or 中足骨		近位部	
	図版17-18	中手 or 中足骨		骨幹～遠位部	2個
	図版17-19			骨幹～遠位部	2個
	図版17-19	中手 or 中足骨		近位～骨幹部	
	図版17-19	中手 or 中足骨		遠位部	
	図版17-20	指骨		骨幹～遠位部	
	図版18	仙骨（？）		椎体破片	
		四肢骨		骨幹部破片	
		不明		海綿質破片	
		不明		骨幹部破片	
		不明		骨端部破片	
22D	図版17-21	上顎第2小臼歯	左	歯冠部	
	図版17-22	不明		骨端部破片	
	図版17-23	不明		骨幹部破片	破片多数

第21表　出土人骨観察表

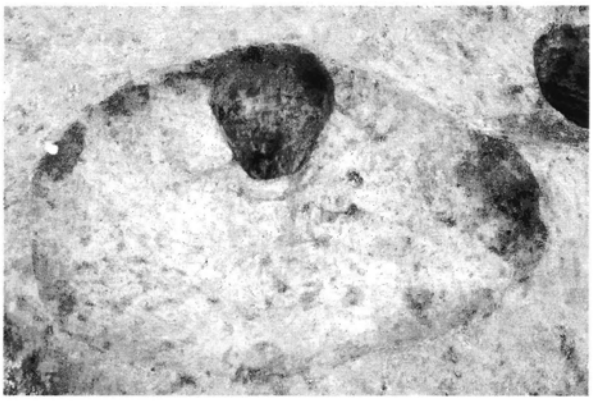
図　　版

1．調査区近景

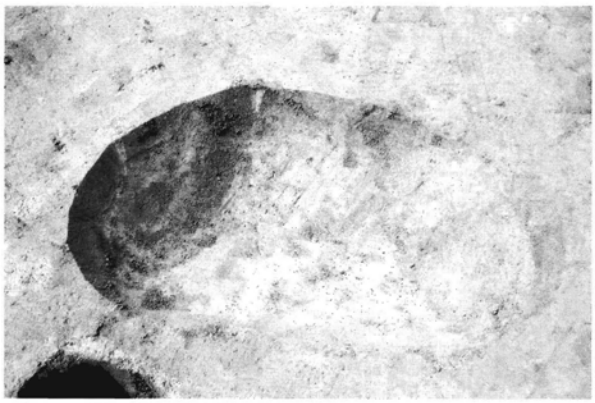
2．確認調査風景

3．表土剥ぎ風景

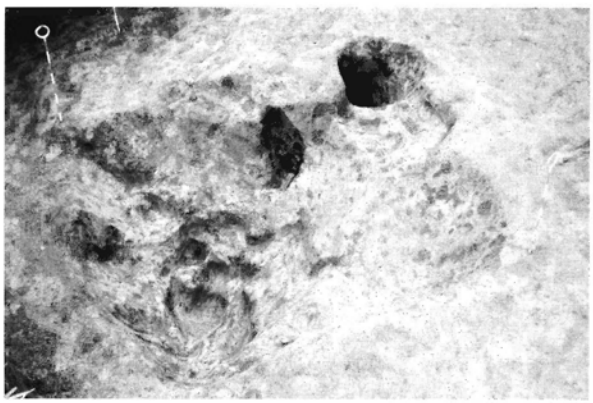
4．基本層序



5．25号土坑



6．26号土坑

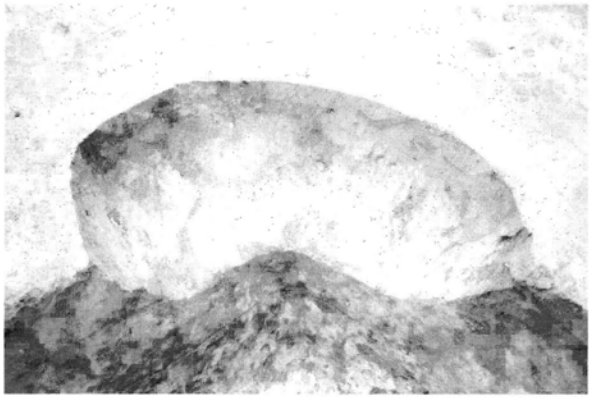


7．28号土坑

8．29号土坑

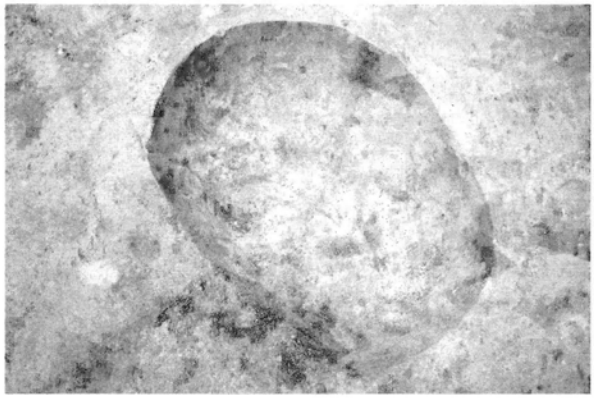
図版2

1．30号土坑



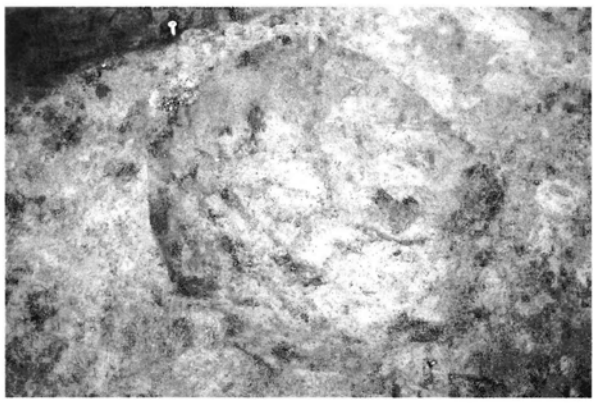
2．32号土坑

3．33号土坑

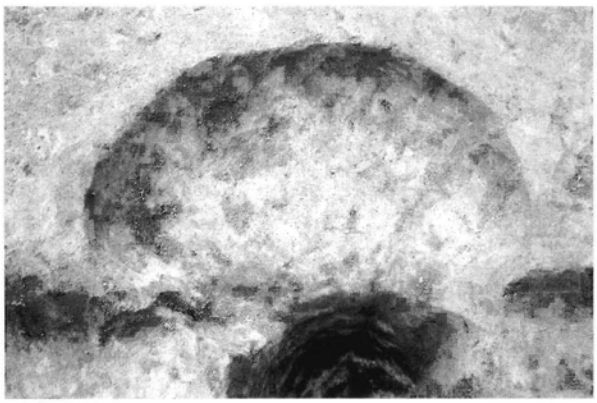


4．35号土坑

5．36号土坑

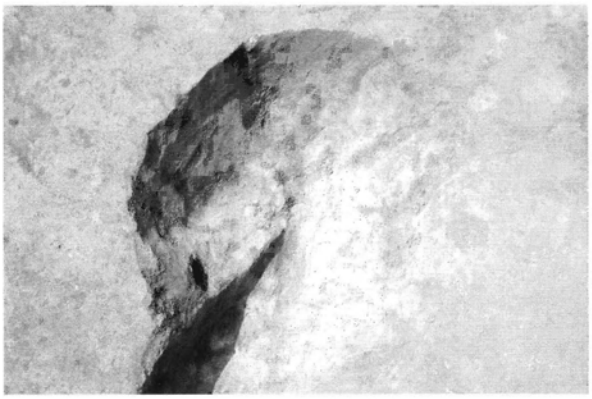


6．37号土坑

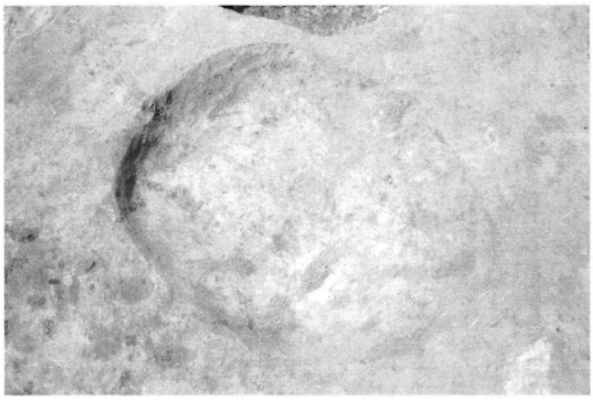


7．38号土坑

8．39号土坑



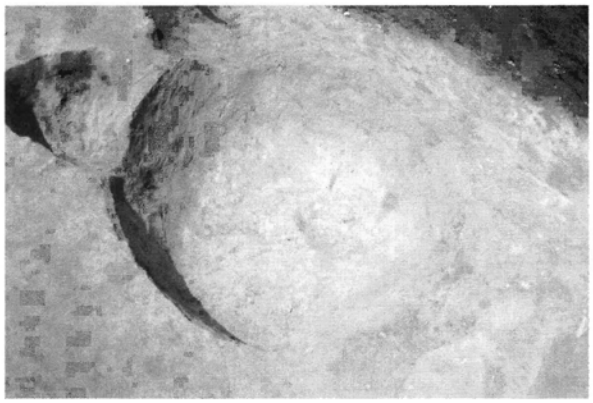
1．40号土坑



2．41号土坑

3．42号土坑

4．43号土坑



5．44号土坑

6．45号土坑

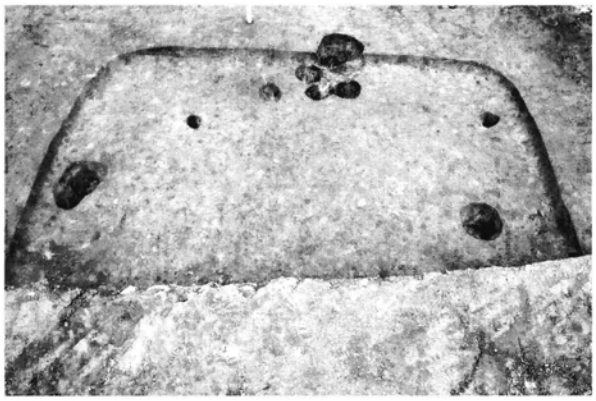
7．46・47号土坑

8．調査風景

1．2号住居跡

2．2号住居跡凸堤

3．2号住居跡粘土板炉



4．3号住居跡

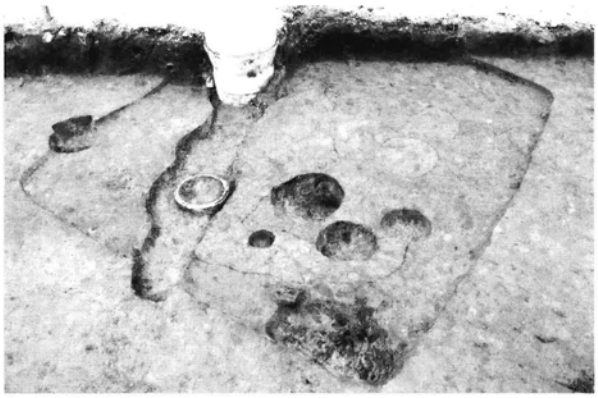
5．3号住居跡遺物出土状態

6．3号住居跡遺物出土状態

7．4号住居跡

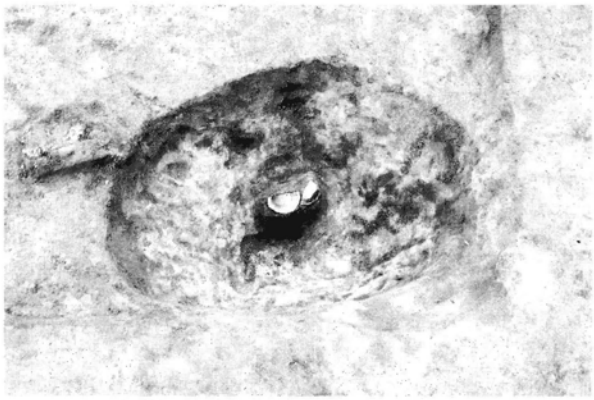
8．4号住居跡貯蔵穴

1．5号住居跡



2．6号住居跡

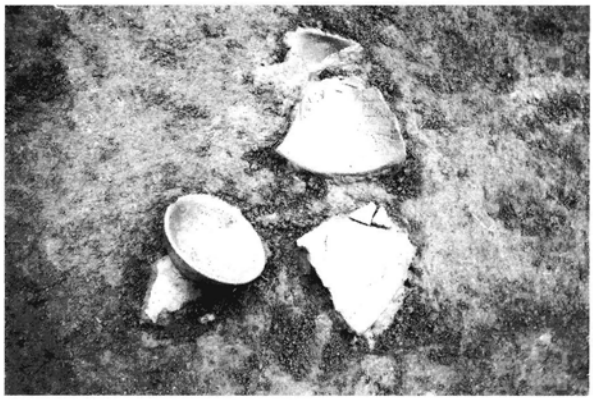
3．6号住居跡炉跡付近



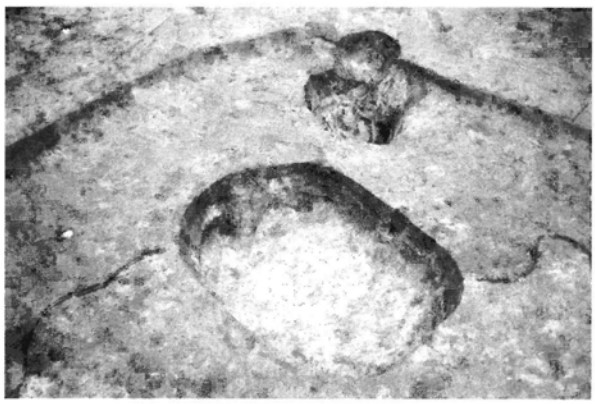
4．6号住居跡貯蔵穴

5．7号住居跡

6．8号住居跡



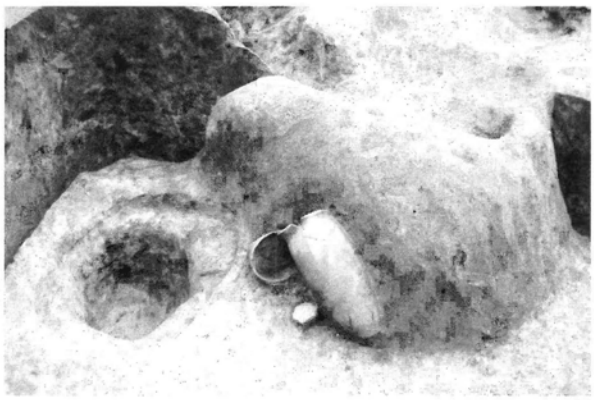
7．8号住居跡遺物出土状態



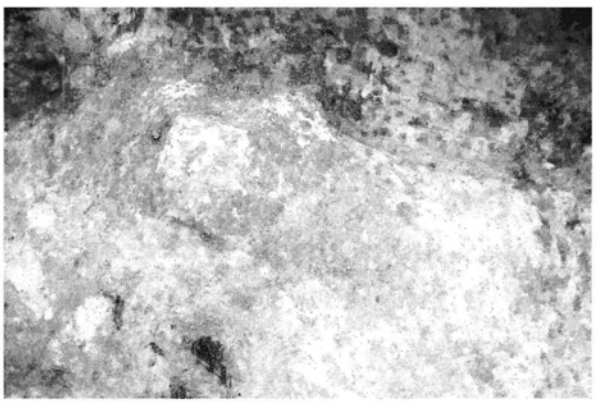
8．8号住居跡貯蔵穴A

1．9号住居跡遺物出土状態

2．9号住居跡遺物出土状態

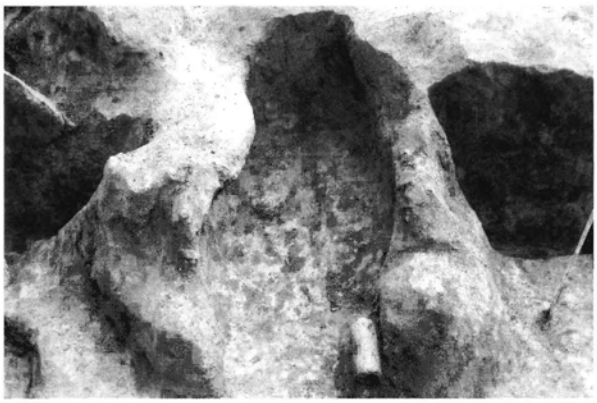


3．9号住居跡貯蔵穴付近

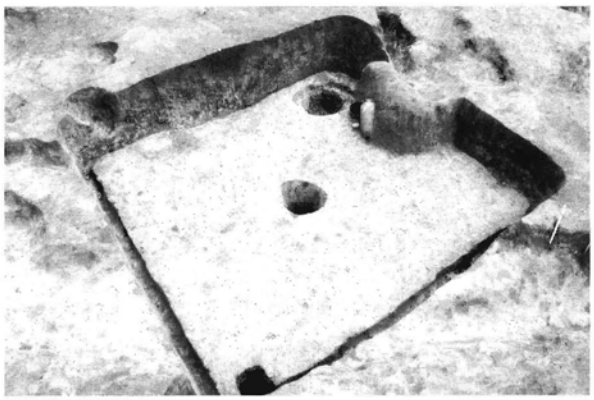


4．9号住居跡粘土・ベンガラ出土状態

5．9号住居跡炭化材出土状態

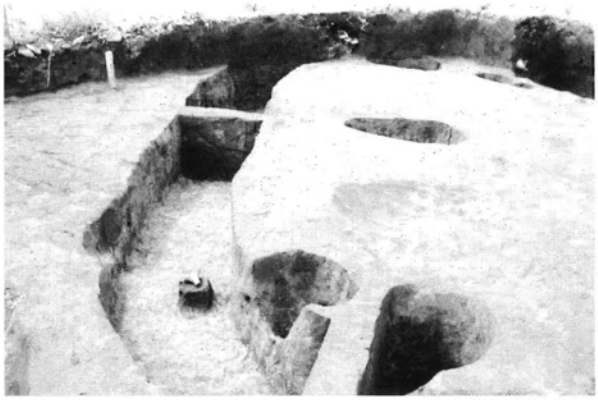


6．9号住居跡カマド

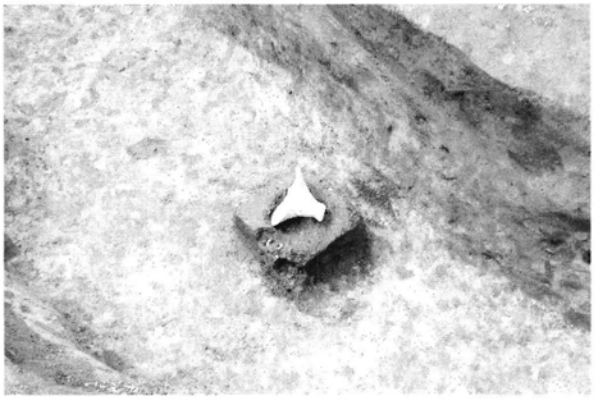


7．9号住居跡

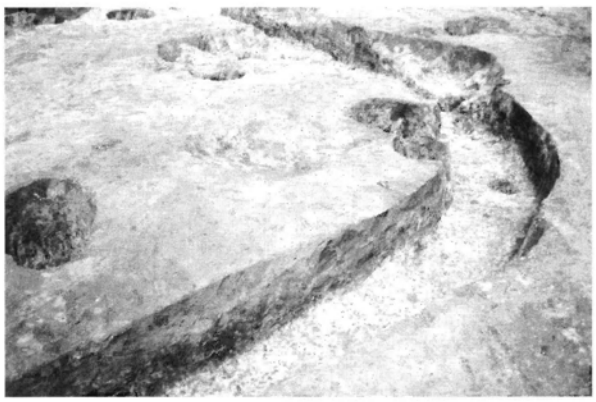
8．10号住居跡



1．1号方形周溝墓遺物出土状態



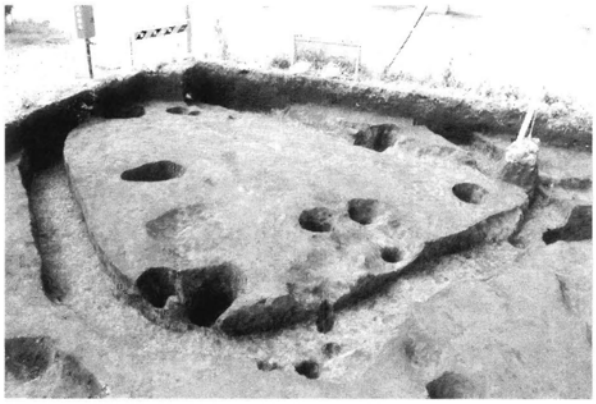
2．1号方形周溝墓遺物出土状態



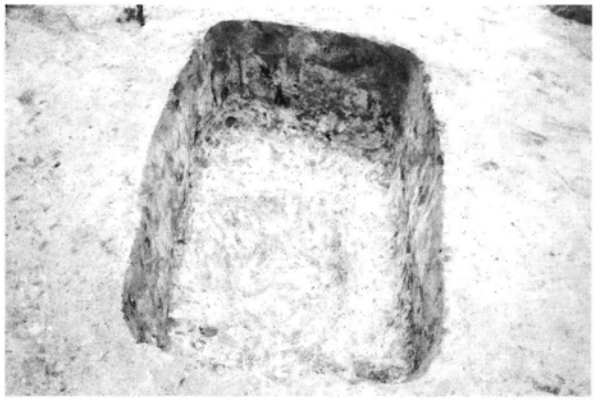
3．1号方形周溝墓南コーナー

4．1号方形周溝墓南西溝

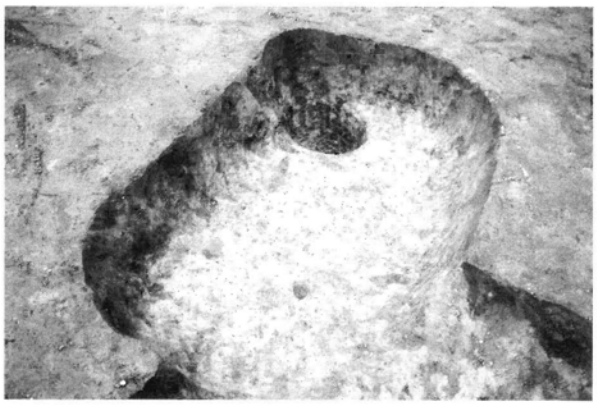
5．1号方形周溝墓南東溝



6．1号方形周溝墓



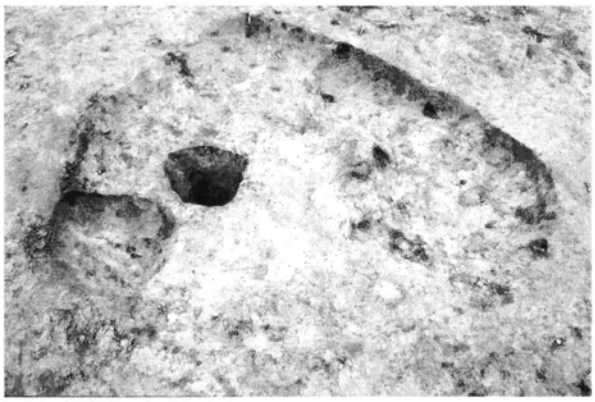
7．31号土坑



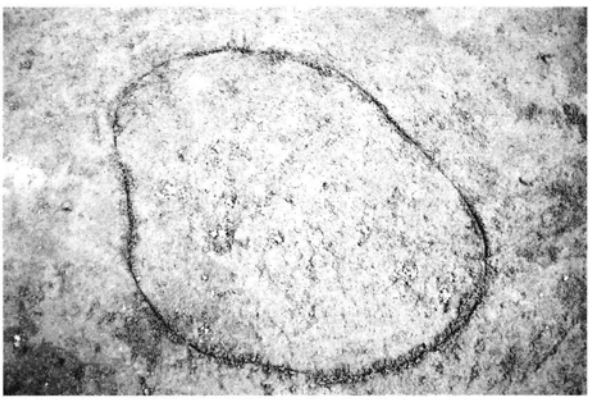
8．34号土坑

1．21号土坑人骨出土状態

2．21号土坑人骨出土状態

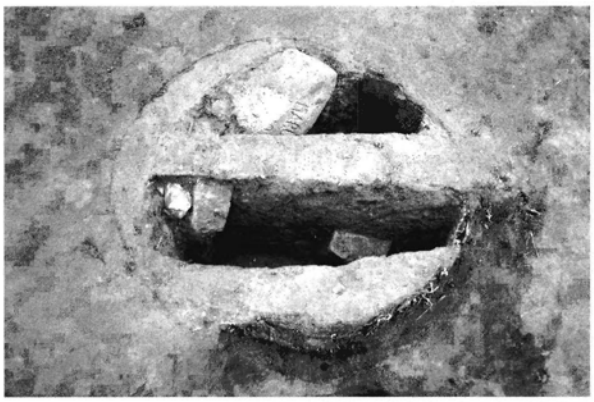


3．21号土坑

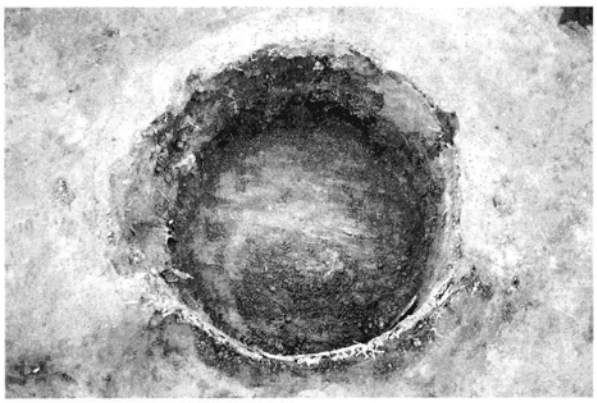


4．22号土坑人骨出土状態

5．23号土坑



6．27号土坑遺物出土状態



7．27号土坑

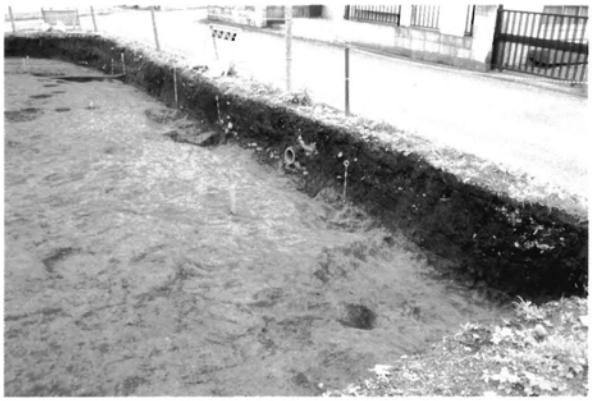
8．2号井戸跡

1．5号溝跡発掘風景

2．5号溝跡礫出土状態

3．5号溝跡礫出土状態

4．5号溝跡



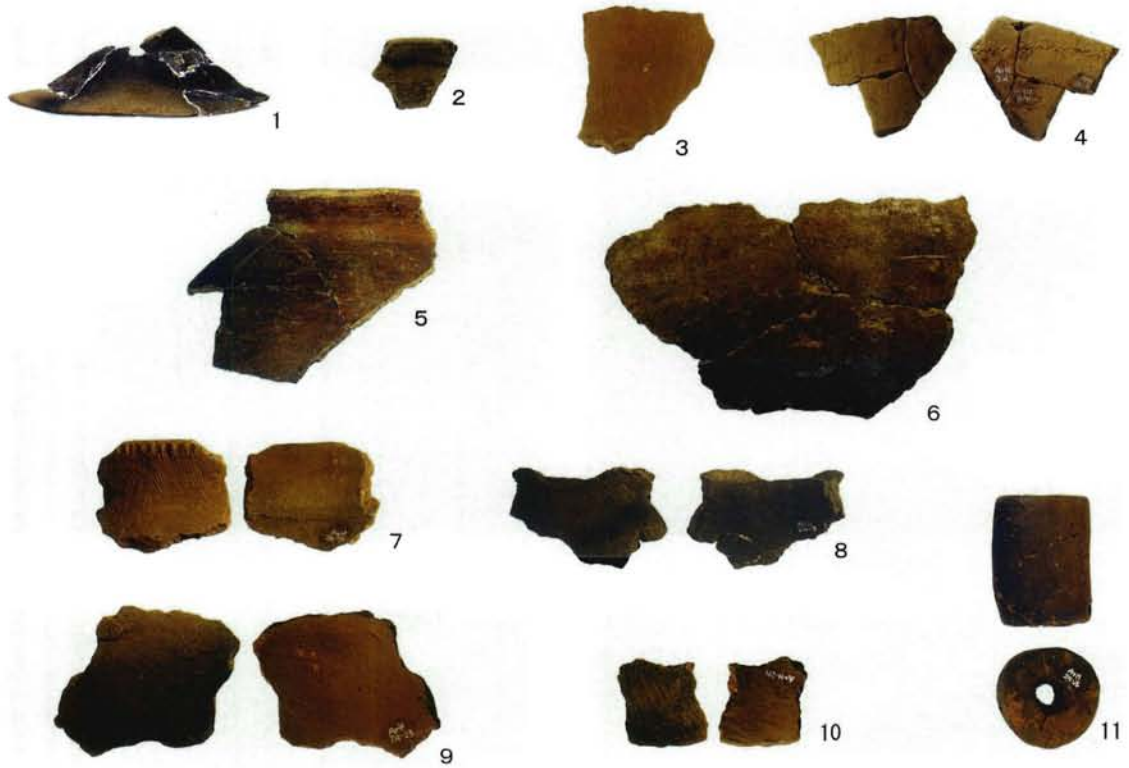
5．5号溝跡

6．6号溝跡

7．6号溝跡

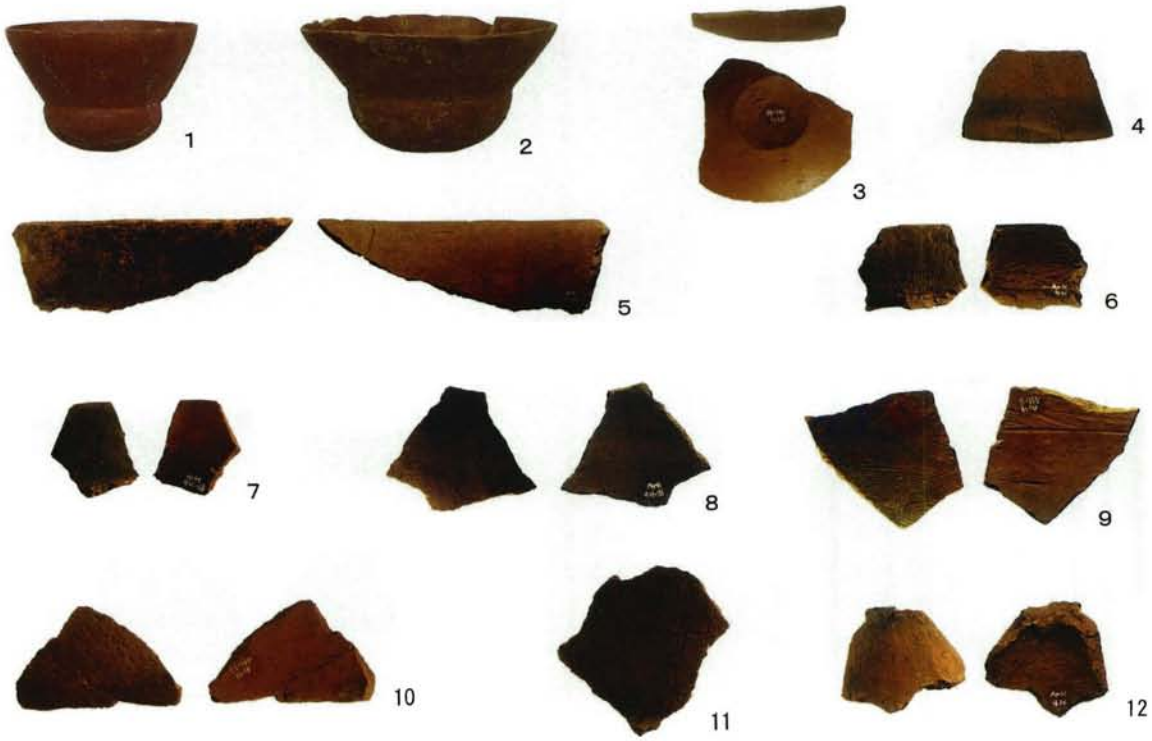
8．6号溝跡

1．土坑・ピット出土遺物

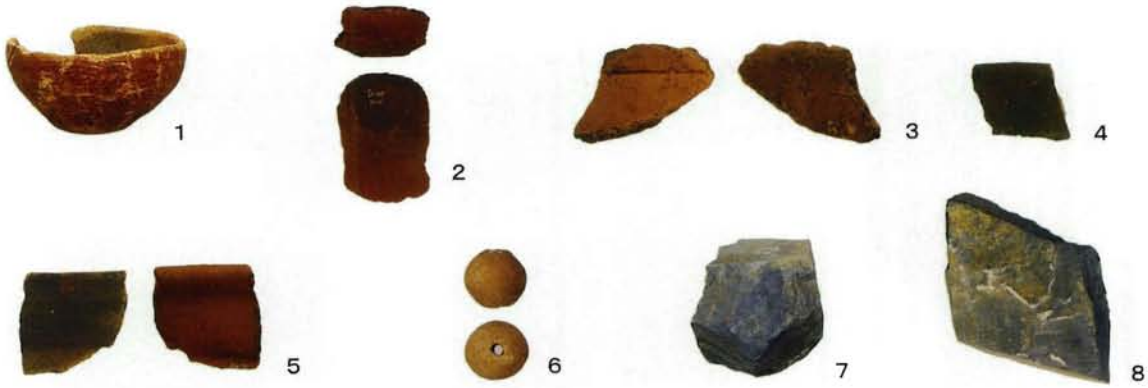


2．2号住居跡出土遺物

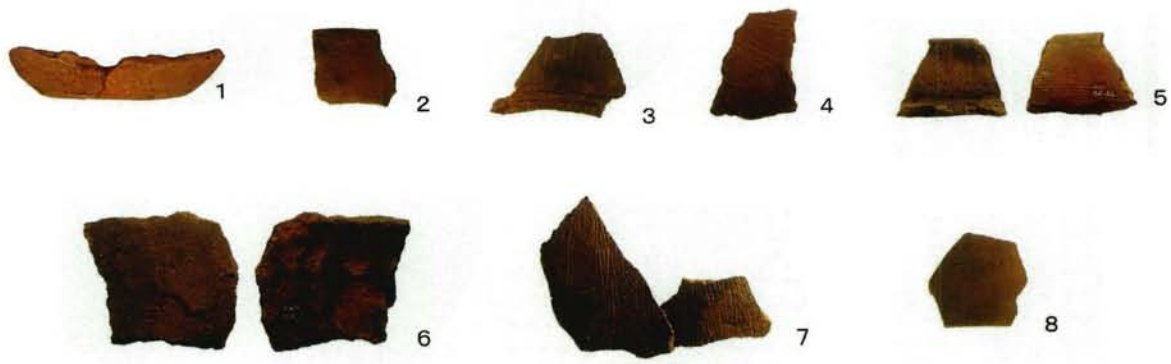
3．3・5号住居跡出土遺物



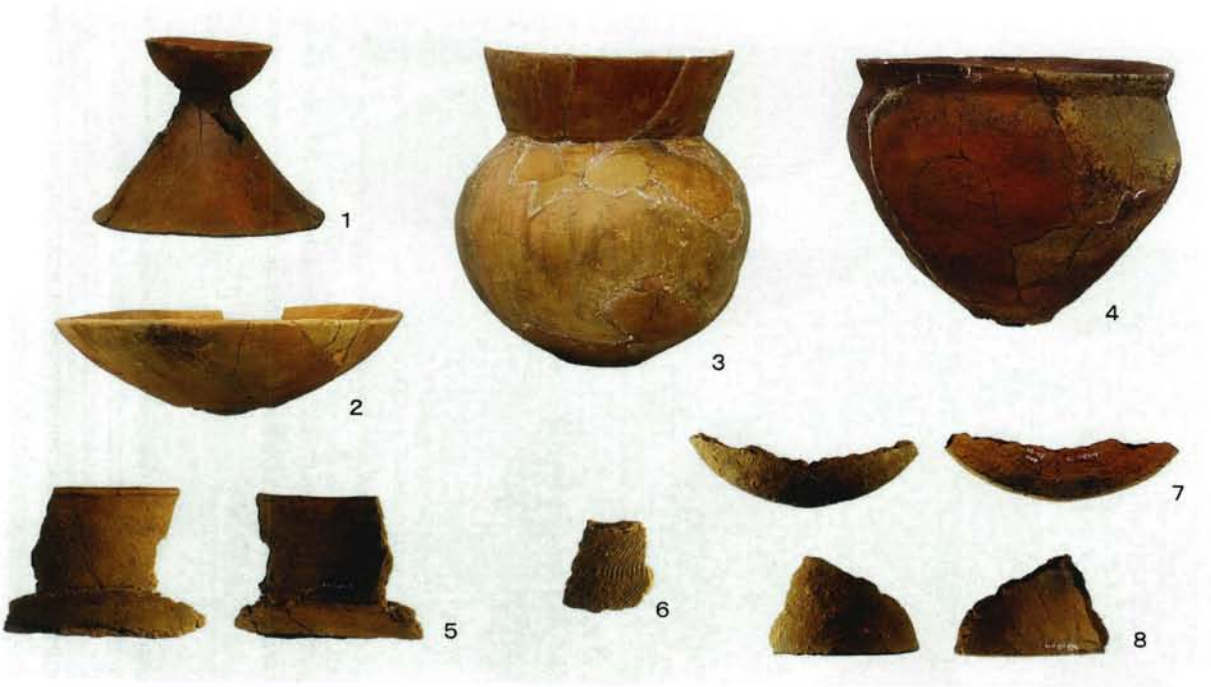
1．4号住居跡出土遺物



2．6号住居跡出土遺物

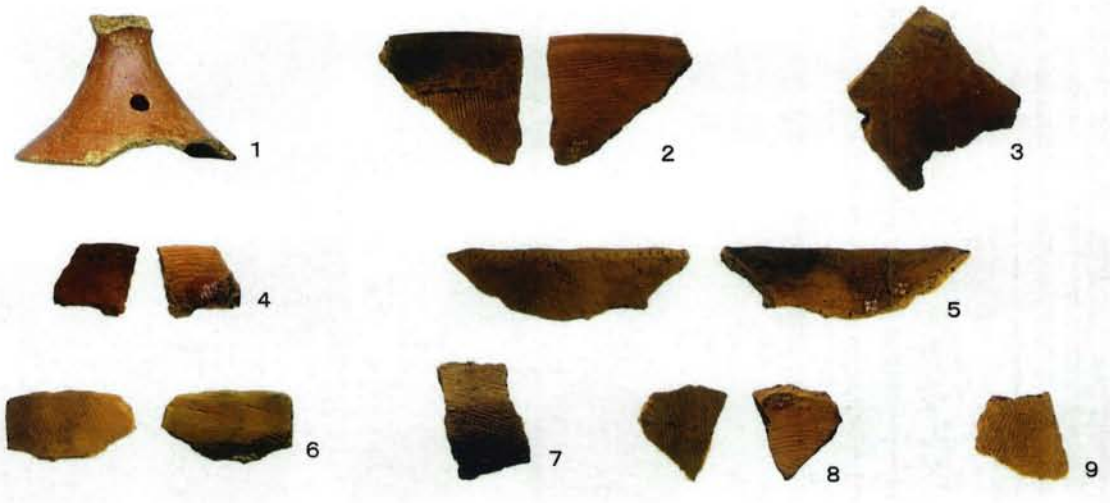


3．7号住居跡出土遺物

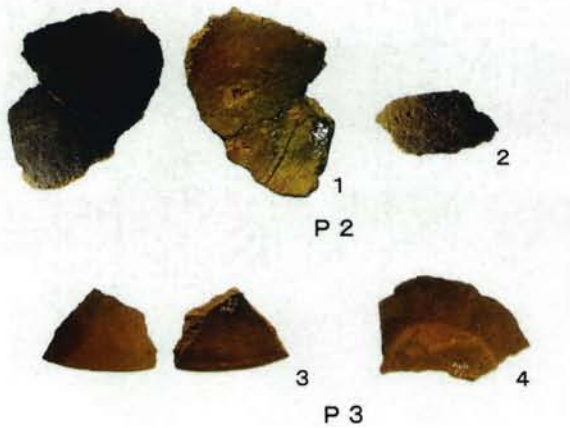


1．8号住居跡出土遺物

2．9号住居跡出土遺物

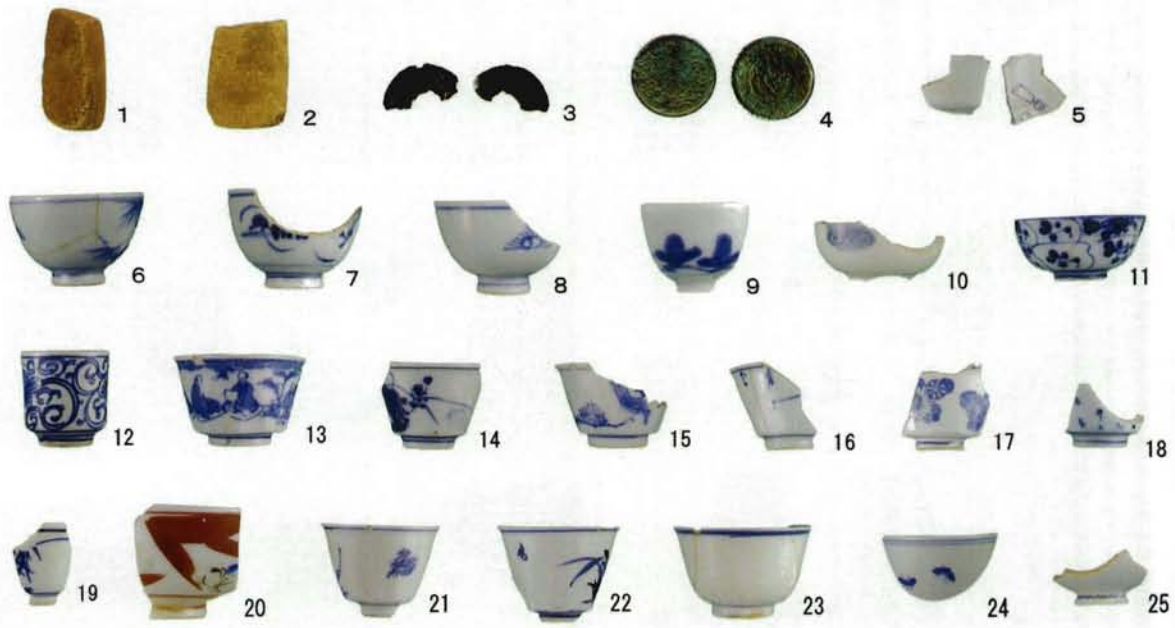


1．1号方形周溝墓出土遺物



2．ピット出土遺物

3．21・27号土坑出土遺物



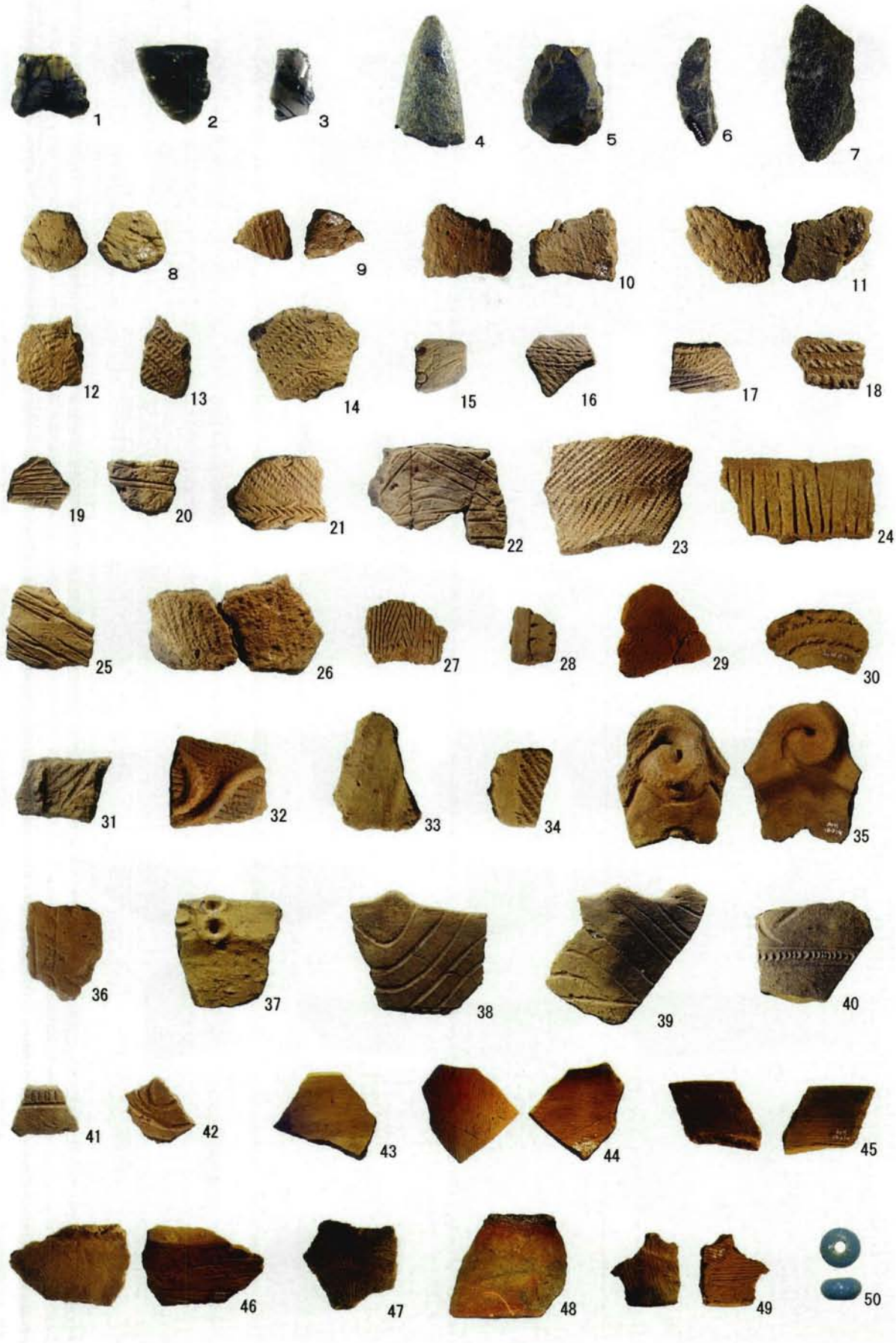
4．5号溝跡出土遺物 1

26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72

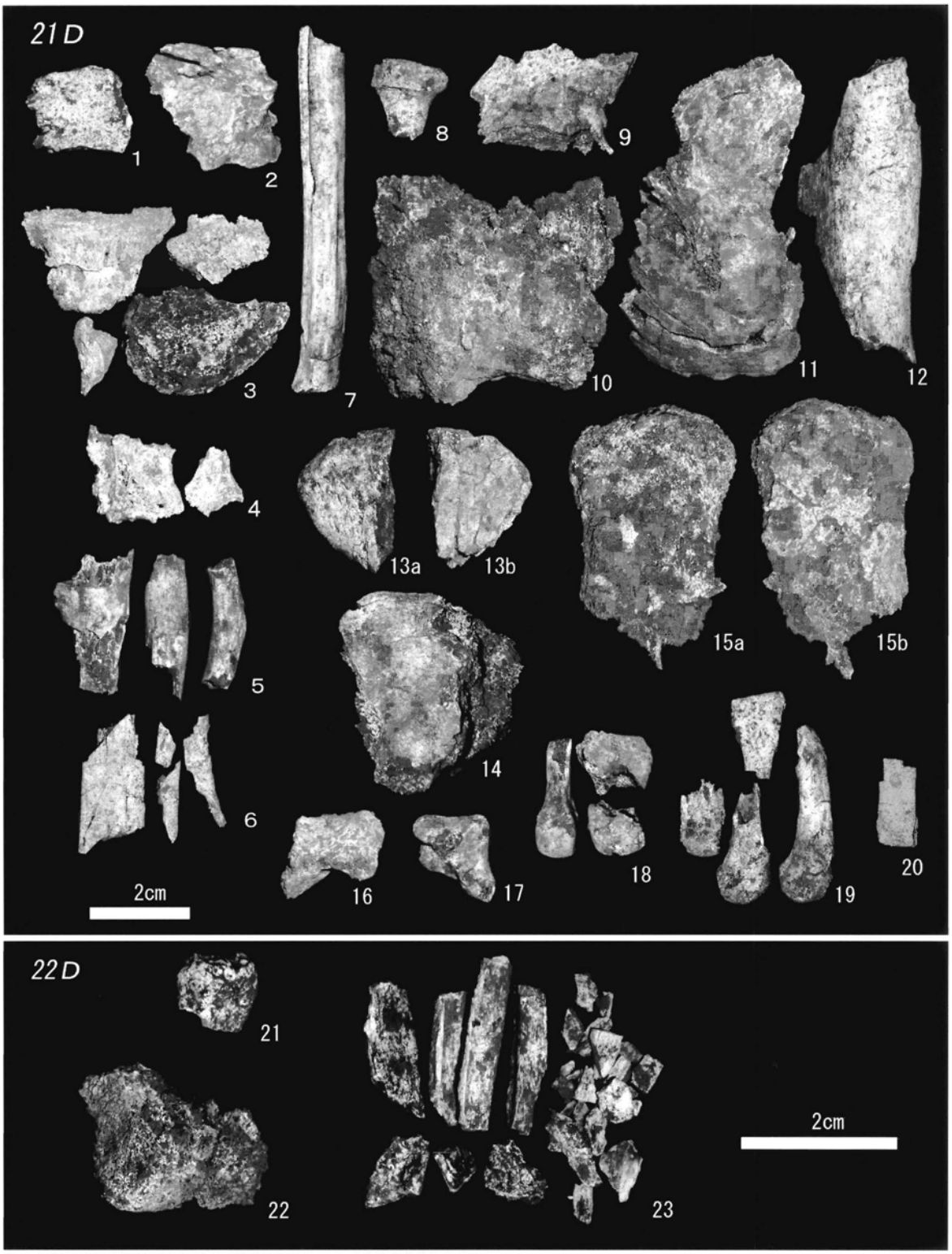
5号溝跡出土遺物　2

73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
95
96
97
98
99
100
101
102
103
104
105
106
107
108
109
113
114
110
111
112
115
116

5号溝跡出土遺物　3

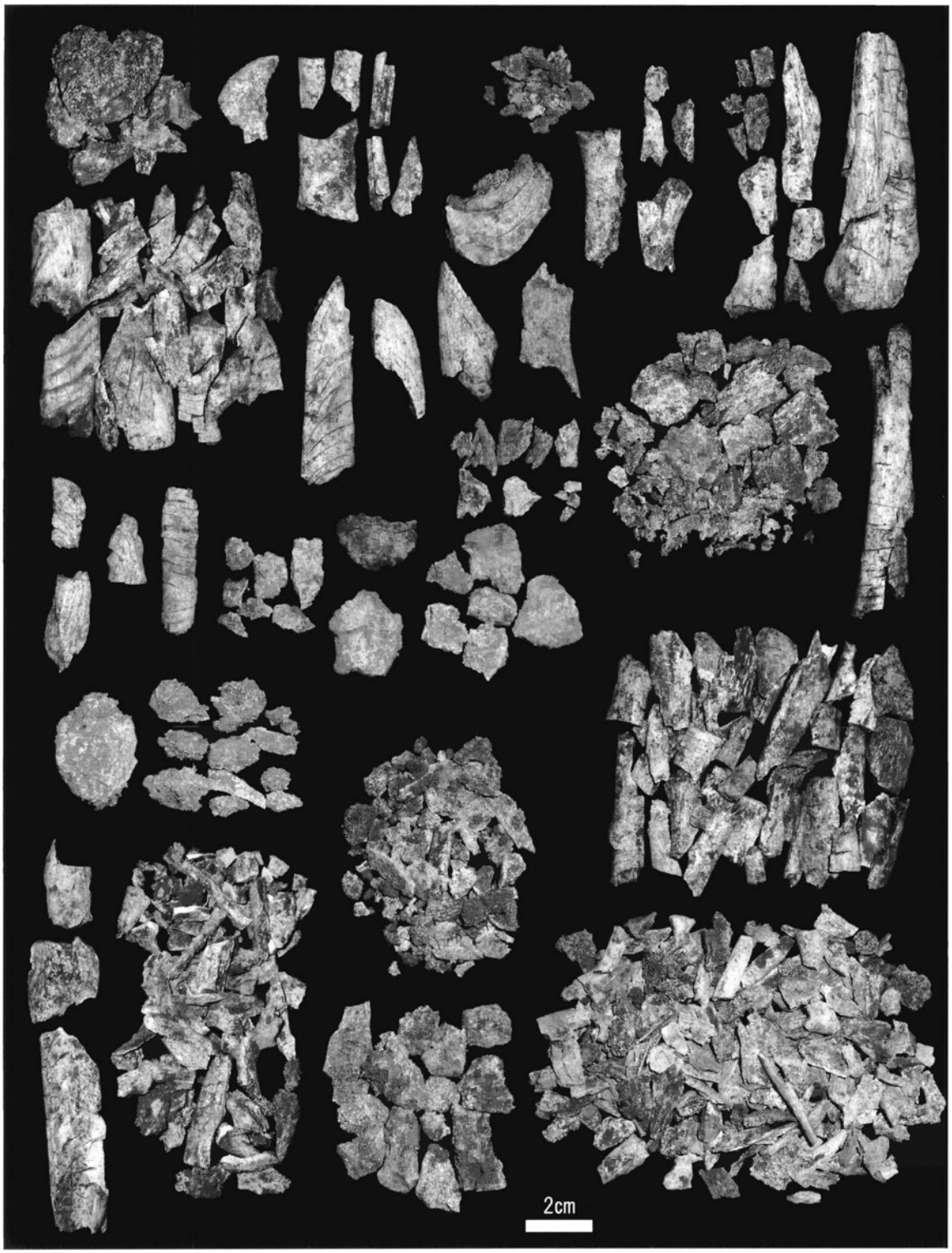

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50

遺構外出土遺物



21・22号土坑出土人骨

1．頭蓋骨　2．側頭骨 右 錐体（下面）　3．椎骨 椎体　4．椎骨 椎弓　5・6．肋骨　7．腓骨
8．橈骨 近位部　9．寛骨 右　10～12．大腿骨（10：左 大腿骨滑車　11：遠位部　12：骨幹部）
13．膝蓋骨（a：前面　b：後面）　14．脛骨 近位部　15．踵骨 左（a：側面　b：内面）
16・17．足根骨　18・19．中手骨または中足骨　20．指骨　21．左上顎第2小臼歯　22・23．不明骨片



21号土坑出土人骨（破片）

報 告 書 抄 録

ふりがな	あらやしきいせきだい8ちてん　まいぞうぶんかざいはっくつちょうさほうこくしょ		
書　　名	新邸遺跡第8地点　埋蔵文化財発掘調査報告書		
副 書 名		巻　　次	
シリーズ名	志木市遺跡調査会調査報告	巻　　次	第11集
編 著 者	尾形則敏　　深井恵子　　青木　修		
編集機関	埼玉県志木市遺跡調査会		
所 在 地	〒353－0002　埼玉県志木市中宗岡1丁目1番1号　TEL 048（473）1111		
発行年月日	平成19（2007）年7月31日		

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （°′″）	東経 （°′″）	調査期間	調査面積 （㎡）	調査原因
新邸遺跡 （第8地点）	志木市柏町 5丁目3020－1 ・2他1筆	11228	008	35° 49′ 41″	139° 34′ 03″	20030616 ～ 20030807	471.41	共同住宅建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構		主な遺物	特記事項
新邸遺跡 （第8地点）	集落	縄文時代	土坑	21基	土器小片	
		古墳時代前期	住居跡 方形周溝墓 土坑	8軒 1基 2期	土器・ガラス小玉 土器	1方の方台部から柱穴が配置良く検出されたことから、同遺構に伴うものと考えた。
		古墳時代後期	住居跡	1軒	土師器・ベンガラ	9Hからはベンガラが出土した。
		中世以降	火葬墓 土坑 井戸跡 溝跡	2基 2基 1基 2本	人骨・六文銭 陶磁器・土器・石製品・銅銭	六文銭は高熱により変形し、銭貨の特定はできなかった。 溝跡とした5・6Mは野火止用水跡と考えられる。溝底からは多くの陶磁器・土器などが出土した。

志木市遺跡調査会調査報告　第11集

新邸遺跡第８地点

埋蔵文化財発掘調査報告書

発　行　埼玉県志木市遺跡調査会
埼玉県志木市中宗岡１丁目１番１号
発行日　平成19（2007）年７月31日
印　刷　株式会社 白 峰 社